南アジア古典学（South Asian Classical Studies）17, 2022

Kalpalatā と Avadānamālā の研究（11）
— TJAM 第16章〜第19章 —

九州大学　　**岡野 潔**

ネパールの仏伝アヴァダーナマーラー
梵文 Tathāgatajanmāvadānamālā の研究

南アジアでの二千年に及ぶ「発達仏伝」の形成と伝承の一終着点となる、梵語で書かれた巨大な釈尊の伝記たる『如来出生アヴァダーナマーラー』 Tathāgatajanmāvadānamālā（略号 TJAM）の第16章〜第19章の梵文テクストの校訂・翻訳を本稿は行う。

この作品はネワール仏教のシャーキャたちによって、17世紀の Jayamuni が率いる Mahābauddha 寺の活動に促されて初めて作られたと私は推測しているが[1]、この釈尊伝の作品制作にあたっては、釈尊（Mahābuddha）への信仰を高めるため、インド仏教の全盛時代に作られてネパールに伝わった複数のサンスクリット仏伝の伝承をうまく一つに統合して、プラーナ文献の如くにシュローカを基調とする形式で新たな仏伝を作ろうという壮大な意図があったと考えられる。

昨年の『南アジア古典学』に TJAM 第15章の校訂・和訳・内容研究を発表したので、今回はそれに続いて、第16章以後の四つの章の校訂と和訳を行う。

TJAM 第16章〜第19章の梵文テクストと異読の情報は、楊曉華 (2015) の九州大学に提出された博士論文の中で初めて発表された[2]。私もその校訂の手伝いをしたが、しかしその校訂は留学の予定期間を縮めてひどく帰国を急がざるをえなかった事情のせいか、誤りをあまりに多く残したものであった。帰国後、揚さんの関心は別の仏伝の研

1.　この推測については岡野潔 (2021)：「Kalpalatā と Avadānamālā の研究（10） — Jayamuni の仕事と TJAM 第15章 —」、『南アジア古典学』16号、55-56頁を参照のこと。

2.　楊曉華 (2015)：「仏伝 Tathāgatajanmāvadānamālā の校定研究（第16章—第19章）」博士論文、九州大学。（九州大学附属図書館のサイト、「九大コレクション」＞「学位論文」に PDF がある。）　このほか楊曉華には TJAM（通称 Padya-Lalitavistara）の研究として以下の３論文がある：「Padya-Lalitavistara の第16章『夢品』の研究」、『印度学仏教学研究』129 号 (2013), 176-179(L); 「Padya-Lalitavistara 第17章の研究」、同上 135 号 (2015), 189-195(L); 「Tathāgatajanmāvadānamālā 第18章の研究」、同上 138 号 (2016), 209-212(L).

究に移ってゆき、TJAM の校訂の続行には意欲を失ってしまったようなので、帰国から７年経った今、私はかつて揚さんと一緒に読んだ TJAM の写本を読み直してそれらの章の校訂の作業をとにかく完結させることにした。揚さんの先の仕事を踏まえつつ、それに数百箇所の修正を施すことにより、第16章〜第19章の校訂梵文と異読情報を書き改めた。そして新たに校訂されたその梵文に基づいて、四つの章の和訳を作成した。

四つの章のうち、特に第17章〜第19章での再校訂の仕事は、「A 写本の筆写人 X（= Jayamuni）が記した読みを最大限尊重する」という、私が以前から用いてきた TJAM 校訂の原則に基づいた。それらの章の異読情報を記述するにあたっては、校訂の土台となる A 写本の読みが、その写本からの遠い派生本にすぎない B と D 写本のあまりに多すぎる無価値な異読の報告の中に埋もれて隠れてしまわないように、B と D の異読の報告を簡略化した。A から作られた杜撰な一伝本からの二つの派生本と思われる B と D の無価値な異読を Apparatus criticus にすべて機械的に報告することは、梵文の校訂のためには実際上ほとんど役に立たない作業であり、むしろ必要と思われる箇所だけを参照したほうがよい。そのため私は A 写本の読みさえ確かであるなら、それらの異読の記述を簡略化しても差し支えないと判断した。第17章〜第19章の Apparatus criticus では A の読みを確認するためだけに一応 B 写本の読みを示したが、D 写本の読みについては B 写本よりも更に無価値であることが多いので記述を省いた。

TJAM 第16章については、第17章〜第19章とは異なって、肝心の A 写本の筆写人 X が書いた古い葉が部分的にしか（104 と 108 葉しか）存在しないので[3]、その章だけは異読情報の記述にあたって方針を大きく変えざるを得ない。筆写人 X の記した古い葉が欠損している第16章第9偈 pāda b から第121偈 pāda a までの箇所は、新しい諸写本の異読（B と D 写本、ならびに A 写本中の筆写人 Y が書いた新しい *104, 105〜107の葉）のみに頼らざるを得ない故に、私もそれらの全部の異読を報告することにした。

四つの章に関して内容の点から注目すべきは、TJAM 第17章において馬鳴の Buddhacarita の第3章と第4章からのテクストの逐字的借用（すなわち諸詩節のほぼ丸ごとのコピー）が大規模にあることである[4]。その Buddhacarita の借用を見ると、TJAM の作者は Buddhacarita の作品を利用するにあたって、馬鳴のカーヴィヤの内容をよく理解する

---

3. 岡野 (2021) 前掲論文、86頁。

4. このような大規模な Buddhacarita からの詩節丸ごとの借用は TJAM 第24章でも確認されている。TJAM 第24章第77〜第106詩節は、Buddhacarita 第9章第52〜第82詩節の借用である。参照：松本昌巳「Padya-Lalitavistara 24章の研究」、修士論文、九州大学。

ネワールの学僧によって注意深く筆写された誤りが少ない極めて勝れた伝承本を借用のソースとして使っていたらしいことがわかる[5]。ただしすべての借用詩節で原文に完全に忠実に Buddhacarita のテクストをコピーしなければならないという意識は TJAM の作者に無いらしく、あちらこちらの詩節で故意に Buddhacarita のテクストの字句を書き改めている箇所が見うけられる。例えば第17章で Buddhacarita からの借文の際に、その原文に kumāra という語があった場合、TJAM の作者はわざと別の単語に書き改めていることが多い[6]。なぜ原文のとおりに kumāra 「（上流階級の）若者・青年」（出家前の若き釈尊を指す）の語を記すことが避けられたのか、その理由はよくわからない。

このような細部の表現の変更はあるが、第17章の中で大規模に行われているのを見ることができる、詩節テクストをほぼ丸ごと借用するといった形での Buddhacarita の利用は、次の第18章ではずっと少なくなり、第18章第140〜第148詩節の箇所において Buddhacarita 第5章第30〜第38詩節の借用が見られるだけである。TJAM 第18章の第6〜第26詩節や第122〜第131詩節では Buddhacarita の利用はなされているものの、そこでの利用の仕方はテクストの「借用」ではなく、かなり自由な「翻案」といってよい。すなわちソースから大筋の意味内容とキーワードだけを受け取って、文全体を別の韻律の形式（anuṣṭubh）を変えて書き直すという創作的行為である。

このように「借用」と「翻案」とは創作の観点から区別されなければならないが、詩節丸ごとの「借用」が多い第17章でも、Buddhacarita を利用したすべての詩節が「借用」ばかりなのではなく、あちこちには利用詩節の「翻案」と見なしうるものも存在する。例えば第17章の第75、第111〜第113、第115、第117、第137、第223詩節がそうである。また第136と第240詩節は Buddhacarita に相当する詩節を見出せない内容なので、それは翻案というより、純粋な創作といえる。

TJAM 第16章と第19章では、Buddhacarita を直接的に利用して作ったと思われるような、字句が一致する詩節は皆無である。第16章は明らかに Lalitavistara と Mahāvastu の「夢」の記述をうまく一つに統合しようとする目的をもって、「翻案」して作られている。TJAM という作品は多くの章では一般的に、Lalitavistara と Mahāvastu の二つの仏教梵語で書かれた仏伝を利用する場合は、「借用」ではなく「翻案」のやり方を取

---

5. Johnston 本 (1935) の Buddhacarita は、ネパールの古い貝葉写本に基づきながら、更にチベット訳も参照して、古い読みを推測して校訂しているため、ネパール内部の Buddhacarita の最良の写本伝承を利用したにとどまる TJAM の作者が依用した Buddhacarita よりも、学問的に勝れた立場にある。しかし17世紀の TJAM の作者が利用した Buddhacarita の伝承は Cowell 本 (1893) が用いたネパール写本の伝承よりも勝れている点が多くある。

6. 第17章では 74b、81a、90a、93a、95a、106c、123d、124d、162b、163b、189c、219d、236a の箇所で、Buddhacarita の kumāra の語がわざわざ別の表現に変えられている。

る[7]。第16章と同様、第19章においてもそれら二つのインドの仏伝を用いつつ翻案がなされているが、第19章では Mahāvastu を明らかに利用した箇所は第4と第5詩節にあるにすぎず、第19章の多くの詩節は Lalitavistara を依用している。また TJAM 第19章には第18章と同じ程度に、Lalitavistara や Mahāvastu 等に内容的な対応関係が見出せない独創性を発揮した箇所（それを「オリジナル箇所」と呼びたい）があちこちにある。

TJAM の四つの章のソースに関して一つ興味深い点を指摘すると、TJAM 第16章116偈と第19章54～55偈において、Mahajjātakamālā 第32章第19～22偈の記述もしくは Karuṇāpuṇḍarīkasūtra にある同内容の記述に基づいた、菩薩の妻の妊娠の記述がある。そこでは Cāritracaraṇasudarśa(na)yūthika という名のシャクラ（インドラ神）がやがて釈尊の息子であるラーフラとして生まれるために、釈尊の妻ヤショーダラーの胎に入ることが語られる。TJAM の作者が Mahajjātakamālā という浩瀚な作品 —— その作品の最大のソースは Michael Hahn が明らかにしたように Karuṇāpuṇḍarīkasūtra である —— の内容をよく知っている人物であったらしいことは、昨年私が発表した TJAM 第15章の研究の中で判明したことであるが、今回の第16と第19章の研究でも菩薩の妻の妊娠についてのその特異な記述の出所を探すうちに、やはり Mahajjātakamālā と Karuṇāpuṇḍarīkasūtra にその出典を見出せることがわかったのは嬉しいことである[8]。

第19章ではそのヤショーダラーの妊娠の記述の後、第75～第82詩節において、出家を意欲する菩薩は妻にプラティサラーの偉大な明呪 pratisarāmahāvidyā を与え、その明呪の威力を述べて、それが妻と子を護ることを教える。仏伝の記述の中に不自然なほど強引に入れてくるこのような大随求陀羅尼の威力へのこだわりは、TJAM の作者（制作者集団）が有した僧としての社会的位置を推測する一つの手がかりとなるであろう。

---

7. 私がこれまで校訂してきた諸章から判断する限り、TJAM はネパールに伝わっていた Mahāsaṃvartanīkathā や Buddhacarita などの種々のソースを利用しているが、全体的には仏伝 Lalitavistara への依存度が一番高く、それに次ぐ第二位の資料として Mahāvastu が用いられている。TJAM に Śrīlalitavistara や Padyalalitavistara という別の呼び名が後の時代になって付けられる理由は、その作品が Lalitavistara への依存度が高いからであろう。

8. ラーフラの入胎の出来事については Michael Hahn (1985): *Der grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā)*, Wiesbaden, pp. 46, 284 と Isshi Yamada (1968): *Karuṇāpuṇḍarīkasūtra*, London, Vol. I, p. 103; Vol. II, p. 315 にある記述を見よ。また TJAM の作者が Mahajjātakamālā あるいは Karuṇāpuṇḍarīkasūtra をよく知っていることについては岡野 (2021) 前掲論文、75-82頁を参照のこと。TJAM の作者がこの入胎の出来事を知っているのは恐らく、TJAM に先行して作られたその Mahajjātakamālā の制作を通してであったろう。

Tathāgatajanmāvadānamālā 第16章～第19章
梵文校訂・翻訳

略号　A = a ms. of TJAM, NGMPP A 123/5. (104, 108～148 are written by the scribe X)

A2 = *104, 105～107 (i.e., additional new folios written by the scribe Y) in A

B = a ms. of TJAM, NGMPP B100/2

Bc = JOHNSTON's Buddhacarita edition, 1936

D = a ms. of TJAM, NGMPP D43/4-44/1 (rephoto = E1321/2)

H = Hokazono's Lalitavistara edition, i (1994), ii (2019), iii (2019)

L = LEFMANN's Lalitavistara edition, 1902

M = MARCINIAK's Mahāvastu edition, ii (2020), iii (2019)

S = SENART's Mahāvastu edition, i (1882), ii (1890), iii (1897)

TJAM = Tathāgatajanmāvadānamālā (= Padya-Lalitavistara)

以下の TJAM テクスト中の [ ] の数字は A 写本の葉を示し、例えば [104a5] は A の第104葉の表面5行目であることを示す。しかし [*104a] とアステリスクが付けられている数字は、A 写本中の本来の筆写人 X (= Jayamuni) が記した葉ではなく別の筆写人 Y によって書かれた新しい葉（略号 A2）の104であることを示す。その新しい葉は古い葉である104とは別に存在するため、*104と表記する。（岡野 (2021) 前掲論文、86頁を参照せよ。）

また TJAM テクスト中で仏伝 Lalitavistara と内容が密接に関係する箇所では、その詩節の右側に ≈ という「類似」を意味する記号を使って、Lefmann（略号 L）と外薗幸一（略号 H）の両方の Lalitavistara 出版本[9]の参照すべき文の類似箇所を示した。例えば H i,686(vs.)22 とあるのは外薗 (1994-2019) 校訂本上巻 686頁の第22詩節をさす。i は上巻を、ii は中巻を意味し、(vs.) は詩節を意味する。(vs.) と記さずに単に H ii,40.3-4 とある場合は、散文の箇所であり、外薗本の中巻40頁3-4行の散文を意味する。

また TJAM が仏伝 Mahāvastu と密接に関係する箇所では、同様に ≈ の記号を用いて、Mahāvastu 出版本[10]の Senart 本（略号 S）と Marciniak 本（略号 M）の両方の、参照すべき文の類似箇所を

---

9. Lalitavistara の二つの校訂本： S. LEFMANN (1902): *Lalita Vistara. Leben und Lehre des Śākya-buddha, erster Teil: Text*, 1902, Halle； 外薗幸一 (1994-2019)：『ラリタヴィスタラの研究』上巻 (1994)、中巻 (2019)、下巻 (2019)、大東出版社。

10. Mahāvastu の二つの校訂本： É. SENART (1882-1897): *Le Mahāvastu-Avadāna*, 3 vols, Paris.； K. MARCINIAK (2019-2020)：*The Mahāvastu. A New Edition*, Vol. II (2020), Vol. III (2019), Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica XIV, Tokyo.

示した。例えば S ii,133.15-18 とあるのは Senart 本の第2巻133頁の15-18行目をさす。M ii,171.6-9 ならば、Marciniak 本の第2巻の171頁6-9行目をさす。

TJAM が Buddhacarita を用いた箇所では、≈ の記号と = の記号を使い分けている。前者が内容的な近似を意味するのに対し、後者は「一致」すなわち詩節のほぼそのままの借用を意味する。

1．Tathāgatajanmāvadānamālā 第16章の校訂研究

第16章の内容を７分割して、おおまかに各部所のソースを示せば、次の通り：

（１）第2～第21詩節（父王の夢）の記述は Mahāvastu を利用。

（２）第22～第35詩節（菩薩の妻の夢 1）の記述は Mahāvastu を利用。

（３）第36～第76詩節（菩薩の妻の夢 2）の記述は Lalitavistara 第14章を利用。

（４）第77～第87詩節（菩薩の夢 1）は Lalitavistara 第14章と Mahāvastu の両方を利用。

（５）第88～第93詩節（菩薩の夢 2）は Lalitavistara 第14章を利用。

（６）第94～第113詩節（菩薩の夢の説明）は Mahāvastu を利用。

（７）第114～第119詩節（懐妊）は Mahajjātakamālā または Karuṇāpuṇḍarīka を利用。

1.1　TJAM 第16章『夢［という］品』の梵文テクスト

以下、TJAM 第16章の校定テクストを挙げる。

16 Svapnaparivarta

[104a5] [*104a3]

atha so 'rhan **mahābhijña upagupto** {**or:** mahābhijño mahābuddho}[11] yatiḥ sudhīḥ /

---

11. ここで A 写本では mahābhijño mahābuddho と記された後、それらの字の上にある行間において mahābhijña upagupto と読みを修正している。では A 写本では mahābhijño mahābuddho という読みのほうが古いのかというと、そうも断言できない。なぜなら、°jño mahābuddho の字の箇所はどうも写本 A の本来の筆写人 X (= Jayamuni) が書いた字らしくなく、むしろその X が書いた古い字を塗りつぶす形で、その古い字の上に別の字 °jño mahābuddho を上書きすることによって書かれている印象を受けるからである。つまり最古の写本 A の本来の筆写人 X は元々 mahābhijña upagupto と書いた可能性があり、その後に別の人 (?) がその字の上にわざと上書きして °jño mahābuddho と修正したが、しかしその後、その °jño mahābuddho の字に対してまた別の人が再び °jña upagupto に戻す修正を加えたという解釈が可能である。このように、写本 A が筆写された時

aśokaṃ taṃ patiṃ {**or:** ānandaṃ taṃ yatiṃ} paśyan samāmantryaivam ādiśat // 1

atha śuddhodano rājā suptaḥ śayyāśrito niśi /

hrīdevasyānubhāvena svapna evam apaśyata // 2

ratnābhimaṇḍitaṃ putraṃ gajarājaṃ mahattaraṃ /

maṇijālasamācchannam āruhya nirgataṃ purāt // 3 ≈ S ii,133.15-18; M ii,171.6-9

tad dṛṣṭvā vipulaṃ hāsyaṃ ruditaṃ ca samutthitaṃ /

svātmānaṃ kampitaṃ dehaṃ saṃtāpaparidāhitam // 4 ≈ S ii,133.19-21; M ii,171.10-13

etat svapne samālokya pratibuddhaḥ sa bhūpatiḥ /

kiṃ bhaven ma iti dhyātvā tasthau cintāviṣāturaḥ // 5 ≈ S ii,134.1; M ii,171.13

evaṃ cintāsamākrāntamānasaṃ taṃ narādhipaṃ /

dṛṣṭvā lokādhipāḥ sarve samāgatyaivam abruvan // 6 ≈ S ii,134.2; M ii,171.14

mā bhīr atra mahīpāla prasīda harṣito bhava /

yat te svapnaphalaṃ siddhaṃ tat pravakṣyāmahe śṛṇu // 7 ≈ S ii,134.3-5; M ii,171.15-17

eṣa tavātmajo vijño bodhisattvo jagaddhite /

rājyaṃ tyaktvābhiniṣkramya pravrajito yatir bhavet // 8 ≈ S ii,134.6-9; M ii,171.18-21

yan nu tvaṃ hasitaḥ [104b] svapne tat te jāyeta duḥkhatā /

yac cāsi ruditaḥ svapne tenātisukhatā bhavet // 9 ≈ S ii,134.10-12; M ii,172.1-2

nūnam eṣa mahāsattvo bodhisattvas tavātmajaḥ /

jitvā māragaṇān arhan bodhiṃ prāpya jino bhavet // 10 ≈ S ii,134.13; M ii,172.3-4

iti satyaṃ parijñāya mā viṣīda mahīpate /

etad bhadranimittaṃ hi daivāt saṃdṛśyate tvayā // 11

iti lokādhipaiḥ sarvaiḥ samādiṣṭaṃ niśamya saḥ /

śuddhodano viṣaṇṇātmā tasthau dhyātvābhibodhitaḥ // 12

tathā mātuḥ svasā [*104b] cāpi gautamī śayanāśritā /

rātrau nidrāgatā suptā prādrākṣīt svapnam īdṛśaṃ // 13 ≈ S ii,134.14; M ii,172.5

tadyathāsau mahāsattvo bodhisattvo nṛpātmajaḥ /

sujāto vṛṣabhībhūtaḥ sarvātiriktaśṛṅgabhṛt // 14 ≈ S ii,134.15-16; M ii,172.6-7

sukakudvān mahatkāyaḥ śubhravarṇo manoharaḥ /

代に、TJAM の説主をマハーブッダ mahābuddha（釈尊）にしてその対告者をアーナンダにするべきか、それとも釈尊より百年後に出た聖者ウパグプタを説主にしてその対告者をアショーカ王にするべきか、作品の枠組の設定をめぐって意見が揺れていた時期があったことが、この写本 A の上の修正の痕跡からうかがい知ることが出来る。制作当時はこの作品をマハーブッダが説いたものにしたいという願望がパタンの Mahābauddha 寺の関係者の間にあったのであろう。しかし新しい時代に筆写された TJAM の写本を見ても、結局はこの「揺れ」は多数の avadānamālā 文献が有する「ウパグプタがアショーカ王に説法する」という物語の枠に落ち着いたことがわかる。

pragarjan madhuraṃ rāvaṃ nidhāvitaḥ purād drutam // 15 ≈ S ii,134.17-20; M ii,172.8-13
īdṛk svapnaṃ samālokya gautamī pratibodhitā /
tatphalaṃ śrotum icchantī tasthau tadgatamānasā // 16
tām evaṃ saṃsthitāṃ dṛṣṭvā devarājaḥ samāgataḥ /
prabodhayitum ālokya samāmantraivam abravīt // 17 ≈ S ii,135.1; M ii,172.14
gautami mā viṣīdātu yat svapne dṛśyate tvayā /
tat phalaṃ samupākhyāmi saṃśṛṇuṣva samāhitā // 18 ≈ S ii,135.2-4; M ii,172.15-17
tadyathāyaṃ mahābhijño bodhisattvo jagaddhite /
rājyaṃ tyakto 'bhinikramya pravrajya saṃvaraṃ caran // 19 ≈ S ii,135.5-8; M ii,172.18-173.3
jitvā sa tīrthikān mārān dhyātvā saṃbodhim āpsyati /
tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayet // 20 ≈ S ii,135.9-12; M ii,173.4-7
tataḥ so 'rhañ jagacchāstā kṛtvā dharmamayaṃ jagat /
samāpya saugataṃ kāryaṃ samāpnuyāj jinālayam // 21
tato yaśodharā cāpi niśi śayyāsamāśritā /
nidrābhivaśagā suptā prādrākṣīt svapna īdṛśaṃ // 22 ≈ S ii,135.13; M ii,173.8
tadyathā sa mahābhijñaḥ śuddhodananṛpātmajaḥ /
rājakulāt samudgamya sahasāmbara āśritaḥ // 23
meghībhūtvā samācchādya sarvatrāpi nirantaram /
dhīragambhīranirghoṣaṃ garjan sarvaṃ manoharan // 24 ≈ S ii,135.18-20; M ii,173.13-15
vidyutkāntiprabhādīpair hatvā dhvāntaṃ samantataḥ /
suśītalāmbudhārābhiḥ prahlāditaṃ jagad vyadhāt // 25 ≈ S ii,135.21-136.4; M ii,173.16-174.3
īdṛk svapnaṃ samālokya pratibuddhā yaśodharā /
vismitotthāya niḥśvasya tasthau yaddhyānaniṣṭhitā // 26
tāṃ taccintāviṣīdantīṃ dṛṣṭvā brahmā samāgataḥ /
gagaṇe samupāśritya samāmantryaivam ādiśat // 27 ≈ S ii,136.5-6; M ii,174.4-5
bhadrike mā viṣīdātra yat te svapnaphalaṃ śubham /
saṃsidhyeta mahārtho hi tat prasīdānumoditā // 28 ≈ S ii,136.6-8; M ii,174.5-7
ayam nṛpātmajo nūnaṃ bodhisattvo jagaddhite /
rājyaṃ tyaktvābhiniṣkramya pravrajyāsaṃvaraṃ caran //29
tapasā tīrthikāñ jitvā mā[105a]rasaṃghān vinirjayan /
arhan saṃbodhim āsādya dharmarājo jino bhavet // 30
tadā sarvatra lokeṣu dharmāmṛtaṃ pravarṣayan / ≈ S ii,136.9-12; M ii,174.8-11
jagat kleśāgnisaṃtaptaṃ *prahlādayet **pramodayan** {or: prabodhayan} // 31
iti satyaṃ parijñāya saṃpraṣīda viṣīda mā /
tvam apy evaṃ bhaven nūnaṃ sambuddhadharmacāriṇī // 32

ity ādiśyaiva sa brahmā tato gatvā surālayam /
sarvān devān samāmantrya kathitvaitad abodhayat // 33
etad brahmasamādiṣṭaṃ śrutvā devāḥ prabodhitāḥ /
acirāt prabhaved buddha ity uktvā saṃprasedire // 34
yaśodharāpi tac chrutvā brahmādiṣṭaṃ prabodhitā /
nūnaṃ bhartā bhaved buddha iti dhyātvābhyanandata // 35
tato bhūyo niśīthe sā gopā śayyāsanāśritā /
nidrābhivaśagā suptā dadarśa svapna īdṛśān // 36 ≈ L 194.7-8; H i,686(vs.)22ab
tadyatheyaṃ mahī sarvā kampitā sābdhiparvatā /
ativegānilaiḥ śṛṅgā dhvaṃsitāḥ patitā bhuvi // 37 ≈ L 194.9; H i,686(vs.)22cd
vṛkṣāś conmūlitāś chinnā mahāvātair nipātitāḥ /
satārakau ravīndū ca *nabhaḥsthau patitau bhuvi // 38 ≈ L 194.10-11; H i,688(vss.)22d,23a
ātmanaś chinnitāḥ keśāś chinnau pādau tathā bhujau /
nagnībhūtaṃ svadehaṃ ca makuṭaṃ ca nipātitam // 39 ≈ L 194.12-13; H i,688(vs.)23bc
muktāhāraṃ ca vicchinnaṃ vikīrṇitaṃ mahītale /
mañcapādāś ca vicchinnāḥ śayyāsanā mahītale // 40 ≈ L 194.14-15; H i,688(vs.)23d,24a
bhartuḥ śrīmac chattradaṇḍaṃ khaṇḍitaṃ patitaṃ bhuvi /
ābharaṇāni kīrṇāni *__prahitāni__ {**or:** *proḍhitāni} jalair api // 41 ≈ L 194.16-17; H i,688(vs.)24bc
cūḍālaṃkāravastrāṇi kṣiptāni śayanāsane /
purād ulkā viniṣkrāntā puraṃ ca tamasāvṛtam // 42 ≈ L 194.18-19; H i,688(vss.)24d,25a
vicchinnaṃ kiṃkiṇījālaṃ muktāhāraṃ nipātitam /
kṣubhitāḥ sāgarā merur nagarājo 'pi kaṃpitaḥ // 43 ≈ L 194.20-22; H i,688(vs.)25bcd
svapna etāni dṛṣṭvā sā pratibuddhā yaśodharā /
sahasotthāya tatraiva śayyāyāṃ samupāśritā // 44 ≈ L 195.1-2; H i,688(vs.)26ab
*vismitya bhinnitasvāntī tasthau taddhyānamānasā /
evaṃ tām āsthitāṃ dṛṣṭvā bharto 'pi samupasthitaḥ /
yaśodharāṃ vibhinnāsyāṃ sampaśyann evam abravīt // 45
priye kiṃ jāyate [105b] duḥkhaṃ yad vibhinnaṃ mukhaṃ tava /
tat satyaṃ me vadasvātra yadi māṃ *manyase prabhum // 46
iti bhartrā samādiṣṭaṃ niśamya sā yaśodharā /
svāminaṃ taṃ samālokya vibhinnāsyaivam abravīt // 47 ≈ L 195.2; H i,688(vs.)26b
īdṛśāni mayā svapne dṛṣṭāni hi nṛpādhipa /
tatphalaṃ kiṃ bhaven nūnaṃ yan manas trasitaṃ mama // 48 ≈ L 195.3-4; H i,688(vs.)26cd
iti gopāsamākhyātaṃ svapnavṛttaṃ niśamya saḥ /
bhartā nimittam ālokya bhāryām evam abodhayat // 49 ≈ L 195.5-6; H i,690(vs.)27ab

ayi gope prasīdātu pāpaṃ te vidyate na hi /
paśyeyur īdṛsān svapne dharmiṣṭhā eva nāpare // 50 ≈ L 195.6-8; H i,690(vs.)27bcd
yad dṛśyante tvayā svapne sarvā bhūmī prakampitā /
mahāvātāhatāḥ śailaśṛṅgāś ca patitā bhuvi // 51 ≈ L 195.9; H i,690(vs.)28ab
sarve surādayo lokāḥ kariṣyanti tavārhaṇām /
etat satyaṃ parijñāya mā viṣīda prasīda tat // 52 ≈ L 195.10; H i,690(vs.)28cd
dṛśyante ca hatā vātair unmūlā patitā drumāḥ /
makuṭaṃ patitaṃ keśā lūnā chinnau karāv ubhau // 53 ≈ L 195.11; H i,690(vs.)29ab
ubhau ca caraṇau chinnau *karau ca nagnitātmanaḥ /
chetsyate kleśajālaṃ te dṛṣṭijālaṃ ca saṃskṛtau // 54 ≈ L 195.12; H i,690(vs.)29cd
yac ca satārakau dṛṣṭau ravīndū patitau bhuvi /
tena kleśaripūñ jitvā pūjyārhantī bhaviśyasi // 55 ≈ L 195.13-14; H i,690(vs.)30
muktāhāraṃ viśīrṇaṃ ca chinnā ca maṇimekhalā /
tena strīkāyam utsṛjya pauruṣaṃ kāyam āpsyasi // 56 ≈ L 195.15-16; H i,690(vs.)31
chattradaṇḍaṃ ca me bhagnaṃ mañcapādāś ca bhagnitāḥ /
dṛṣṭā gope tvayā svapne tatphalam aham aśnuyām // 57 ≈ L 195.17; H i,690(vs.)32ab
tadyathāhaṃ samuttīrya *caturoghān bhavodadheḥ /
sarvadharmādhipaḥ śāstā bhaveyaṃ trijagatpatiḥ // 58 ≈ L 195.18; H i,690(vs.)32cd
cūḍābhūṣaṇavastrāṇi *śayyāyāṃ vyākulāny api /
uditāni jalaughaiś ca dṛṣṭāni yat *priye tvayā // 59 ≈ L 195.19; H i,692(vs.)33ab
tenāham pariśuddhātmā bhadralakṣaṇamaṇḍitaḥ /
stūyamāno jagallokaiḥ pracareyaṃ samantataḥ // 60 ≈ L 195.20; H i,692(vs.)33cd
maholkā dṛśyate yac ca niṣkrāmantī purād vahiḥ /
dṛ[106a]ṣṭaṃ ca nagaraṃ sarvam andhakārasamāvṛtam // 61 ≈ L 195.21; H i,692(vs.)34ab
avidyātamasā vyāpte prajñādīpaṃ mahatprabham /
samujjvālya jagallokaṃ darśayeyaṃ jināalayam // 62 ≈ L 195.22; H i,692(vs.)34cd
yad vāpi dṛśyate gope muktāhāraṃ vikīrṇitam /
svarṇasūtraṃ ca vicchinnaṃ tatphalaṃ bhojyate mayā // 63 ≈ L 196.1; H i,692(vs.)35ab
kleśajālam *abhicchittvā dharmasūtraṃ prakāśayan /
jagat sarvaṃ samuddhṛtya cārayeyaṃ sadā śubhe // 64 ≈ L 196.2; H i,692(vs.)35cd
yat kṣubdhā sāgarā dṛṣṭā tvayā meruś ca kampitaḥ /
tenārhantī mahatpūjāṃ lapsyase tvaṃ samantataḥ // 65 ≈ L 196.3; H i,692(vs.)36ab
nāsti te *durgater bhītir mā kṛthā śokam ātmani /
prītiprāmodyasatsaukhyaṃ dhṛtvā cara viṣīda mā // 66 ≈ L 196.4; H i,692(vs.)36cd
yan mayā prakṛtaṃ dānaṃ suśīlacīrṇitaṃ vratam /

*kṣāntiḥ *prabhāvitā nityaṃ saddharmasādhitaṃ sadā// 67 ≈ L 196.5; H i,692(vs.)37ab

tasmāt sarve 'pi lokā me *prasīdante *sumaitritāḥ /

prītiprāmodyasatkāraṃ kṛtvā bhavanti nanditāḥ // 68 ≈ L 196.6; H i,692(vs.)37cd

kalpaśatasahasrāṇi bodhicaryāvrataṃ caran /

sarvasattvahitaṃ kṛtvā prācarāmi sadā śubhe // 69 ≈ L 196.7; H i,692(vs.)38ab

tasmāt sarve prasādaṃ me kurvanti saṃpramoditāḥ /

sarve pāpāś ca vicchinnā bodhimārgo 'bhiśodhitaḥ // 70 ≈ L 196.8; H i,692(vs.)38cd

tenātra mā viṣīda tvaṃ bhavānandapramoditā /

bhadraśrīsadguṇādhārā bhadrikāpi bhaviṣyasi // 71 ≈ L 196.9; H i,694(vs.)39ab

dṛśyante ye tvayā svapne sarve bhadranimittitāḥ /

tad āvayor bhaven nūnaṃ bhadraṃ saṃbodhisādhanam // 72 ≈ L 196.10; H i,694(vs.)39cd

ye sattvā nirmalātmānaḥ pariśuddhendriyāśrayāḥ /

īdṛksvapnāni bhadrāṇi paśyeyuḥ sugatātmajāḥ // 73

iti satyaṃ parijñāya sarvabhadrārthasādhanam /

sambodhipraṇidhiṃ dhṛtvā smṛtvā ratnatrayaṃ cara // 74

etatpuṇyānubhāvena pariśuddhatrimaṇḍalā /

sambodhijñānam āsādya saugataṃ padam āpnuyāḥ // 75

iti bhartrā samādiṣṭaṃ yaśodharā niśamya sā /

tathety abhyanumoditvā prābhya[106b]nandat prabodhitā // 76

atha so 'pi mahāsattvo bodhisattvas tathā niśi / ≈ L 196.11-12; H i,694(vs.)40ab;

śayyāsamāśritaḥ suptaḥ pañca svapnāny apaśyata // 77 S ii,136.13-15; M ii,174.12-14

kṛtvā sarvāṃ mahīṃ śayyāṃ sumerum upadhānakaṃ / ≈ L 196.15-18; H i,694(vs.)41;

vāmadakṣakarau *sthitau pūrvāparasamudrayoḥ // 78 S ii,136.16-18; M ii,174.15-17

dakṣiṇābdhāv ubhau pādau prasārya supitaḥ svayaṃ/

ity evaṃ prathamaṃ svapnaṃ prādrākṣīt sa mahāmatiḥ // 79 ≈ S ii,136.19; M ii,174.18

bhūyo 'pi sa tathā suptaḥ svapna evam apaśyata /

yat tṛṇaṃ sthirikaṃ nāma *prodbhūya nābhimaṇḍalāt // 80 ≈ S ii,137.1-3; M ii,175.1-2

ācchādya gagaṇaṃ yāvat sthitaṃ chattram ivātmanaḥ /

svapnam evaṃ dvitīyaṃ sa bodhisattvo 'bhyapaśyata // 81 ≈ L 196.21-22; H i,694(vs.)42cd

tathā bhūyaḥ prasupto 'sau prādrākṣīt svapnam **ātmanaḥ** {**or:** īdṛśaḥ} / ≈ L 197.1; H i,694(vs.)43a;

catvāro lohitātmānaḥ prāṇikā nīlamastakāḥ // 82 S ii,137.4-6; M ii,175.4-6

pādatalāt samudbhūya yāvat svanābhimaṇḍalaṃ /

ācchādya saṃsthitā dṛṣṭās tena svapne tṛtīyake// 83

bhūyo 'pi sa tathā suptaḥ svapnam evam apaśyata / ≈ L 197.2; H i,694(vs.)43b;

catvāraḥ pakṣiṇo nānāvarṇāḥ khāt samudāgatāḥ // 84 S ii,137.7-10; M ii,175.7-10

svapādāv upajighrantaḥ sarvaśvetāparādhyakāḥ /
saṃdṛṣṭā ātmanas tena svapnam evaṃ caturthakam // 85
tathā bhūyo 'pi supto 'sau svapnam evaṃ samīkṣata / ≈ L 197.3-4; H i,694(vs.)43cd;
mahato mīḍha*śailāgre 'nupalipto 'bhicaṃkraman // 86 S ii,137.11-13; M ii,175.11-13
svātmā saṃbhrāmyamāno 'pi sarvadikṣu prabhāsayan
ity evaṃ pañcamaṃ svapnaṃ prādrākṣīt sa mahāmatiḥ // 87
bhūyo 'pi sa tathā suptaḥ svapnam evam apaśyata /
uhyamānā asaṃkhyeyāḥ sattvā mahānadījalaiḥ // 88 ≈ L 197.5-8; H i,696(vs.)44
dṛṣṭvā naukā svayaṃ bhūtvā prottārya sthāpitāḥ sthale /
ity evaṃ sa mahāsattvaḥ ṣaṣṭhaṃ svapnam apaśyata // 89
bhūyo 'pi sa tathā suptaḥ svapnam evaṃ samaikṣata /
rogiṇo bahavaḥ sattvā dṛṣṭvātmanā mahauṣadhaiḥ /
vaidyabhūtena te sarve svasthīkṛtā nirāturāḥ // 90 ≈ L 197.9-12; H i,696(vs.)45
saṃgrāme jayakīrtiś ca dṛṣṭvā prasāritātmanaḥ /
ānandaśabdam ākāśe tridaśaiḥ saṃpra[107a]cāritam // 91 ≈ L 197.15-16; H i,696(vs.)46cd
merau siṃhāsanāsīnam ātmānam amarādibhiḥ /
kṛtāñjalipuṭaiḥ śiṣyair vandyamānaṃ sa praikṣata // 92 ≈ L 197.13-14; H i,696(vs.)46ab
ity evaṃ sa mahāsattvaḥ svapnaṃ dṛṣṭvābhibodhitaḥ /
tat sarvam anusaṃsmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 93 ≈ L 197.17-18; H i,696(vs.)47ab
evaṃ dhyātvā samāsīnaṃ bhartāraṃ taṃ samīkṣya sā /
yaśodharā priyā bhāryā sampaśyanty evam abravīt // 94
deva dhyātvā samāsīnaḥ kim evam avatiṣṭhate /
yadi mayy asti te snehas tat samādeṣṭum arhati // 95
iti gopā samākhyātaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /
gopāṃ tāṃ supriyāṃ bhāryāṃ *sampaśyann evam abravīt // 96
yad ahaṃ supriye gope svapne paśyāmi sāmpratam /
tadanusmṛtim ādhāya tiṣṭhāmy evaṃ vicintayan // 97
iti bhartrā samākhyātaṃ niśamya sā yaśodharā /
bhartāraṃ taṃ mahāsattvaṃ sampaśyanty evam abravīt // 98
kiṃ svapne paśyase deva tadvipākaṃ ca kiṃ bhavet /
satyam etat samādiśya māṃ bodhayitum arhasi // 99
iti bhāryoditaṃ śrutvā bodhisattvo vihasya saḥ /
tāṃ gopāṃ supriyāṃ kāntāṃ sampaśyann evam **ādiśat** {**or:** abravīt} // 100
śṛṇu devi yathā *dṛṣṭaṃ tathā sarvaṃ nigadyate /
iti svapnapravṛttāntaṃ vistareṇa samādiśat // 101

tadvipākaṃ ca vakṣyāmi śṛṇu devi samāhitā /
tan niśamyānumodantī prasīdasva viṣīda mā // 102
prathamasvapnavipāko me praṇidhānaṃ prapūrayet /
yad ahaṃ bodhim āsādya bhaveyaṃ bhagavāñ jinaḥ // 103 ≈ S ii,137.14-18; M ii,175.14-18
dvitīyasya vipākena vārāṇasyāṃ jināśrame /
cārayeyaṃ jagad bhadradharmacakraṃ pravartayan // 104 ≈ S ii,137.18-138.18; M ii,175.18-176.20
tṛtīyasya vipākena sarve sattvāḥ pramoditāḥ /
kṛtvā me bhajanaṃ bhaktyā saṃprayāyuḥ surālayam // 105 ≈ S ii,138.18-139.2; M ii,176.21-177.2
caturthasya vipākena caturvarṇā narā api /
śaraṇe me samāgatya bhaveyur brahmacāriṇaḥ // 106 ≈ S ii,139.3-7; M ii,177.3-7
pañcamasya vipākena sarvatra bhuvaneṣv api /
satkṛtaḥ pūjitaḥ sarve (!) bhaveyaṃ mānito guruḥ // 107 ≈ S ii,139.7-20; M ii,177.8-20
tato 'nyeṣāṃ vipākaiś ca sarvān [107b] sattvān bhavodadheḥ /
samuddhṛtya bhave sthāpya cārayeyaṃ susaṃvaram // 108
kleṣajvarāgnisaṃtaptān sarvān sattvān viśodhayan /
saddharmāmṛta*bhaiṣajye svasthīkuryāṃ samantataḥ // 109
arhan māragaṇāñ jitvā traidhātubhuvanesv api /
arhacchiṣyagaṇaiḥ sārdhaṃ caran sattvān prabodhayan /
triyāneṣu pratiṣṭhāpya preṣayeyaṃ jinālayam // 110
etat svapnaphalaṃ bhadranimittaṃ bodhisādhanam /
etat svapnavipākena tavāpi maṅgalaṃ khalu /
*yat tvaṃ mārāśrayaṃ hitvā saddharmāśrayam *āpnuyāḥ // 111
iti satyaṃ parijñāya saddharmaguṇalālasā /
triratnasmaraṇaṃ dhṛtvā saṃramasva sadā śubhe // 112
iti bhartrā samādiṣṭaṃ niśamya sā yaśodharā /
tathety abhyanumoditvā prābhyanandat prabodhitā // 113
atha sarvārthasiddho 'sau bodhisattvaḥ samāhitaḥ /
pūrveṣāṃ bodhisattvānāṃ saṃvṛttim anvacintayat // 114
dhyātvā saṃbodhisattvānāṃ saṃvṛttidharmatāṃ smaran /
vaṃśārthaṃ ratisaṃrakto gopayā saha prāramat // 115
tadā cāritracaraṇasudarśayūthikābhidhaḥ / ≈ Mahajjātakamālā 32.19;
śakraḥ surālayāc cyutvā gopāgarbhe samāviśat // 116 Karuṇāpuṇḍarīka,ii,p.315
iti nimittam ājñāya bodhisattvaḥ sa sarvavit /
pratisarāmahāmantraṃ gopāmūrdhni nyadhāpayat // 117
tataḥ sarvārthasiddho 'sau niṣkramaṇasamutsukaḥ /

vilokya samayaṃ dhyātvā tasthau sambodhimānasaḥ // 118

ity evaṃ taṃ mahāsattvaṃ niṣkramaṇasamutsukam /

dṛṣṭvā brahmādayo devāḥ sarve 'bhavan pramoditāḥ // 119

iti me guruṇādiṣṭam iha mayā tathocyate /

tvam apīdaṃ mahāsattva śrutvaitad anumodatu // 120

anumoda[108a]nti ye śrutvā svapnavṛttikathām imām /

te 'pi sarve mahāsattvā bhaveyur bodhisādhinaḥ // 121

iti śāstrā samādiṣṭaṃ śrutv***āśoko *mahīpatiḥ** {**or:** śrutvānando mahāmatiḥ} /

tathā hīti pratijñāya prābhyanandat sapārṣadaḥ // 122

// iti svapnaparivarto nāma ṣoḍaśo 'dhyāyaḥ samāptaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 16[12]

1a mahābhijña] corr.: mahābhijño A A2 B D.

1b upagupto A(post corr. marg.) A2 B D: mahābuddho A(ante corr.).

1c aśokaṃ] A(post corr. marg.) B D: aśokan A2: ānandaṃ A(ante corr.) ‖ taṃ patiṃ paśyan] A(post corr.): taṃ yatiṃ paśyan A(ante corr.): yati paśyan B: yadi paśyan D: taṃ mahārājan A2.

1d samāman°] A A2 B: sasamāman° D.

2b suptaḥ] A A2 B: supta D ‖ śayyāśrito ni°] A(post corr. marg.): śayyāśri ni° A(ante corr.): śayyāśriyo ni°B: śaryyāśrito ni° A2 D.

2c hrīdevasyā°] A: hrīdevāyā° A2 B D.

3a °maṇḍitaṃ] A B: °maṇḍitaḥ A2: °maṇḍita D ‖ putraṃ] A: putra A2 B D.

3b gajarājaṃ] A2 B D: gajaṃrājaṃ A.

5a svapne] A: svapna A2 B D.

5c ma iti] A B: me iti A2 D.

5d °āturaḥ] A A2 B: °āturaṃ D.

---

12. 以下の Apparatus criticus で用いる記号の説明として、A(ante corr.) は「A 写本において写経生が書き直す前に書いた読み」、A(post corr.) は「A 写本において写経生が書き直した後の読み」、A(post corr. marg.) は「A 写本の余白に修正として記された読み」を、A(post corr. int. lin.) は「A 写本の行間に修正として記された読み」を意味する。— また A 写本には104葉が新旧二枚あるので、その場合は A は旧葉、A2 は新葉を意味する略号となる。続く105葉から107葉までの3葉は旧葉の A が失われており、誤りの多い A2 の新葉だけが存在する。その後の、第16章121a の nti ye の箇所から始まる108葉から148葉までは旧葉が存在する。

6a °mānasaṃ] A A2: °mārasaṃ B: °mārasa D.

6b narādhipaṃ] A A2: narādhipaḥ B D.

6c lokādhipāḥ] A A2: lokādhipā B D.

7b harṣito] A: harṣitā A2 B D ‖ bhava] A A2: bhavaḥ B D.

7c yat te] A D: yat ta B: yad yat A2.

7d pravakṣyāmahe] A: pravakṣyāmi te A2: pravajyāmaha B: pravakṣyāmaṃha D.

8b bodhisattvo] A A2 B: bodhisattva D.

9a yan nu tvaṃ] A: yan nur tvaṃ B: yan nu tva D: yan nūnaṃ A2.

9ab hasitaḥ svapne tat te jāyeta] A B: hasitaḥ svapnaṃ tat te jāyeta D: hita svapnaṃ te saṃprajāyata A2.

9c yac cāsi] A B D: yady āsi A2.

9d tenātisukhatā] A: tonātisukhato B: tenātisukhato A2 D.

10ab mahāsattvo bodhisattvas] A A2 B: mahāsatvās D.

10b tavātmajaḥ] A B D: tamātmajaḥ A2.

10c arhan] A A2: arha B D.

10d bodhiṃ] A A2 D: bodhi B ‖ prāpya] A A2 B: pāpya D ‖ jino] A A2 D: jinā B.

11d daivāt] A B D: devāt A2: .

12a lokādhipaiḥ sarvaiḥ] A A2 D: lokādhipe savai B.

12c śuddhodano] A A2 D: śuddhodanā B.

13c rātrau nidrā°] A(post corr. marg.) B D: nidrā A(ante corr.): rātrau tidrā° A2.

14b bodhisattvo] ≒ bodhisatvo A A2: bodhisatva B: bodhisatvā D.

14c sujāto] A B D: sujātā A2 ‖ vṛṣabhībhūtaḥ] A: vṛṣabhībhūta A2: vṛmebhībhūtaṃ B: vṛṣabhībhūtaṃ D.

15a mahatkāyaḥ] A A2: mahatkāya B: mahatkāyaṃ D.

15c madhuraṃ] A(post corr.): madhuro A(ante corr.) A2: madhurā B D ‖ rāvaṃ] A A2 D: nāvaṃ B .

16a svapnaṃ] A D: svapna A2: taṃpraṃ B.

16c icchantī] A: icchantika B: icchanti D: icchantā A2.

18a gautami] A: gautamī A2 B D ‖ mā viṣīdātu] A A2: mānnīṣīdātu B D. (viṣīdātu is m.c. for viṣīdatu)

18d saṃśṛṇuṣva] A A2 D: saṃśṛṇuṣa B.

19a mahābhijño] A A2: mahābhijñā B D.

19b bodhisattvo] ≒ bodhisatvo A A2 D: bodhisatvā B.

19c tyakto] A: tyaktvā A2 D: tyaktā B.

20a tīrthikān] A A2 B: tirthīkān D.

21a so 'rhañ] ≒ sorhañ A A2: sorhaṃ D: sārhañ B ‖ jagacchā°] A A2 B: cagacchā° D.

22a cāpi] A A2 D: vāpi B.

22b śayyā°] A B: śaryyā° A2 D ‖ °āśritā] A(post corr. marg.) A2 D: °āśri A(ante corr.): °āśitā B.

24a meghībhūtvā] A B: mayībhūtvā A2: mṛghībhūtvā D.

24c °nirghoṣaṃ] A A2 B°cirghoṣaṃ D

24d sarvaṃ mano°] A: sarvamano° A2 B D.

25a °dīpair] A A2 B: °dīpnai D.

25d dhvāntaṃ samantataḥ] corr.: dhvānta samantataḥ A2: dhvānta samantataṃ D: dhvāntataḥ B.

25 note] 104b of A ends in the verse 25, pāda b hatvā. After this end of 104b, 3 folios (= original 105, 106, 107) are lost in A. As replacement for the lost 3 folios, the new 4 folios (*104, 105, 106, 107) were written as A2.

26a svapnaṃ] A2 D: svapna B.

26b pratibuddhā] A2 B: pratiyuddhā D.

26c niḥśvasya] D: niḥsvasya A2 B.

26d yaddhyāna°] A2: taddhyāna° B D.

27a °viṣīdantīṃ] corr.: °viṣādantīṃ A2 B D.

28b svapnaphalaṃ] A2 D: svapnaphale B.

28c saṃsidhyeta] corr.: saṃsiddhyeta A2 B: saṃsiddhota D.

28d °moditā] B: °moditāṃ A2: °moditān D.

29a nṛpātmajo] corr.: nṛpātmajā A2 B D.

29b bodhisattvo] ≒ bodhisatvo A2 D: bodhisatvā B.

29c tyaktvābhiniṣkramya] A2: tyaktvāviniṣkramya B D.

30a tīrthikāñ] A B: tirthikāṃ D.

30c saṃbodhim] A2 D: sebodhim B.

30d bhavet] A2: bhavat B D.

31d *prahlādayet] ex coni: prahlādayan A2: prahlādayat D: prahlādaman B ‖ pramodayan] B D: prabodhayan A2.

32a satyaṃ] B D: tatyaṃ A2.

33b tato] A2 D: tatvo B ‖ surālayam] A2 D: sutālayaṃ B.

33d abodhayat] A2 B: abodhayet D.

34c prabhaved] A2: prabhave B D.

34d saṃprasedire] A2 B: saṃpraśedire D.

36a niśīthe] B D: niśithe A2.

36b gopā] D: rāmā A2: gāmā B ‖ śayyāsanāśritā] B: śaryyāsanāśritā A2 D.

36c °vaśagā] A2 D: °vasagā B.

36d īdṛśān] A2 D: īdṛśāna B.

37b kampitā] A2 D: kanpitā B || sābdhaparvatā] A2: sāddhiparvatāḥ B: sādhviparvatā D.

37c śṛṅgā] A2 D: śṛṅgo B.

37d dhvaṃsitāḥ] corr.: dhvansitāḥ A2 B D.

38a conmūlitāś] D: conmūlitā A2: cānmūlitā B.

38c ravīndū] A2 D: ravīndu B.

38d *nabhaḥsthau] ex coni: nabhasthaḥ A2: nabhastaḥ B: nabhasta D || patitau] A2 B: patito D.

39a chinnitāḥ] D: cinnitāḥ A2 B || keśāś] corr.: keśā A2 B D.

39d makuṭam] B: makutaṃ D: makūṭaṃ A2.

41a chattradaṇḍaṃ] metre!

41c ābharaṇāni] A2 B: āvaraṇāni D.

41d *prahitāni jalair] ex coni: prohitāni jaler B D: projvaleni jaler A2. Or read *proḍhitāni jalair? (*proḍhita < proḍha?)

42a °kāravastrāṇi] ≒ °kāravastrāni D: °kārāvastrāṇi A2: °kāravastāṇi B.

44d śayyāyāṃ] A2 B: śaryyāyāṃ D || samupāśritā] D: samupāśritāḥ A2 B.

45a *vismitya] ex coni (or *vismita-): vismiya A2 B D || bhinnitasvāntī] B: bhinnitasvāntas A2: nititasvānto D.

45b taddhyāna°] A2: taṃ dhyāna° B: ta dhyāya D.

45c evaṃ] B D: evan A2.

45d bharto 'pi] B D: bharttāpi A2.

45e yaśodharāṃ] B: yaśodharā A2 D.

46d *manyase] ex coni: manyasu A2 B D.

47a bhartrā] A2: bharttā B: bhartā D.

48a svapne] A2 D: svame B.

48c bhaven nūnaṃ] B: bhavan nūnaṃ D: bhaved bharttā A2.

48d trasitaṃ] A2: trarsitaṃ B D.

49c nimittam] A2 B: nimitam D || ālokya] A2: āloka B D.

50a prasīdātu] A2 B: prasīdātra D. (prasīdātu is m.c. for prasīdatu. Cf. 18a viṣīdātu)

50c paśyeyur] corr.: paśyeyun D: paśyapur B: paśyetmun A2.

51c °śṛṅgāś] A2: °śṛṃgāś: °śṛgāś B.

52a sarve] A2 B: sace D.

53a dṛśyante] B D: dṛśyate A2 || vātair] A2 D: vāter B.

53b unmūlāḥ] B D: unmūlā A2.

53c patitaṃ] B D: patitā A2

53d ubhau] A2 B: ubho D.

54b *karau] ex coni: tanau B D: pādau A2.

54c chetsyate] B D: chetsyante A2.

55b ravīndū] A2 D: ravīndu B || patitau] A2 D: patito B.

55d pūjyārhantī] A2 D: pujyārhantī B || bhaviśyasi] B D: bhaviśyati A2.

56b viśīrṇaṃ ca] D: viśīrṇañ ca A2: viśīrṇa ca B.

56c strīkāyam A2 B: trikāyam D.

57a °daṇḍaṃ ca] A2 D: °daṇḍa ra B.

57b mañcapādāś] A2: pañcapādāś B D || bhagnitāḥ] corr.: bhagnitaḥ A2 B: bhagninaḥ D.

57c dṛṣṭā] A2 B: dṛṣṭvā D

57d °phalam aham] corr.: °phalaṃmaham D: °phale maham A2 B.

58b *caturoghān] ex coni: caturogho A2 B D || bhavodadheḥ] A2 D: havodadheḥ B.

59b *śayyāyāṃ] ex coni: śayyāya B: śaryyāyā A2 D.

59c uditāni] A2: uhitāni B D.

59c jalaughaiś] corr.: jarloghaiś B: jaloghaiś A2 D.

59d yat *priye] ex coni: yat priyā A2: yet priyā B D.

61a maholkā dṛśyate] corr.: mahotkā dṛśyase A2 B D.

61b vahiḥ] A2 B: vahi D.

61d samāvṛtam] B D: samovṛtaṃ A2.

62a avidyātamasā] A2: avidyāhatamasā B: avidyāhaṃ tamasā D

63a yad vāpi] A2 B: yad vopi D.

63d bhojyate] A2 B: labhyate D.

64a *abhicchittvā] ex coni: abhicchinnā A2: abhicchiktvā B: abhicchiktā D.

65c tenārhantī] A2 D: tenārhanti B.

65d lapsyase] A2: lapsyasa B D.

66a *durgater bhītir] ex coni: durgate bhītir A2 B: durgati bhīti D.

67b *cīrṇitaṃ: ex coni (cf. Lalitavistara): vīrṇitaṃ B D: kīrtitaṃ A2.

67c *kṣāntiḥ *prabhāvitā] ex coni (cf. LV): kṣānti prabhāvitāṃ B: jānti prabhāvitāṃ A2 D.

68b *prasīdante] ex coni: prasīdantaḥ A2 B: prasīdanta D || *sumaitritāḥ] ex coni: sumaitritā B D: samaitritā A2.

69d prācarāmi] A2 B: prācarāsi D.

70a sarve] B: sarva A2: sarvaṃ D

70c pāpāś] A2: māyāś B D.

71b pramoditā] B D: prabodhitā A2.

71d bhaviṣyasi] A2 D: viṣyasi B.

72a ye] A2 B: yat D.

72b bhadranimittitāḥ] B D: bhadranimittitā A2.

72c tad *āvayor] ex coni: tadāvayo A2 B D.

73b °śrayāḥ] B D: °śriyāḥ A2.

74a satyaṃ] A2 D: satvā B.

74b sarvabhadrā°] A2: sarvaṃ bhadrā° B D.

74d cara] A2 B: caraḥ D.

75b trimaṇḍalā] B D: trimaṇḍalāḥ A2.

75d āpnuyāḥ] A2 D: āpnuyā B.

76a iti bhartrā] A2: iti bharttā D: iti rttā B.

76d prabodhitā] B D: prabodhitāḥ A2.

77a mahāsattvo] ≒ mahāsatvo A2: mahāsatvā B D.

77c śayyāsamāśritaḥ] corr.: śaryyāsamāśritaḥ A2: śaryyāsanāśritaḥ B D ‖ suptaḥ] A2 B: supta D.

77d *pañca°] ex coni: mañca A2: maśca B: sañca D ‖ apaśyata] corr.: apaiśyata B: apaiśyate D: apaśyate A2.

78a sarvāṃ mahīṃ] corr.: sarvā mahī A2 B D ‖ śayyāṃ] A2 B: śaryyāṃ D.

78c °dakṣakarau] corr.: °dakṣikarau A2: °dakṣakaro B D ‖ *sthitau] ex coni: ..hau A2: gāhau B D

80c sthirikaṃ] A2 B: sthirakaṃ D.

80d *prodbhūya] ex coni: prāk bhūya A2: prādbhūya B D.

82a prasupto 'sau] corr.: prasuptāsau A2 B D.

82b prādrākṣīt] A2 D: prādrākṣī B ‖ ātmanaḥ] B D: īdṛśaḥ A2.

82c catvāro] B D: catvāraḥ A2 ‖ lohitātmānaḥ] A2 B: lohitātmāno D.

83c dṛṣṭās] A2 B: dṛṣṭvā D.

84c catvāraḥ] A2 B: catvāra D ‖ pakṣiṇo] D: pakṣiṇāṃ A2: pakṣiṇā B.

84d °varṇāḥ khāt] corr.: °varṇā khāt D: °varṇā vān A2: °varṇā vāt B ‖ samudāgatāḥ] corr.: samudāgatā A2 B D.

85a svapādāv] D: svapādām A2: svapādān B.

85c saṃdṛṣṭā] A2 D: saṃdṛṣṭo B ‖ ātmanas] A2 B: cātmanas D.

86b evam] B D: eva A2 ‖ samīkṣata] A2 B: samīkṣataḥ D.

86c °*śailāgre] ex coni: °śasyāgre A2: °gasyāgreḥ B: °gasyāgre D.

86d 'nupalipto 'bhi°] corr.: 'nupaliptābhi° A2 D: āliptābhi° B.

87c pañcamaṃ svapnaṃ] corr.: pañcame svapnaṃ A2: paṃcame svapnaṃ B D.

88b apaśyata] B: apaśyatā A2: apaśyataḥ D.

88c *uhyamānā] ex coni (cf. Lal, uhyamānā): drakṣyamānā A2: ukṣyamānā B D ‖ asaṃkhyeyāḥ] A2: asaṃkhyeyā B D.

88d sattvā] ≒ satvā A2 D: om. sattvā B.

89b prottārya] B D: prāttārya A2.

90c rogiṇo] A2 D: nogino B.

90d dṛṣṭvātmanā] A2: dṛṣṭvātmano B D.

90d mahauṣadhaiḥ] D: mahoṣadhaiḥ A2 B.

90e °bhūtena te] A2 D: °bhūtema ta B.

90f nirāturāḥ] A2 B: jināturāḥ D.

91a jayakīrtiś] D: jayakīrttiś A2: jayakīrtti B.

92a siṃhāsanāsīnam] A2: siṃhāsanāsītam B: siṃhāsanāsīnām D.

92b amarādibhiḥ] A2: amarodibhiḥ B: amagedibhiḥ D.

92c kṛtāñjalipuṭaiḥ] A2: dhṛtāñjalipuṭai B: dhṛtvāṃjalipuṭaiḥ D || śiṣyair] A2 D: śiṣyer B.

92d vandyamānaṃ] A2 D: vanpamānaṃ B || praikṣata] corr.: prekṣata A2: vaikṣyataB: maikṣata D.

93b svapnaṃ] A2: svapna B D || °bodhitaḥ] corr.: °bodhitāḥ A2 B D.

94c yaśodharā] A2 D: vaśodharā B.

94d sampaśyanty] A2 B: sampaśyan D || evam] A2 D: avam B.

95d samādeṣṭum] A2 D: samādeṣṭam B.

96a samākhyātaṃ] A2 B: samsamākhyātaṃ D.

96d *sampaśyann evam] ex coni: sampaśyanty evam A2 B: sampaśyantyaivam D.

97a yad ahaṃ] A2 D: yad ehaṃ B.

97a supriye] A2 B: supriya D.

97b svapne] A2 B: śvapne D.

97d tiṣṭhāmy evaṃ] A2 D: tiṣṭhānyeva B.

98a bhartrā] corr.: bharttā A2 B D.

98d sampaśyann evaṃ] B: sampaśyan evaṃ D: sampaśyanty evaṃ A2.

99d bodhayitum] A2 B: bodhayatum D.

100b bodhisattvo] ≒ bodhisatvo A2 D: bodhisatvā B.

100d ādiśat] B D: abravīt A2.

101a yathā *dṛṣṭaṃ] ex coni: yathā diṣṭaṃ A2 B D.

101c svapna°] A2: svapne° B D.

102c °modantī] A2 B: °modanti D.

103a prathama°] B: prathamaṃ A2 D.

103b prapūrayet] corr.: prapūrayat A2 B D.

104c jagadbhadra°] A2 D: jagabhadra° B.

104d °dharmacakraṃ] A2 D: °dharmaṃ cakraṃ B.

105b sattvāḥ] ≒ satvāḥ A2: satvā B D.

106a caturthasya] A2 D: caturthaṃ sva B.

106b caturvarṇā] A2: catuvarṇā B D.

106d bhaveyur] D: bhaveyu A2 B.

107c sarve] A2 D (= sarveṣu, m.c.?): sarva B.

108a 'nyeṣāṃ] ≒ nyeṣāṃ A2 D: nyaṣāṃ B.

108b sattvān] A2: sattvā B D ‖ bhavodadheḥ] A2: bhavodadhe B D.

109c °*bhaiṣajye] ex coni: °bhaiṣajyaṃ A2 B D.

109d °kuryāṃ] D: °kuryā A2 B.

110f preṣayeyaṃ] A2 D: prasayeyaṃ B.

111e *yat tvaṃ] D: ya tvaṃ A2 B.

111f *āpnuyāḥ] ex coni: āpnuyāt A2 B D.

112b °lālasā] B: °lālasāḥ A2 D.

112c dhṛtvā] A2 B: kṛtvā D.

112d saṃramasva] A2: saṃnamasva B: saṃcarasva D.

113a bhartrā] corr.: bharttā A2 B D.

113c tathety] B D: tathāty A2.

113d prabodhitā] corr.: prabodhitāḥ A2 B D.

114b bodhisattvaḥ] ≒ bodhisatvaḥ A2 B: bodhisatva D.

115d prāramat] A2 B: prārabhat D.

116a cāritracaraṇa° A2: cāritravaraṇa° B: cāritravaraṇaṃ D.

116c surālayāc] A2 D: surālayā B.

116d samāviśat] B D: samāviśet A2

117a nimittam ājñāya] D: nimittam ārajñāya B: nimitta vijñāya A2.

117b sa] A2 B: saḥ D.

119d 'bhavan] ≒ bhavan B D: bhavat A2.

120a ādiṣṭam] ≒ ādiṣṭaṃ D: ādiṣṭaṃm A2 B.

120d śrutvaitad] corr.: śrutvetad A2 B D.

121 note] the text of A2 ends in the verse 121, pāda a, anumoda- (i.e. the end of 107b). The text of A starts after that, -nti in the beginning of 108a.

122a śāstrā] A2 B: śāstā D.

122b śrutv*āśoko *mahīpatiḥ] ex coni: śrutvānando mahāmatiḥ A2 B D.

(Colophon) iti svapna°] A(ante corr.): iti śrīlalitavistare svapna° A(post corr. marg.) B D ‖ samāptaḥ] A B: om. samāptaḥ D.

1.2　TJAM 第16章の和訳（全訳）

夢［という］品、第16章

かの阿羅漢たる賢き出家修行者、大通慧者ウパグプタは (mahābhijña upagupto) {**or:** 大通慧者マハーブッダは (°jño mahābuddho)}、かの王アショーカを (aśokaṃ taṃ patiṃ) {**or:** かの出家修行者アーナンダを (ānandaṃ taṃ yatiṃ)} 見つめながら呼びかけて、次のように語りました。— [1]

［**父王の夢**］

時にシュッドーダナ王は夜中に寝台にいて眠っていましたが、フリーデーヴァ［という兜率天の天子］の威神力によって、夢の中で次の様な［光景を］見ました —— [2]

宝珠の網に覆われた、宝石で飾られた大きな象に乗って、都城から出て行く息子［の姿］を。[3]　それを見ながら、沸き起こった大きな笑い声と泣き声を、そして自身が震えているのを、［自身の］体が熱苦に激しく焼かれているのを［夢で見ました］。[4]

そのことを夢に見て、王は目覚め、「私に何が起こるのだろうか」と、憂慮という毒に悩み苦しみながら、ずっと物思いに耽っていました。[5]

このように不安に心が襲われているかの王を見て、世界の守護神たちが集まってきて、次のように言いました。[6]

「大王よ、恐れないで下さい。清澄な心をいだき、歓喜してください。あなたの夢において成就する果（予知夢の実際の意味）、それを私は語りましょう。お聞き下さい。[7]

菩薩であるあなたの賢き息子は生類の益のため、王権を捨て、［家を］出離して、出家した者・修行者となるでしょう。[8]

あなたが夢で笑ったのは、［果として］あなたに苦が生じるからです。あなたが夢の中で泣いたのは、彼によって甚だしい安楽が生じるからです。[9]

必ずあなたの息子であるかの菩薩・大士はマーラの群に打ち勝って、阿羅漢として悟りを達成し、仏（勝者）となるでしょう。[10]

このように正しく認識して、大王よ、落胆しないでください。運命の力によりあなたはこの瑞夢を見たのです。」[11]

このように世界の守護神たちの皆が教示するのを聞いて、よく理解させられた王は、深思しながら、気落ちしたままでいました。[12]

［**義母ガウタミーの夢**］

さて［菩薩の］母の妹たるガウタミーも寝台にいて、夜中に睡眠に入り、眠っていると、このような夢をみました。[13]

それはかくの如くです。菩薩・大士たるかの王子が一匹の牡牛たる姿となり、生まれのよい、すべて［の牛］を凌駕した［大きな］角を生やした［牛］として、[14]　立派なこぶと大きな体をもつ、白色の美しい、心を魅する［姿］で、甘美な声で啼きながら、都城から急いで走り出てゆきました。[15]

そのような夢を見て、ガウタミーは目覚めました。その［夢の］果を知りたいと願いながら、その事に心が占められたままでいました。[16]

そんな状態でいる彼女を見て、神々の王（インドラ）はやって来て、よく理解させるため、みつめながら呼びかけ、次のように語りました。[17]

「ガウタミー、気落ちしないで下さい。あなたが夢に見たことの、その果を語りましょう。心を定めて、お聞きなさい。[18]

それはかくの如くです。大通慧者であるかの菩薩は生類の益のため、王権を捨てて、［家から］出離して、出家し、禁戒を行じながら、[19]　異教徒たちとマーラの群に勝利し、禅定をなして悟りを得るでしょう。その後あらゆる場所で生類に正法を教示することでしょう。[20]

その後、彼は阿羅漢・生類の師として、生類を法から成る者に変え、如来のなすべき仕事を達成して、［涅槃して］仏の住まいに至ることでしょう。」[21]

［菩薩の妻の夢（1）］

次に、夜中に寝台にいたヤショーダラーも、睡眠の力の中に陥って、眠ると夢の中で次のような［ヴィジョン］を見ました。[22]

それはかくの如くです。かの大通慧者、シュッドーダナ王の息子（菩薩）は王宮から上昇し、たちまち空の中にいました。[23]

彼は雲になって、あらゆる場所を途切れなく覆いながら、低い深い音を轟かせて、すべての者の心をうっとり惹きつけながら、[24]　稲妻の美の光輝という［沢山の］ランプをもって、いたるところで黒闇をうちやぶり、とても冷涼な雨滴をもって生類を喜ばせました。[25]

このような夢をみて、ヤショーダラーは目が覚め、驚愕して起きて、ため息をつきながらその事について深思に耽っていました。[26]

その事の懸念のゆえに気落ちしている彼女を見て、ブラフマー神（梵天）がやって来て、虚空に居て、語りかけて次のように教示しました。[27]

「よきご婦人よ、気落ちしないで下さい。あなたの夢の果は善く、大利が達成されるでしょう。それ故［むしろ］歓ぶ者として、晴朗な気持ちになられて下さい。[28]

この王子は実に菩薩であり、生類の益のため、王位を捨てて、［家から］出離し、出家の禁戒を行じながら、[29]　苦行によって外道師たちに勝ち、マーラ（魔）の大群に打ち勝ち、阿羅漢として、悟りに到達し、法王・仏（勝者）となるでしょう。[30]

その時至る所で人々の上に教えの甘露を雨降しながら、煩悩の火に焼かれている生類を歓ばせ (pramodayan) {or: 生類によく理解させ (prabodhayan)}、清涼たらしめるでしょう。[31]

このように正しく認識して、心の明澄を得なさい、落胆してはなりません。あなたも同じようになられて、諸仏の教えを行う者となりなさい。」[32]

このようにかのブラフマー神は［彼女に］教示すると、その後神々の世界に行って、すべての神々を呼び寄せて、話してよく理解させました。[33]

神々はそのブラフマー神による教示を聞いて、よく理解を得、まもなくブッダが現れる、と言いながら、心の明澄（浄信）を得ました。[34]

ヤショーダラーもそのブラフマー神による教示を聞いて、よく理解を得、夫はきっと仏陀になるだろう、と思念しつつ、喜びました。[35]

［菩薩の妻の夢（2）］[13]

その後更に、ベッドで休んでいるゴーパーが、夜中に睡眠の力にとらわれ、眠っていると、夢のなかで次のような［ヴィジョン］を見ました。[36]

それはこの様なものです。海と山を伴う大地すべてが揺れました。甚だ激しい風によって山頂は崩れ、地に落ちました。[37]

大風によって樹は根こぎにされ、折れて倒れました。虚空にある太陽と月は星々を伴って地上に落下しました。[38]

自分の髪毛が切られ、また両手と両足が切れました。自分の体が裸にされ、王冠が落ちました。[39]

真珠のネックレスも切れて、地面に散乱しました。ベッドの［四］脚も折れ、［その］ベッドは地面に［倒れました］。[40]

［彼女の］夫の輝かしい傘の柄は砕けて、地面に落ちました。装身具は散乱し、水によって運ばれ流されてゆきました。[41]

頭冠や装飾品や衣類がベッドの上に散乱していました。都城から松明が出て行き、都城が闇によって覆われました。[42]

鈴が付いたネットが裂けました。真珠のネックレスは落とされました。海は震えました。山の王メールも震えました。[43]

これらのことを夢の中で見て、かのヤショーダラーは目覚めて、すぐ立ち上がり、［夫のいる］その寝台に赴きました。[44]

---

13. TJAM においては菩薩の妻ゴーパーとヤショーダラーは同一人物であり、そのために菩薩の同一の妻が二回、別様に夢を見たことになっている。ここの TJAM 第16章の記述のソースである Mahāvastu のヤショーダラーの夢と Lalitavistara のゴーパーの夢とは伝承が異なっているが、TJAM はそれら両仏伝の異なる伝承を菩薩の同じ妻が見た夢として、うまく両立させた。

驚き、乱れた感情をもつ彼女は、その事について心で思い耽っていました。そのような状態である彼女を見て、夫もそばに寄り、苦悩した顔のかのヤショーダラを見つめながら、次のように語りました。[45]

「愛するひとよ、あなたは苦悩した顔をしていますが、いかなる苦しみが生じたのですか。もし私を夫と思うなら、ここで私に正しく話してください。」[46]

このように夫が教導するのを聞いて、苦悩した顔のかのヤショーダラーはその夫を見つめて、次のように語りました。[47]

「王中の王よ、私は眠りの中でこのようないくつかの［夢］を見ました。一体、いかなるその［夢の］果があるのかと思い、それ故に私の心は怯えているのです。」[48]

こうしてゴーパーの語った夢の出来事を聞いて、かの夫は［いかなる］前兆かを考察して、妻に次のようによく理解させました。[49]

「ゴーパーよ、喜びなさい。あなたに何も悪い事はありません。正法をなす者たちだけが夢でこのような［ヴィジョン］を見るのであり、他の人々は［見ません］。[50]

あなたが夢で見た、すべての大地が震動したこと、また、大風に打たれて岩山の頂きが地面に落ちたことは、[51]　［その夢の果として］神々などすべての生き物たちがあなたに敬意を示すことでしょう。このことを正しく認識して、落胆せずに、それを喜びなさい。[52]

また［あなたによって］見られた、樹々が風に打たれて、根こぎにされて倒れたこと、王冠が落ち、髪の毛と両手が切られたこと、[53]　裸の自分の両足と両手が切られたこと、［その夢の果として］あなたの煩悩の網は断たれるでしょう。また有為［法］についての見解の網が［断たれるでしょう］。[54]

また星と共に、太陽と月が地に落下したので、それ故に［あなたは］煩悩という敵に打ち勝って、供養されるべき女尊者となるでしょう。[55]

また真珠のネックレスが散乱し、宝石の帯が切れたので、それ故に［あなたは］女の体を捨てて、男性の体を得るでしょう。[56]

また砕けた私の傘の柄が、そして砕けたベッドの［四］脚が、ゴーパーよ、あなたによって夢で見られましたが、その果を私は得るでしょう。[57]　すなわち、私は生存の海の四暴流を越え、一切法の王、師、三界の主となるでしょう。[58]

またベッドの上で頭冠や装飾品や衣類が散乱し、水の暴流によって浮かぶのをあなたが見ましたが、[59]　［その夢の果として］私は心浄らかな者となり、めでたい相好に飾られ、世界の人々に讃えられながら、あらゆる場所を遊行するでしょう。[60]

また大きな松明が都城の外に出て行くのが見られ、また都城の全体が闇に覆われたのが見られたことは、[61]　［その夢の果として］無明の闇に満ちた［世界］に、大きな輝きをもつ智慧の灯明を私は燃え輝かせて、世間の人々に仏の住まい（仏国土）を示すでしょう。[62]

ゴーパーよ、真珠のネックレスが散乱し、また黄金の鎖が切れたこと、その［夢の］果を私は［次のように］享受します。[63]　煩悩の網を破り、［正］法の経典を教示することで、私はすべての有情を救済し、常に浄行を行わせるでしょう。[64]

またあなたは諸海が動揺し、メール山が震動したことを見たので、それ故、あなたは女の尊者として、大きな供養を至る処で受けることでしょう。[65]

あなたに悪趣の怖れはありません。自分について憂い悲しまないで下さい。歓喜・喜悦と真の安楽を保持して行動し、落ち込まないで下さい。[66]

私によって布施がなされたこと、また誓行が善戒に基づき行ぜられたこと、また忍辱が絶えず行修され、正法が常に達成されたことは、[67]　その果として、あらゆる人々が私に親切であり、とても友好的で、［彼らは］好意と喜悦をもって供養をなしながら、歓びを得ているのです。[68]

私は百千劫の間、菩薩行の誓戒を行じながら、あらゆる有情に利益をなして、絶えず浄行をなしてきました。[69]　その果として、すべての者たちは喜悦して、私に対して明浄の心（信心）を起こします。そして［彼らの］あらゆる罪悪は断滅し、菩提道が清められます。[70]

それ故、あなたは憂悩しないで下さい。歓喜によって心を喜ばせて下さい。幸と美とよき徳質の保持者として、幸せに恵まれた女にもあなたはなることでしょう。[71]

あなたに夢で見られた［ヴィジョン］はすべて瑞相です。それ故、私たち二人はきっとめでたい悟りの達成をもつことでしょう。[72]

無垢の心をもち、浄らかな感官・身体をもつ有情たち、善逝の子たちは、吉祥なるこのような夢を見るものです。[73]

以上を正しく知って、あらゆる勝れた目的を成就させる、悟りへの誓願を堅持しながら、三宝を憶念して、行じなさい。[74]

その福徳の享受によって、三輪清浄なる女として、悟りの知に達して、あなたは仏の境地を得ることでしょう。」[75]

このように夫が教えたことをかのヤショーダラーは聞いて、よく理解して、「そういたします」と信受して歓び、歓喜しました。[76]

［**菩薩の夢（1）**］

さて夜中にかの菩薩・大士も同様にベッドに身を横たえ、眠りましたが、五つの夢を見ました。[77]

（**第一の夢：**）全大地を寝台とし、スメール山を枕とし、左右の両手を［それぞれ］東と西の海に置き、[78]　南の海に両足を自ら伸ばして眠っていました。このような第一の夢をかの大慧者は見ました。[79]

（**第二の夢：**）更にまた、彼が同様に眠った時、夢の中で次のように見ました。スティリカという名の草が臍の円輪から生じ、[80]　天空までを［すべて］覆って、自分にとっての傘蓋のように立ちました。第二の夢をこのようにかの菩薩は見ました。[81]

（**第三の夢：**）更にまた同様に彼が眠った時、次のような自身の夢を見ました。赤い体をもち、青黒い頭をもつ四匹の生き物が、[82]　足の裏から出現し、［菩薩］自身の臍の輪まで覆いながら立ったのを、彼は第三の夢において見ました。[83]

（**第四の夢：**）更にまた同様に、彼が眠った時、次の様な夢を見ました。四羽の異なる色をもつ鳥が空から飛んでやって来て、[84]　［菩薩］自らの両足に接吻をしながら、［全身］真っ白になり、消えました。彼は自らの第四の夢をこのように見ました。[85]

（**第五の夢：**）更にまた同様に、眠った彼は次の様な夢を見ました。大きな糞の山の上でそぞろ歩きしながら、汚されることなく、[86]　彷徨い歩きつつも、あらゆる方角を照らしている自分自身が［いる］、そのような第五の夢をかの大慧者は見ました。[87]

［**菩薩の夢（2）**］

また更に同様に、彼は眠って次の様に夢を見ました。無数の生き物たちが大河の水によって押し流されており、[88]　［それを］見て、自らが一艘の小舟になり、引き上げて救い、陸の上に彼らを立たせました。このような第六の夢をかの大士は見ました。[89]

また更に同様に、眠った彼は次の様な夢を見ました。医者になった［彼は］自ら沢山の病気の生き物たちを診て、偉大な薬草をもって彼らすべてを無病で健康にしました。[90]

また［彼は］合戦における自分の勝利の名声が拡がるのを見、虚空から神々によって歓びの声が［自分に］伝えられるのを［見ました］。[91]

またメール山上で獅子座に座っている自分に対して、神々などや合掌をしている弟子たちが拝んでいるのを彼を見ました。[92]

かの大士はこのような夢を見て、目覚めました。そのすべてを想起しながら、瞑想に集中した状態でいました。[93]

［**菩薩の夢の説明**］

このように瞑想しながら坐っているその夫を見て、最愛の妻であるかのヤショーダラーは見つめながら次のように言いました。[94]

「王子、あなたは瞑想しながら坐っておられますが、一体どうしてそのようにして過ごしていらっしゃるのですか。もし私に愛情があるなら、そのことをお示しください。」[95]

このようにゴーパーが語ったのをかの菩薩は聞き、最も愛しい妻であるかのゴーパーを見つめながら、次の様に答えました。[96]

「愛しいゴーパーよ、今私が夢の中で見たそのことについて憶念を保ちながら、このように沈思して過ごしていたのです。」[97]

そのように夫が語ったのを聞いて、かのヤショーダラーは夫であるかの大士を見つめて、こう尋ねました。[98]

「王子よ、何を夢にご覧になったのですか。その果はいかなるものですか。そのことを正しくお示し下さり、私によく理解させて下さい。」[99]

このように妻が尋ねたのを聞いて、かの菩薩は笑いながら、いとしい愛する女であるかのゴーパーを見つめ、このように教えました。[100]

「わが妃よ、お聞きなさい。見たことをその通りにすべてお話しします。」そう言って、夢の出来事を詳しく教示しました。[101]

「それらの果報を話しましょう。妃よ、集中してお聞きなさい。それを聞いて、歓びつつ心の清澄を得なさい。気落ちしないでください。[102]

第一の夢の果報は、私は悟りに達して世尊・ジナ（仏）になろうという、私の誓願を満たすものです。[103]

第二の夢の果報によって、ヴァーラーナシーにおける仏のアーシュラマ（出家者の住み処）において、善き法輪を転じながら、生類に［善戒を］行じさせるでしょう。[104]

第三の夢の果報によって、あらゆる有情が歓喜して、誠信（バクティ）をもって私を信奉し、神々の住まいに赴くことでしょう。[105]

第四の夢の果報によって、四つの種姓の人々も［皆］私に帰依をなして、梵行者となることでしょう。[106]

第五の夢の果報によって、あらゆる世界においても私は敬われ、供養され、導師として尊崇されるでしょう。[107]

それによって、また他の果報によって、あらゆる有情を生存の海から救済し、幸せな状態に置いて、善戒を私は行わせることでしょう。[108]

煩悩という苦熱の火によって焼かれているあらゆる有情を至る処で浄化しながら、正法という不死の甘露の薬効で［彼らを］私は健康にするでしょう。[109]

阿羅漢としてマーラの群に勝利し、三界の世界において、阿羅漢である弟子たちの群と共に行動して、有情たちに気づきを与えつつ、三乗に安立せしめ、仏の住まいに私は送ることでしょう。[110]

この夢の果は悟りの達成を示すものであり、善い前兆です。夢の異熟によってこれはあなたにとっても実にめでたいものです。それ故に、あなたはマーラ（魔）という依処を捨てて、正法という依処を得ることでしょう。[111]

以上のことを正しく認識して、正法の徳性を強く求める女として、三宝への憶念を保ちながら、常に浄行を愉しみなさい。」[112]

このように夫が教示したことを聞いて、かのヤショーダラーは「そういたします」とと信受して歓び、歓喜しました。[113]

［**菩薩の妻の懐妊**］

その時かの菩薩サルヴァールタシッディ（一切義成就）は、心を集中し、往古の菩薩たちの［行った］世俗法について考えました。[114]

瞑想して、菩薩たちの世俗法の法性（常法）を思い出し、家系（後継ぎ）のために彼は性愛の行為を欲し、ゴーパーと共に楽しみました。[115]

その時チャーリトラ・チャラナ・スダルシャ・ユーティカ（行為の動作が美しいジャスミン［の如き者］）という名のシャクラ（インドラ神）が天界の住まいから下生して、ゴーパーの子宮に入りました。[116][14]

そのことの徴候を一切智であるかの菩薩は認識して、ゴーパーの頭の上に護符紐・大真言をかけました。[117]

その後かのサルヴァールタシッディは出離することを願いながら、時を観察し、悟りへの心を抱いて彼は瞑想しつつ住しました。[118]

そのようにかの大士が出離することを願っているのを見て、梵天をはじめとする神々すべては歓喜しました。— [119]

以上、私の師が教示されたことをそのまま私は今お話しました。大士よ、あなたもこれをお聞きになり、随喜（信受して歓ぶこと）されますように。[120]

この『夢の出来事の教話』を聞いて随喜する者たちは皆、大士となって悟りを達成しますように。[121]

—— 以上のように聖者が説いたのを聞いて、大地の守護者であるアショーカは (aśoko mahīpatiḥ) {or: 偉大な智者アーナンダは (ānando mahāmatiḥ)}、「そのようにいたします」と約言し、衆会の人々と共に、喜んで信受しました。[122]

『夢』［という］品、第16章終わる。

---

14. Cāritracaraṇasudarśayūthika という名のシャクラが菩薩の妻に入胎して釈尊の息子 Rāhula として誕生した出来事は Mahajjātakamālā 第32章第19〜22偈ならびに Karuṇāpuṇḍarīkasūtra (ed. Isshi Yamada (1968) 校訂テクスト p. 315) に記されている。

２．Tathāgatajanmāvadānamālā 第17章の校訂研究

第17章を内容的に４区分して、各部所のソースとオリジナル箇所をおおまかに示せば、次の通り：

（１）第2〜第13詩節（父王の菩薩への説得 1）の記述は Lalitavistara 第14章を利用。

（２）第14〜第58詩節（父王の菩薩への説得 2）の記述は TJAM オリジナル。
ただし途中、第28詩節の記述は Lalitavistara 第14章を利用。

（３）第60〜68詩節（父王が園林と道の清掃を命じる）の記述は Lalitavistara を第14章を利用。

（４）第69詩節以降、章末までの記述は Buddhacarita 第3章と第4章を連続的に利用。
ただし途中、あちこちに TJAM の改変した詩節やオリジナル詩節がはさまる。

2.1　TJAM 第17章『老人・病人・死人を観察して性愛の欲望を退ける』の梵文テクスト

17 Jīrṇarogigatāsudarśanaratirāgavighātanaparivarta

[108a2] atha so 'rhan **mahābhijña upagupto** {**or:** °aḥ śākyasiṃho} yatiḥ punaḥ /
tam **aśokaṃ nṛpaṃ** {**or:** ānandaṃ yatiṃ} paśyan samāmantryaivam ādiśat // 1
etatsvapnapravṛttāntaṃ śrutvā śuddhodano nṛpaḥ /
putro 'yaṃ pravrajen nūnam iti dhyātvā vyaṣīdata // 2
tataḥ sa janako rājā putrasaṃdarśanotsukaḥ /
samantrījana utthāya drutam antaḥpure 'carat // 3
tatra sa samupāviṣṭaḥ samantato vilokayan /
kāñcukīyaṃ samāmantrya papracchaivaṃ samādarāt // 4 ≈ L 186.2; H i,670.7-8
asti bhoḥ kāñcukīyātra nandano me kuhāśritaḥ /
tanmukhaṃ draṣṭum āyāmi tan me saṃdarśayātmajam // 5 ≈ L 186.2-3; H i,670.8
iti rājñā samādiṣṭaṃ kāñcukīyo niśamya saḥ /
asti ta ātmajo rājann atrāgatyābhidṛśyatām // 6 ≈ L 186.3; H i,670.8
iti tenoditaṃ śrutvā śuddhodanaḥ pitā nṛpaḥ /
sahasā samupāsṛtya tam ātmajam apaśyata // 7
dṛṣṭvā dhyānābhisaṃraktaṃ ratisaṃbhoganiḥspṛham /
putraṃ taṃ suciraṃ paśyan manasaivaṃ vyacintayat // 8
ātmajo 'yaṃ mahāsattvo virakto rājyaniḥspṛhaḥ /

tathābhiniṣkramen nūnaṃ yathā svapne 'bhidṛśyate // 9 ≈ L 186.4-6; H i,670.9-11

iti dhyātvā sa rājendra upāsṛtya tam ātmajam /

āliṅgya śirasi ghrātvā tyaktāśrur evam abravīt // 10

hā putra katham evaṃ tvaṃ ratisaṃbhoganiḥspṛhaḥ /

yatir iva viraktātmā dhyānarakto 'vatiṣṭhase // 11

kiṃ te 'bhijāyate duḥkhaṃ yat tvaṃ kāme 'pi niḥspṛhaḥ /

yad icchasi vadasvātra dāsyāmi te tad īpsitam // 12

yadīcchasi mahīṃ sarvāṃ rājyaṃ śrīsampado 'pi ca /

tyaktvā dāsyāmi te nūnam ādāya svecchayā rama // 13

sarveṣām api dharmāṇāṃ rājadharmaṃ mahattaram /

sarvaloko 'yam āśritya [108b] saṃcarante sadā sukham // 14

tatrāpi ca mahaddharmaṃ kāmaṃ saṃsārasādhanam /

tadarthaṃ ratisaṃrāgacaryāvrate mahatsukham // 15

rāgo hi vardhayec cittaṃ saṃsāradharmasādhane /

tasmād rāgamahotsāhasukhaṃ bhuktvācared raman // 16

vinā rāgaṃ na saṃsāre dharmārthaguṇasatsukham /

tasmād rāge matiṃ dhṛtvā bhuṃkṣva kāmaṃ sukhaṃ raman // 17

rāgo hi sādhayet kāmaṃ kāmāt santānam udbhavet /

saṃtatiḥ sādhayed dharmaṃ dharmeṇa kulasaṃsthitiḥ // 18

kuladharmasthitir yatra tatra lakṣmīḥ sadāśrayet /

yatra samāśritā lakṣmīs tatra sarvārthasampadaḥ // 19

sarvārthasampado yatra sa kuryād dānam īpsitam /

etatpuṇyaviśuddhātmā bhadraśrīsadguṇāśrayaḥ // 20

duṣṭamitraviraktātmā sanmitraguṇasaṃrataḥ /

suśīlo bhadrikācāraḥ pariśuddhatrimaṇḍalaḥ // 21

sarvasattvahitādhāraṃ kṣāntivrataṃ samācaret /

tato vīryamahotsāhaiḥ sarvaṃ dharmārtham arjayet // 22

tato dhyānaviśuddhātmā prajñāratnam avāpnuyāt /

tadratnasuprabhādīpair bhāsayan sadgatiṃ vrajet // 23

iti vijñāya putra tvaṃ rāgacaryāvrataṃ caran /

kāminībhiḥ sahārakto bhuktvā kāmaṃ sukhaṃ rama // 24

vihṛtya pramadodyāne sarvartupuṣpamaṇḍite /

varṇagandharasopetaphalavṛkṣaiḥ praśobhite // 25

vicitrapuṣpamālābhir ātmānam abhimaṇḍayan /

phalāni pakvapathyāni prabhuñjāno yathecchayā // 26

snātvā sarovare 'ṣṭāṅgaśuddhāmbuparipūrite /
padmotpalādipuṣpāḍhye nānāpakṣisamākule // 27
mandire trividhe ramye haimantike sadauṣṇike /
graiṣmike śītalībhūte vārṣike samavāstuke // 28 ≈ L 186.10-12; H i,670.16-18
uṣitvā pramadāsaṃghaiḥ saha krīḍet pramoditaḥ /
yathābhilaṣitaṃ bhuktvā saṃcarasva sadā sukham // 29
etad eva hi saṃsāre dānavratasamudbhavam /
mahānandasukhotsāhaṃ saṃvṛttidharmasādhanam // 30
brahmaśakrādayo devāḥ sarve lokādhipā api /
kantā[109a]bhiḥ saha saṃraktā bhuktvā kāmaṃ ramanty api // 31
brāhmaṇā ṛṣayaś cāpi kuladharmasamācarāḥ /
te 'pi kāmaguṇāraktā ramanta bhāryayā saha // 32
sarvalokādhipā bhūpā rājānaḥ kṣatriyā nṛpāḥ /
te 'pi pañcaguṇotsāhai ramante pramadāgaṇaiḥ // 33
vaiśyāḥ prajādhipāś cāpi pañcakāmaguṇāratāḥ /
pramadāratibhuñjānāś carante kulasaṃvaram // 34
gṛhasthā vaṇijaḥ śūdrāḥ kāmabhogyasukhārthinaḥ /
sarvadravyāni vikrīya prakurvante dhanārjanam // 35
sārthavāhā vaṇignāthā api kāmasukhāśayā /
abdhim api samuttīrya ratnārjanaṃ prakurvate // 36
sādhavo dhaninaś cāpi nānopāyair dhanārjanam /
kṛtvā kāmasukhārthena na tyajanti sadodyamam // 37
daridrāḥ kṛṣinaś cāpi kṛṣikarmasamudyatāḥ /
te 'pi kāmasukhārthena na manyante pariśramam // 38
dāsāḥ preṣyajanāś cāpi parakarmasamudyatāḥ /
te 'pi kāmāśayā nityaṃ prakurvate dhanārjanam // 39
bhṛtyā sainyāś ca yoddhāras te 'pi kāmasukhāśayā /
anapekṣya svajīve ' pi viśanti raṇamaṇḍale // 40
durbhagāḥ kṛpaṇāś cāpi yācitvānnaṃ gṛhe gṛhe /
bhuktvā kāmasukhaṃ bhoktuṃ bhramanti sarvadārthinaḥ // 41
evaṃ sarve 'pi māṇuṣyāḥ śrīmantaḥ kṛpaṇā api /
yathākāmaṃ sukhaṃ bhuktvā praramante 'bhimoditāḥ // 42
paśavo jantavaś cāpi kṛmikīṭāś ca pakṣiṇaḥ /
svasvakāntāsahāraktā ramanto bhuñjate ratim // 43
bhūtāḥ pretāḥ piśācāś ca te 'pi kāmasukhāśayā /

svasvabhāryāratiṃ bhuktvā pracarante pramoditāḥ // 44
dānavā garuḍā nāgā api kāmasukhārthinaḥ /
pramadāratisaṃbhogaṃ bhuktvā ramanti sarvadā // 45
gandharvāḥ kiṃnarā yakṣāḥ kumbhāṇḍā rākṣasā api /
pramadābhiḥ sahāraktā ramanto bhuñjante sukham // 46
evaṃ vidyādharāś cāpi siddhāḥ sādhyādayo 'pi ca /
pramadāvaśagā nityaṃ ramanto bhuñjate sukham // 47
śakrādayo [109b] surāḥ sarve sahāpsarogaṇair mudā /
*divyāmṛtaṃ prabhuñjānā ramante svecchayā sukham // 48
yāmāḥ saṃtuṣitāś cāpi nirmāṇaratikā api /
paranirmitavaśābhivartikā amarā api // 49
sarvakāmaguṇāraktāḥ svasvāpsarogaṇaiḥ saha /
divyāmṛtaṃ prabhuñjānā ramante svecchayā sukham // 50
kāmadhātusamutpannaḥ ko na kāmavaśe sthitaḥ /
sarve kāntāvaśe sthitvā caranti kulasaṃvaram // 51
kāmo hi sarvasaṃsāradharmamūlo nigadyate /
vinā kāmaṃ kathaṃ dharmaḥ pracaret tribhaveṣv api // 52
tasmāt kāmavaśe sthitvā kuladharmasamāśritaḥ /
kṛtvā dānaṃ sukhaṃ bhuktvā saṃcarasva mudā raman // 53
yāvad yuvā svakāntābhiḥ saha raman pramoditaḥ /
svakuladharmasaṃsthityai sādhaya svātmasaṃtatim // 54
tato vṛddhatvasaṃprāpte saṃsthāpya svakulasutam /
pravrajitvā tapo'raṇye sthitvā munivrataṃ cara // 55
tathā cet te sadā bhadraṃ yāvajjīvaṃ sukhaṃ raman /
ante nirvṛttim āsādya saugatālayam āpsyasi // 56
iti vatsa parijñāya svakulasthitisādhanam /
rāgacaryāvrataṃ dhṛtvā rama kāntāgaṇaiḥ saha // 57
iti pitrā samādiṣṭaṃ niśamya sa mahāmatiḥ /
pitaraṃ taṃ samālokya tatheti pratyabhāṣata // 58
tataḥ sa janako rājā matvātmajaṃ prabodhitam /
amātyaṃ samupāmantrya sampaśyann evam ādiśat // 59
amātya yuvarājo 'yam udyānaṃ gantum icchati /
tatpathi samalaṃkṛtya ghaṇṭāghoṣaṃ pracāraya // 60 ≈ L 187.7-8; H i,672.14-15
iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvāmātyas tatheti saḥ /
sahasā nagare mārge sarvataḥ samaśodhayat // 61

tato dhvaja*patākābhiḥ samalaṃkṛtya sarvataḥ /
tatrāpi pramadodyāne samalamabhyakārayat // 62
tatas tajjanam āhūya rājñādiṣṭaṃ tathāvadat /
sādho ghaṇṭāṃ praṇādyaivaṃ sarvāṃl lokān prabodhaya // 63
tadupādiṣṭam ākarṇya tatheti sa prabodhitaḥ /
[110a] ghaṇṭāṃ ādāya tatrāśu sasahāyo mudācarat // 64
tato ghaṇṭāṃ praṇāditvā sarvatra nagare yathā /
rājñādiṣṭaṃ tathākhyāya sarvāṃl lokān vyanādayat // 65
śrīmān sarvārthasiddho 'yaṃ yuvarājo nṛpātmajaḥ /
ito 'hni saptame draṣṭum udyāne pramade vrajet // 66 ≈ L 187.8-9; H i,672.15-16
tad atrābhavyavastūni sthāpyāni mā puraḥ kvacit /
maṅgalyāny eva vastūni sthāpanīyāni sarvataḥ // 67 ≈ L 187.9-11; H i,672.16-18
tad ghaṇṭāghoṣaṇaṃ śrutvā sarve paurāḥ pramoditāḥ /
taṃ bhadrātmakaṃ draṣṭuṃ samutsukāḥ pracerire // 68
tataḥ **sa dhīro** mṛduśādvalāni
    puṃskokilonnāditapādapāni /
śuśrāva padmākaramaṇḍitāni
    gītair nibaddhāni sa kānanāni // 69[15] = Bc 3.1
śrutvā tataḥ strījanavallabhānāṃ
    manojñabhāvaṃ purakānanānām /
bahiḥ prayāṇāya cakāra buddhim
    antargṛhe nāga ivāvaruddhaḥ // 70 = Bc 3.2
tato nṛpas tasya niśamya bhāvaṃ
    putrasya diṣṭyātimanoharasya /
snehasya lakṣmyā vayasaś ca yogyām
  ājñāpayām āsa vihārayātrām // 71 = Bc 3.3
nivartayām āsa ca rājamārge
    saṃpātam ārtasya pṛthagjanasya /

---

15. この第17章では第69詩節以下に馬鳴の Buddhacarita 第3章と第4章から借用した詩節が連続的に出てくる。詩節の横に記した、= Bc というイコールの記号は Bc の借用を示す。その借用文の中で語句表現が Johnston 版の Buddhacarita と少し違っている箇所は目立つように太字にした。また、≈ Bc のように二重波線（ニアリーイコール）の記号を使って出典を記している箇所は、Bc の逐字的な借用ではなく、翻案・模倣による類似であることを示す。その ≈ の記号を用いた Buddhacarita 出典の記述は太字にして、 = の記号の箇所と見分けやすくした。

mā bhūt kumāraḥ sukumāracittaḥ

saṃvignacetā *iva manyamānaḥ // 72 = Bc 3.4

pratyaṅgahīnān vikalendriyāṃś ca

jīrṇāturādīn kṛpaṇāṃś ca **bhikṣūn** /

tataḥ samutsārya pareṇa sāmnā

śobhāṃ parāṃ rājapathasya cakruḥ // 73 = Bc 3.5

tataḥ kṛte śrīmati rājamārge

śrīmān vinītānucaraḥ **sa dhīraḥ** /

prāsādapṛṣṭhād avatīrya kāle

kṛtābhyanujño nṛpam abhyagacchat // 74 = Bc 3.6

dṛṣṭvā pitā taṃ sutam āgataṃ

tanmano 'pi matvopavanābhilāṣim /

gaccheti cājñāpayāti sma vācā

snehān na cainaṃ manasā mumoca // 75 ≈ **Bc 3.7**

tataḥ sa jāmbūnadabhāṇḍabhṛdbhir

yukaṃ caturbhir nibhṛtais turaṅgaiḥ /

aklībavidvacchuciraśmidhāraṃ

hiraṇmayaṃ syandanam āruroha // 76 = Bc 3.8

tataḥ prakīrṇojjvalapuṣpajālam

viṣaktamālyaṃ pracalatpatākam /

mārgaṃ prapede sadṛśānuyātraś

candraḥ sanakṣatra ivāntarīkṣam // 77 = Bc 3.9

kautūhalāt [110b] sphītataraiś ca netrair

nīlotpalārdhair iva kīryamāṇaḥ /

śanaiḥ śanai rājapathaṃ jagāhe

pauraiḥ samantād abhivīkṣyamāṇaḥ // 78 = Bc 3.10

taṃ tuṣṭuvuḥ saumyaguṇena kecid

vavandire dīptatayā tathānye /

saumukhyatas tu śriyam asya kecid

vipulyam āśaṃsiṣur āyuṣaś ca // 79 = Bc 3.11

niḥsṛtya kubjāś ca mahākulebhyo

vyūhāś ca kairātakavāmanānām /

nāryaḥ kṛśebhyaś ca niveśanebhyo

devānuyānadhvajavat praṇemuḥ // 80 = Bc 3.12

sa rājasūnuḥ khalu gacchatīti

śrutvā striyaḥ preṣyajanāt pravṛttim /
didṛkṣayā harmyatalāni jagmur
janena mānyena kṛtābhyanujñāḥ // 81 = Bc 3.13
tāḥ srastakauñcīguṇavighnatāś ca
suptaprabuddhākulalocanāś ca /
vṛttāntavinyastavibhūṣaṇāś ca
kautūhalenānibhṛtāḥ parīyuḥ // 82 = Bc 3.14
prāsādasopānatalapraṇādaiḥ
kāñcīravair nūpuranisvanaiś ca /
vitrāsayantyo gṛhapakṣisaṃghān
anyo 'nyavegāṃś ca samākṣipantyaḥ // 83 = Bc 3.15
kāsāṃcid āsāṃ tu varāṅganānāṃ
jātatvarāṇām api sotsukānām /
gatiṃ gurutvāj jagṛhur viśālāḥ
śroṇīrathāḥ pīnapayodharāś ca // 84 = Bc 3.16
śrīghraṃ samarthāpi tu gantum anyā
gatiṃ nijagrāha yayau na tūrṇam /
hriyāpragalbhā vinigūhamānā
rahaḥprayuktāni vibhūṣaṇāni // 85 = Bc 3.17
parasparotpīḍanapiṇḍatānāṃ
saṃmardasaṃkṣobhitakuṇḍalānām /
tāsāṃ tadā sasvanabhūṣaṇānāṃ
vātāyaneṣv apraśamo babhūva // 86 = Bc 3.18
vātāyanebhyas tu viniḥsṛtāni
parasparāyāsitakuṇḍalāni /
strīṇāṃ virejur mukhapaṅkajāni
saktāni harmyeṣv iva paṅkajāni // 87 = Bc 3.19
tato vimānair yuvatīkarālaiḥ
kautūhalodghāṭitavātāyānaiḥ /
śrīmat samantān nagaraṃ babhāse
viyad vimānair iva sāpsarobhiḥ // 88 = Bc 3.20
vātāyanānām aviśālabhāvād
anyo 'nyagaṇḍārpitakuṇḍalānām /
mukhāni rejuḥ pramadottamānāṃ
baddhāḥ kalāpā iva paṅkajānām // 89 = Bc 3.21

tebhyo yuvānaṃ pathi vīkṣamāṇāḥ
striyo [111a] babhur gām iva gantukāmāḥ /
ūrdhvonmukhāś cainam udīkṣamāṇā
narā babhur dyām iva gantukāmāḥ // 90 = Bc 3.22
dṛṣṭvā ca taṃ rājasutaṃ striyas tā
jājvalyamānaṃ vapuṣā śriyā ca /
dhanyāsya bhāryeti śanair avocañ
śuddhair manobhiḥ khalu nānyabhāvāt // 91 = Bc 3.23
ayaṃ kila vyāyatapīnabāhū
rūpeṇa sākṣād iva puṣpaketuḥ /
tyaktvā śriyaṃ dharmam upaiṣyatīti
tasmiṃ hi tā gauravam eva cakruḥ // 92 = Bc 3.24
kīrṇaṃ tathā rājapathaṃ **yuvā sa**
paurair vinītaiḥ śucidhīra**cittaiḥ** /
tat pūrvam ālokya jaharṣa kiṃcin
mene punarbhāvam ivātmanaś ca // 93 = Bc 3.25
puraṃ tu tat svargam iva prahṛṣṭaṃ
śudhādhivāsāḥ samavekṣya devāḥ /
jīrṇaṃ naraṃ nirmamire prayātuṃ
saṃcodanārthaṃ kṣitipātmajasya // 94 = Bc 3.26
tataḥ sa dhīro jarayābhibhūtaṃ
dṛṣṭvā narebhyaḥ pṛthagākṛtiṃ tam /
uvāca saṃgrāhakam āgatāsthas
tatraiva niṣkampaniviṣṭadṛṣṭiḥ // 95 = Bc 3.27
ka eṣa bhoḥ sūta naro 'bhyupetaḥ
keśaiḥ sitair yaṣṭi**viśakti**hastaḥ /
bhrūsaṃvṛtākṣaḥ śithilānatāṅgaḥ
kiṃ vikriyaiṣā prakṛtir yadṛcchā // 96 = Bc 3.28
ity evam uktaḥ sa rathapraṇetā
nivedayām āsa nṛpātmajāya /
saṃrakṣyam apy artham adoṣadaśrī
tair eva devaiḥ kṛtabuddhimohaḥ // 97 = Bc 3.29
rūpasya hantrī vyasanaṃ balasya
śokasya yonir nidhanaṃ ratīnām /
nāśaḥ smṛtīnāṃ ripur indriyāṇām

eṣā jarā nāma yayaiṣa bhagnaḥ // 98 = Bc 3.30

pītaṃ hy anenāpi payaḥ śiśutve
kālena bhūyaḥ parisṛṭam urvyām /
krameṇa bhūtvā ca yuvā vapuṣmān
krameṇa tenaiva jarām upetaḥ // 99 = Bc 3.31

ity evam ukte calitaḥ sa kiṃcid
rājātmajaḥ sūtam idaṃ babhāṣe /
kim eṣa doṣo bhavitā mamāpīty
asmai tataḥ sārathir abhyuvācaḥ // 100 = Bc 3.32

āyuṣmato 'py eṣa vayaḥprakarṣo
niḥsaṃśayaṃ kālavaśena bhāvī /
evaṃ jarāṃ rūpavināśayitrīṃ
jānāti caivecchati caiva lokaḥ // 101 = Bc 3.33

tataḥ sa pūrvāśayaśuddhabuddhir
vistīrṇaka[111b]lpācitapuṇyakarmā /
śrūtvā jarāṃ saṃvivije mahātmā
mahāśaner ghoṣam ivāntike gauḥ // 102 = Bc 3.34

niḥśvasya dīrghaṃ **sa śiraḥ** prakampya
tasmiṃś ca jīrṇe viniveśya cakṣuḥ /
tāṃ caiva dṛṣṭvā janatāṃ saharśāṃ
vākyaṃ sa saṃvigna idaṃ jagāda // 103 = Bc 3.35

evaṃ jarā hanti ca nirviśeṣaṃ
smṛtiṃ ca rūpaṃ ca parākramaṃ ca /
na caiva saṃvegam upaiti lokaḥ
pratyakṣato 'pīdṛśām īkṣamāṇaḥ // 104 = Bc 3.36

evaṃ gate sūta nivartayāśvān
śīghraṃ bhavān eva gṛhaṃ prayātu /
udyānabhūmau hi kuto ratir me
jarābhaye cetasi vartamāne // 105 = Bc 3.37

athājñayā bhartṛsutasya tasya
nivartayām āsa rathaṃ niyantā /
tataḥ **sa dhīro** bhavanaṃ tad eva
cintāvaśaḥ śūnyam iva prapede // 106 = Bc 3.38

yadā tu tatrāpi na śarma lebhe
jarā jareti praparīkṣamāṇaḥ /

tato narendrānumataḥ sa bhūyaḥ

krameṇa tanaiva bahir jagāma // 107 = Bc 3.39

tatrāparaṃ vyādhiparītadehaṃ

ta eva devāḥ sasṛjur manuṣyam /

dṛṣṭvā **ca** taṃ sārathim ābabhāṣe

śauddhodanis tadgatadṛṣṭir ***eva** // 108 = Bc 3.40

sthūlodaraḥ śvāsacalaccharīraḥ

srast*āṃsabāhuḥ kṛśapāṇḍugātraḥ /

ambeti vācaṃ karuṇaṃ bruvāṇaḥ

paraṃ **samāsṛtya** naraḥ ka eṣaḥ // 109 = Bc 3.41

tato 'bravīt sārathir asya saumya

dhātuprakopaprabhavaḥ pravṛddhaḥ /

rogābhidhānaḥ sumahān anarthaḥ

śakro'pi yenaiṣa kṛto 'svatantraḥ // 110 = Bc 3.42

ity uktam ākarṇya sa mahīndrasūnuḥ

samīkṣya taṃ rogiṇam ādritākṣaḥ /

bhūyo 'pi taṃ sārathim ādareṇa

paśyan papracchaivam adhīracetāḥ // 111 ≈ **Bc 3.43**ab

asyaiva rogo vapuṣi prajātaḥ

kim cāpi sarvasya bhavāśritasya /

lokasya hy asmākam api śrutaṃ syād

etan mamāgre vada sārathe tvam // 112 ≈ **Bc 3.43**cd

taduktam ākarṇya sa rathapraṇetā

nṛpātmajam evam uvāca paśyan /

sudhīra sādhāraṇa eṣa doṣas

tathā hi sarvatra bhavālaye 'pi // 113 ≈ **Bc 3.44**

iti śrutārthaḥ sa viṣaṇṇacetāḥ

prāvepatābūrmigataḥ śaśīva /

idaṃ ca vākyaṃ karuṇā[112a]yamānaḥ

provāca kiṃcin mṛdunā svareṇa // 114 = Bc 3.45

evaṃ hi rogaiḥ paripīḍyamānaḥ

sarve 'pi harṣaṃ samupaiti lokaḥ /

idaṃ ca rogavyasanaṃ prajānāṃ paśyan

kim evaṃ pracareyaṃ rantum /

sarve 'pi lokā abhimugdhacittā hasanti

ye rogabhayair amuktāḥ // 115 ≈ **Bc 3.46**

nivartyatāṃ sūta bahiḥprayāṇān

narendrasadmaiva rathaḥ prayātu /

śrutvā ca me rogabhayaṃ ratibhyaḥ

pratyāhataṃ saṃkucatīva cetaḥ // 116 = Bc 3.47

ity uktam ākarṇya rathapraṇetā

tatheti vijñapya viṣaṇṇacetāḥ /

nivartayaṃs tena yathā rathaṃ

sa praveśayām āsa gṛhāntike tam // 117

tataś caran sa nṛparājasūnuḥ

pradhyānayuktaḥ praviveśa veśma /

taṃ dvis tathā prekṣya ca saṃnivṛttaṃ

pury āgamaṃ bhūmipatiś cakāra // 118 = Bc 3.48

śrutvā nimittaṃ tu nivartanasya

saṃtyaktam ātmānam anena mene /

mārgasya śaucādhikṛtāya caiva

cukrośa ruṣṭo'pi ca nogradaṇḍaḥ // 119 = Bc 3.49

bhūyo 'pi tasmai vidadhe sutāya

viśeṣayukaṃ viṣaya**prakāram** /

calendrayatvād api nāma sakto

nāsmān vijahyād iti nāthamānaḥ // 120 = Bc 3.50

yadā ca śabdādibhir indriyārthair

antaḥpure naiva suto 'sya reme /

tato bahir vyādiśati sma yātrāṃ

rasāntaraṃ syād iti manyamānaḥ // 121 = Bc 3.51

snehāc ca bhāvaṃ tanayasya buddhvā

saṃvegadoṣān avicintya kāṃścit /

yogyāḥ samājñāpayati sma tatra

kalāsv abhijñā api vāramukhyāḥ // 122 = Bc 3.52

tato viśeṣeṇa narendramārge

svalaṃkṛte caiva **parīkṣyate** ca /

vyatyasya sūtaṃ ca rathaṃ ca rājā

prasthāpayām āsa bahir **yuvānam** // 123 = Bc 3.53

tatas tathā gacchati rājaputre

tair eva devai vihito gatāsuḥ /

taṃ caiva mārge mṛtam uhyamānaṃ
sūtaḥ **sa dhīraś** ca dadarśa nānyaḥ // 124 = Bc 3.54
athābravīd rājasutaḥ sa sūtaṃ
naraiś caturbhir hriyate ka eṣaḥ /
dīnair manuṣyair anugamyamāno
yo bhūṣitaś cāpy avarudyate ca // 125 = Bc 3.55
tataḥ sa śuddhātmabhir eva devaiḥ
śuddhādhivāsair abhibhūtacetāḥ /
avācyam apy artham imaṃ niyantā
pravyā[112b]jahārārthavad īśvarāya // 126 = Bc 3.56
buddhīndriyaprāṇaguṇair viyuktaḥ
supto visaṃjñas tṛṇakāṣṭhabhūtaḥ /
saṃvardhya saṃrakṣya ca yatnavadbhir
janaiḥ priyas tyajyata eṣa ko 'pi // 127 = Bc 3.57
iti praṇetuḥ sa niśamya vākyaṃ
saṃcukṣubhe kiṃcid uvāca cainam /
kiṃ kevalo 'syaiva janasya dharmaḥ
sarvaprajānām ayam īdṛśo 'ntaḥ // 128 = Bc 3.58
tataḥ praṇetā vadati sma tasmai
sarvaprajānām idam antakarma /
hīnasya madhyasya mahātmano vā
sarvatra loke niyato vināśaḥ // 129 = Bc 3.59
tataḥ sa dhīro 'pi narendrasūnuḥ
śrutaiva mṛtyum viṣasāda sadyaḥ /
aṃsena saṃśliṣya ca kūbarāgraṃ
provāca nihrādavatā svareṇa // 130 = Bc 3.60
iyaṃ **hi** niṣṭhā niyatā prajānāṃ
pramodyati tyaktabhayo **'pi** lokaḥ /
manāṃsi śaṅke kaṭhināni nṛṇāṃ
svasthās tathā hy adhvani vartamānāḥ // 131 = Bc 3.61
tasmād **rathaṃ** sūta nivartyatāṃ no
vihārabhūmir na hi deśakālaḥ /
jānaṃ vināśaṃ katham ārtikāle
sacetanaḥ syād iha hi pramattaḥ // 132 = Bc 3.62
iti bruvāṇe'pi narādhipātmaje

nivartayām āsa sa naiva taṃ ratham /
viśeṣayuktaṃ tu narendraśāsanāt
sa padmaṣaṇḍaṃ vanam eva niryayau // 133 = Bc 3.63
tataḥ śivaṃ kusumitabālapādapaṃ
paribhramatpramuditamattakokilam /
vimānavat sa kamalacārudīrghikaṃ
dadarśa tad vanam iva nandanaṃ vanam // 134 = Bc 3.64
varāṅganāgaṇakalilaṃ nṛpātmajas
tato balād vanam atinīyate sma tat /
varāpsarovṛtam alakādhipālayaṃ
navavrato munir iva vighnakātaraḥ // 135 = Bc 3.65
tatrāsau bodhisattvaḥ pracalitanayano vīkṣya vṛkṣān sapuṣpān
te vai śītakāle vidalakusumitāḥ śuṣkatāṃ cāpi yāyuḥ /
evaṃ sarve 'py antakāle vigataratirasāḥ śuṣyatām eva yāyuḥ
ity evaṃ mṛtyucintāvigataratimano dhyānalīno ca tasthe // 136
tatas tasmin mahodyāne pramadā ratilālasāḥ /
taṃ yuvānaṃ varaṃ prāptum ivābhimukham ācaran // 137 ≈ **Bc 4.1**
[113a] abhigamya **tam ālokya** vismayotphullalocanāḥ /
cakrire samudācāraṃ padmakośanibhaiḥ karaiḥ // 138 = Bc 4.2
tasthuś ca parivāryainaṃ manmathākṣipta**mānasāḥ /**
niścalaiḥ prīti**saṃphullaiḥ** pibantya iva locanaiḥ // 139 = Bc 4.3
taṃ hi tā menire nāryaḥ kāmo vigrahavān iti /
śobhitaṃ lakṣaṇair dīptaiḥ sahajair bhūṣaṇair iva // 140 = Bc 4.4
saumyatvāc **cāpi** dhairyāc ca kāścid enaṃ prajajñire /
avatīrṇo mahīṃ sākṣād gūḍhāṃśuś candramā iva // 141 = Bc 4.5
tās tasya vapuṣākṣiptā nigṛhītaṃ jajṛmbhire /
anyo'nyaṃ dṛṣṭibhir **gatvā** śanaiś ca viniśaśvasuḥ // 142 = Bc 4.6
evaṃ tā dṛṣṭimātreṇa nāryo dadṛśur eva tam /
na vyājahrur na jahasuḥ prabhāveṇāsya yantritāḥ // 143 = Bc 4.7
tās tathā **hi** nirārambhā dṛṣṭvā praṇayaviklavāḥ /
purohitasuto dhīmān udāyī vākyam abravīt // 144 = Bc 4.8
sarvāḥ sarvakalājñāḥ stha bhāvagrahaṇapaṇḍitāḥ /
rūpacāturyasaṃpannāḥ svaguṇair mukhyatāṃ gatāḥ // 145 = Bc 4.9
śobhayeta guṇair ebhir api tān uttarān kurūn /
kuberasyāpi **ca krīḍaṃ** prāg eva vasudhām imām // 146 = Bc 4.10

śaktāś cālayituṃ yūyaṃ vītarāgān ṛṣīn api /
apsarobhiś ca kalitān gṛhītuṃ vibudhān api // 147 = Bc 4.11
bhāvajñānena hāvena **cāturyārūpa**saṃpadā /
strīṇām eva ca śaktāḥ stha saṃrāge kiṃ punar nṛṇām // 148 = Bc 4.12
tāsām evaṃvidhānāṃ vo viyuktānāṃ svagocare /
iyam evaṃvidhā ceṣṭā na tuṣṭo 'smy ārjavena vaḥ // 149 = Bc 4.13
idaṃ navavadhūnāṃ vo hrīnikuñcitacakṣuṣām /
sadṛśaṃ ceṣṭitaṃ hi syād api vā gopayoṣitām // 150 = Bc 4.14
yady api syād ayaṃ dhīraḥ srīprabhāvān mahān iti /
strīṇām api mahat teja **iti** kāryo 'tra niścayaḥ // 151 = Bc 4.15
purā hi kāśisundaryā veśavadhvā mahān ṛṣiḥ /
tāḍito 'bhūt **padābhyāṃ** so durdharṣo devatair api // 152 = Bc 4.16
manthālagautamo bhikṣur jaṅghayā vāramukhyayā /
piprīṣuś ca tad arthārthaṃ vyasūn niraharat purā // 153 = Bc 4.17
gautamaṃ dīrghatapasaṃ maharṣiṃ dīrghajīvinam /
yoṣit saṃtoṣayām āsavarṇasthānā[113b]varā satī // 154 = Bc 4.18
ṛṣyaśṛṅgaṃ **muneḥ putraṃ** tathaiva strīṣv apaṇḍitam /
upāyair vividhaiḥ śāntā jagrāh**ābhijahāra** ca // 155 = Bc 4.19
viśvāmitro maharṣiś ca vigāḍho 'pi **mahattapāḥ** /
daśa varṣāṇy **araṇyastho** ghṛtācyāpsarasā hṛtaḥ // 156 = Bc 4.20
evamādīn ṛṣīṃs tāṃs tān anayan vikriyāṃ striyaḥ /
lalitaṃ pūrvavayasaṃ kiṃ punar nṛpateḥ sutam // 157 = Bc 4.21
tad evaṃ sati viśrabdhaṃ prayatadhvaṃ tathā yathā /
iyaṃ nṛpasya vaṃśaśrīr ito na syāt parāṅmukhī // 158 = Bc 4.22
yā hi kāścid yuvatayo haranti sadṛśaṃ janam /
nikṛṣṭotkṛṣṭayor bhāvaṃ yā gṛhṇanti **tu tāḥ** striyaḥ // 159 = Bc 4.23
ity udāyivacaḥ śrutvā tā viddhā iva yoṣitaḥ /
samāruruhur ātmānaṃ kumāragrahaṇaṃ prati // 160 = Bc 4.24
tā bhrūbhiḥ prekṣitair *hāvair hasitair laḍitair gataiḥ /
cakrur ākṣepikāś ceṣṭā bhītabhītā ivāṅganāḥ // 161 = Bc 4.25
rājñas **tā** viniyogena **yūnas tasya hi** mārdavāt /
jahruḥ kṣipram aviśrambhaṃ madena madenena ca // 162 = Bc 4.26
atha nārījanavṛtaḥ **sa yuvā** vyacarad vanam /
vāsitāyūthasahitaḥ karīva himavadvanam // 163 = Bc 4.27
sa tasmin kānane ramye jajvāla strīpuraḥsaraḥ /

ākrīḍa iva vibhrāje vivasvān apsarovṛtaḥ // 164 = Bc 4.28

madenāvarjitā nāma taṃ kāścit tatra yoṣitaḥ /

kaṭhinaiḥ paspṛśuḥ pīnaiḥ *saṃhatair valgubhiḥ stanaiḥ // 165 = Bc 4.29

srastāṃsakomalālambamṛdubāhulatābalā /

anṛtaṃ skhalitaṃ kācit kṛtvainaṃ sasvaje balāt // 166 = Bc 4.30

kācit tāmrādharoṣṭena mukhenāsavagandhinā /

viniśaśvāsa karṇe 'sya rahasyaṃ śruyatām iti // 167 = Bc 4.31

kācid ājñāpayantīva provācārdrānulepanā /

iha bhaktiṃ kuruṣveti **hastaṃ saṃśliṣya** lipsayā // 168 = Bc 4.32

muhur muhur madavyāja srastanīlāṃśukāparā /

ālakṣyaraśanā reje sphuradvidyud iva kṣapā // 169 = Bc 4.33

kāścit kanakakāñcībhir mukharābhir itas tataḥ /

babhramur darśayantyo 'sya śroṇīs tanvaṃśukāvṛtāḥ // 170 = Bc 4.34

cūtaśakhāṃ kusumitāṃ pragṛhyānyā lalambire /

suvarṇakalaśaprakhyān darśayantyaḥ payodharān // 171 = Bc 4.35

kā[114a]**ścit kanakakāñcībhir mukharābhir itas tataḥ /**

babhramur darśayantyo 'sya śroṇīs tanvaṃśukāvṛtāḥ // 172 **= Bc 4.34(!)**

madhuraṃ gītam anvarthaṃ kācit sābhinayaṃ jagau /

taṃ svasthaṃ codayantīva vañcito 'sīty avekṣitaiḥ // 173 = Bc 4.37

śubhena vadanenānyā bhrūkārmukavikarṣiṇā /

prāvṛtyānucakārāsya ceṣṭitaṃ dhīralīlayā // 174 = Bc 4.38

pīnavalgustanī kācid vātāghūrṇitakuṇḍalā /

uccair avajahāsainaṃ samāpnotu bhavān iti // 175 = Bc 4.39

apayāntaṃ tathaivānyā babandhuḥ **puṣpa**dāmabhiḥ /

kāścit sākṣepamadhurair jagṛhur vacanāṅkuśaiḥ // 176 = Bc 4.40

pratiyogārthinī kācid gṛhītvā cūtavallarīm /

idaṃ puṣpaṃ tu kasyeti papraccha madaviklavā // 177 = Bc 4.41

kācit puruṣavat kṛtvā gatiṃ saṃsthānam eva ca /

uvācainaṃ jitaḥ strībhir jaya bhoḥ pṛthivīm imām // 178 = Bc 4.42

atha lolekṣaṇā kācij jighrantī nīlam utpalam /

kiṃcin madakalair vākyair nṛpātmajam abhāṣata // 179 = Bc 4.43

paśya bhartaś citaṃ cūtaṃ kusumair madhugandhibhiḥ /

hemapañjararuddho vā kokilo yatra kūjati // 180 = Bc 4.44

aśoko dṛṣyatām eṣa kāmiśokavivarddhanaḥ /

ruvanti bhramarā yatra dahyamānā ivāgninā // 181 = Bc 4.45

cūtayaṣṭyā samāśliṣṭo dṛśyatāṃ tilakadrumaḥ /
śuklavāsā **yathā kāntaḥ** striyā pītāṅgarāgayā // 182 = Bc 4.46
phullaṃ kurubakaṃ paśya nirbhuktālaktaka prabham /
yo nakhaprabhayā strīṇāṃ nirbhartsita ivānataḥ // 183 = Bc 4.47
bālāśokaś ca nicito dṛśyatām eṣa pallavaiḥ /
yo 'smākaṃ hastaśobhābhir lajjamāna iva sthitaḥ // 184 = Bc 4.48
dīrghikāṃ prāvṛatāṃ paśya tīrajaiḥ sinduvāra**jaiḥ** /
pāṇḍurāṃśukasaṃvītāṃ śayānāṃ pramadām iva // 185 = Bc 4.49
dṛśyatāṃ strīṣu māhātmyaṃ cakravāko hy asau jale /
pṛṣṭhataḥ preṣyavad bhāryām **anuvṛtyā**nugacchati // 186 = Bc 4.50
mattasya parapuṣṭasya ruvataḥ śrūyatāṃ dhvaniḥ /
aparaḥ kokilo **'nutkaḥ** pratiśrutkteva **kūjitaḥ** // 187 = Bc 4.51
api nāma vihaṅgānāṃ vasantenāhṛto madaḥ /
na tu **cintayataś cittaṃ** janasya prajñamāninaḥ // 188 = Bc 4.52
ity evaṃ **pramadā nāryas taṃ kāmoddāma**ceta[114b]saḥ /
yuvānaṃ vividhais tais tair upacakramire nayaiḥ // 189 = Bc 4.53
evam ākṣipyamāṇo 'pi sa **sudhairyā**vṛtendriyaḥ /
martavyam iti sodvego na jaharṣa na **sismiye** // 190 = Bc 4.54
tāsāṃ tattve 'navasthānaṃ dṛṣṭvā sa pūruṣottamaḥ /
sa **saṃvignena** dhīreṇa cintayām āsa cetasā // 191 = Bc 4.55
kiṃ **vinā** nāvagacchanti capalaṃ yauvanaṃ striyaḥ /
yato rūpeṇa **saṃpannaṃ** jareyaṃ nāśayiṣyati // 192 = Bc 4.56
nūnam etā na paśyanti kasyacid rogasaṃplavam /
tathā hṛṣṭā bhayaṃ tyaktvā jagati vyādhidharmiṇi // 193 = Bc 4.57
anabhijñāś ca suvyaktaṃ mṛtyoḥ sarvāpahāriṇaḥ /
tathā svasthā nirudvignāḥ krīḍanti **prahasanti** ca // 194 = Bc 4.58
jarāṃ vyādhiṃ ca mṛtyuṃ ca ko hi jānan sacetanaḥ /
svasthas tiṣṭhen niṣīded vā **suped** vā kim punar haset // 195 = Bc 4.59
yas tu dṛṣṭvā paraṃ jīrṇaṃ vyādhitaṃ **mṛtakaṃ ca vai** /
svastho bhavati nodvigno yathācetās tathaiva saḥ // 196 = Bc 4.60
viyujyamāne **'pi** tarau puṣpair api phalair api /
patati chidyamāne vā tarur anyo na śocate // 197 = Bc 4.61
iti dhyānaparaṃ dṛṣṭvā **viṣayeṣv api niḥspṛham** /
udāyī nītiśāstrajñas tam uvāca suhṛttayā // 198 = Bc 4.62
ahaṃ nṛpatinā dattaḥ sakhā tubhyaṃ kṣamaḥ kṣamaḥ kila /

yasmāt tvayi vivakṣā me tayā praṇayavattayā // 199 = Bc 4.63

ahitāt pratiṣedh**o 'pi** hite **tv a**nupravartanam /

vyasane cāparityāgas trividhaṃ mitralakṣaṇam // 200 = Bc 4.64

so 'haṃ maitrīṃ pratijñāya puruṣārthāt parāṅmukhaḥ /

yadi tvāṃ samupekṣeya na bhaven mitratā mayi // 201 = Bc 4.65

tad bravīmi suhṛd bhūtvā taruṇasya vapuṣmataḥ /

idaṃ na pratirūpaṃ te strīṣv adākṣiṇyam īdṛśām // 202 = Bc 4.66

anṛtenāpi nārīṇāṃ yuktaṃ samanuvartanam

tad vrīḍāparihārārtham ātmaratyartham eva ca // 203 = Bc 4.67

saṃnatiś cānuvṛttiś ca strīṇāṃ hṛdayabandhanam /

snehasya hi guṇā yonir mānakāmā **hi** yoṣitaḥ // 204 = Bc 4.68

tad arhasi viśālākṣa hṛdaye 'pi parāṅmukhe /

rūpasyāsyānurūpeṇa dākṣiṇyenānuvartitum // 205 = Bc 4.69

dākṣiṇyam auṣadhaṃ strīṇāṃ dākṣiṇyāṃ bhūṣaṇaṃ param /

dākṣiṇyarahitaṃ rūpaṃ niṣpuṣpam i[115a]va kānanam // 206 = Bc 4.70

kiṃ vā dākṣiṇyamātreṇa bhāvanāstu parigrahaḥ /

viṣayān durlabhāṃl labdhvā na hy avajñātum arhasi // 207 = Bc 4.71

kāmaṃ **paramitaṃ** jñātvā devo 'pi hi purandaraḥ /

gautamasya muneḥ patnīm ahalyāṃ cakame purā // 208 = Bc 4.72

agastyaḥ prārthayām āsa somabhāryāṃ ca rohiṇīm /

tasmāt tatsadṛśīṃ lebhe lopāmudrām iti śrutiḥ // 209 = Bc 4.73

autasthyasya ca bhāryāyāṃ mamatāyāṃ mahātapāḥ /

mārutyāṃ janayām āsa bharadvājaṃ bṛhaspatiḥ // 210 = Bc 4.74

bṛhaspater mahiṣyāṃ ca juhvatyāṃ juhvatāṃ varaḥ /

buddhaṃ vibudha**dharmāṇaṃ** janayām āsa candramāḥ // 211 = Bc 4.75

kālīṃ **cāpi** purā kanyāṃ jalaprabhavasaṃbhavām /

jagāma yamunātīre jātarāgaḥ parāśaraḥ // 212 = Bc 4.76

mātaṅgyām akṣamālāyāṃ garhitāyāṃ riraṃsayā /

kapiñjalādaṃ tanayaṃ vasiṣṭho 'janayan muniḥ // 213 = Bc 4.77

yayātiś caiva rājarṣir vayasy api vinirgate /

viśvācyāpsarasā sārdhaṃ reme caitrarathe vane // 214 = Bc 4.78

strīsaṃsargaṃ vināśāntaṃ pāṇḍur jñātvāpi kauravaḥ /

mādrīrūpaguṇākṣiptaḥ siṣeve kāmajaṃ sukham // 215 = Bc 4.79

karālajanakaś caivaṃ hṛtvā brāhmaṇakanyakām /

avāpa bhraṃśam apy evaṃ na tu **bheje** na manmatham // 216 = Bc 4.80

evamādimahātmāno viṣayān garhitān api /
ratihetor bubhujire prāg eva guṇasaṃhitān // 217 = Bc 4.81
tvaṃ punar nyāyataḥ prāptān balavān rūpavān yuvā
viśayān avajānāsi yatra saktam idaṃ jagat // 218 = Bc 4.82
iti śrutvā vacas tasya ślakṣṇam āgamasaṃhitam /
meghastanitanirghoṣaḥ **sa dhīraḥ** pratyabhāṣata // 219 = Bc 4.83
upapannam idaṃ vākyaṃ sauhārdavyañjakaṃ tvayi /
atra **tvām anuneṣyāmi** yatra mā duṣṭhtu manyase // 220 = Bc 4.84
nāvajānāmi viṣayāñ jāne lokaṃ tadātmakam /
anityaṃ **hi** jagan matvā nātra me ramate manaḥ // 221 = Bc 4.85
jarā vyādhiś ca mṛtyuś ca yadi na syād idaṃ trayam /
mamāpi hi manojñeṣu viṣayeṣu ratir bhavet // 222 = Bc 4.86
nityaṃ yady api hi strīṇām etad eva vapur bhavet /
sasaṃvitkasya kāmeṣu **tathāpi na ratiḥ kṣamā** // 223 ≈ **Bc 4.87**
yadā tu jarayāpītaṃ rūpam āsāṃ **bha**[115b]**ved api** /
ātmano 'py anabhipretaṃ mohāt tatra rati**ś caret** // 224 = Bc 4.88
mṛtyuvyādhijarādharmā mṛtyuvyādhijarātmabhiḥ /
ramamāṇo **'py** asaṃvignaḥ samāno mṛgapakṣibhiḥ // 225 = Bc 4.89
yad apy āttha mahatmānas te 'pi kāmātmakā iti /
saṃvego 'tra na kartavyo yadā teṣāṃ **na hi** kṣayaḥ // 226 = Bc 4.90
māhātmyaṃ na ca **tanmadhye** yatra sāmānyataḥ kṣayaḥ /
viṣayeṣu prasaktir vā yuktir vā nātmavattayā // 227 = Bc 4.91
yad apy ātthānṛtenāpi strījane vartyatām iti /
anṛtaṃ nāvagacchāmi dākṣiṇyenāpi kiṃ cana // 228 = Bc 4.92
na cānuvartanaṃ tan me rucitaṃ yatra nārjavam /
sarvabhāvena saṃparko yadi nāsti dhig astu tat // 229 = Bc 4.93
anṛte śraddadhānasya śaktasyādoṣadarśinaḥ /
kiṃ **ca** vañcayitavyaṃ syāj jātarāgasya cetasah // 230 = Bc 4.94
vañcayanti ca yady eva jātarāgāḥ parasparam /
nanu naiva kṣamaṃ draṣṭuṃ narāḥ strīṇāṃ nṛṇāṃ striyaḥ // 231 = Bc 4.95
tad evaṃ sati duḥkhārtaṃ jarāmaraṇa**bhāvinam** /
na māṃ kāmeṣv anāryeṣu pratārayitum arhasi // 232 = Bc 4.96
aho 'tidhīraṃ balavac ca te manaś
caleṣu kāmeṣv **api** sāradarśinaḥ /
bhaye 'pi tīvre viṣayeṣu sajjase

nirīkṣamāṇo maraṇādhvani prajāḥ // 233 = Bc 4.97

ahaṃ punar bhīrur atīva viklavo

jarāvipadvyādhibhayaṃ vicintayan /

lebhe na śāntiṃ na dhṛtiṃ kuto ratiṃ

niśāmayan dīptam ivāgninā jagat // 234 = Bc 4.98

asaṃśayaṃ mṛtyur iti prajānato

narasya rāgo hṛdi yasya jāyate /

ayomayīṃ tasya paraimi cetanāṃ

mahābhaye rajyati yo na **rodati** // 235 = Bc 4.99

atho **sa dhīraś** ca viniścayātmikāṃ

cakāra kāmāśrayaghātinīṃ kathām /

janasya cakṣurgamanīyamaṇḍalo

mahīdharaṃ cāstam iyāya bhāskaraḥ // 236 = Bc 4.100

tato vṛthādhāritabhūṣaṇasrajaḥ

kalāguṇaiś ca praṇayaiś ca niṣphalaiḥ /

sa eva bhāve vinigṛhya manmathaṃ

puraṃ yayur bhagnamanorathāḥ striyaḥ // 237 = Bc 4.101

tataḥ purodyānagatāṃ janaśriyaṃ

nirīkṣya **cānye** pratisaṃhṛtāṃ punaḥ /

anityatāṃ sarvagatāṃ vicintayan

viveśa dhiṣṇyaṃ kṣitipāla[116a]kātmajaḥ // 238 = Bc 4.102

tataḥ śrutvā rājā vimukhaṃ tasya **hi** mano

na śiśye tāṃ rātriṃ hṛdayagataśalyo gaja iva /

atha śrānto mantre bahuvividhamārge sasacivo

na so 'nyat kāmebhyo niyamanam apaśyat sutamateḥ // 239 = Bc 4.103

evaṃ sarvārthasiddhaḥ sa viṣayavirato jīrṇarogāntacintaḥ

sambodhijñānakāmo vicalitahṛdayo bodhicaryānurāgī /

sarvān buddhān munīndrān sakalaguṇanidhīn eva saṃdraṣṭukāmāḥ

smṛtvā dhyātvā samādhipraṇihitasumanāḥ svālayāntaḥsthito 'bhūt // 240

// iti jīrṇarogigatāsudarśanaratirāgavighātano nāma saptādaśo 'dhyāyaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 17[16]

1a mahābhijña] D: mahābhijñaḥ A: mahābhijño B.

1b upagupto] A(post corr. int. lin.) B D: śākyasiṃho A(ante corr.).

1c tam aśokaṃ nṛpaṃ] A(post corr.): tam ānandaṃ yatiṃ A(ante corr.): tatāśokaṃ nṛpaṃ B: tatośokaṃ nṛpaṃ D.

5a bhoḥ kāñcu°] corr.: bho kāñcu° A B D.

23c °ratnasupra°] A(post corr. int. lin.) B D: °ratnapra° A(ante corr.).

48c *divyāmṛtaṃ] ex coni (cf. 50c): divyāmṛte A: divyāmṛta B: divyāṃmṛta D.

49a cāpi] A(post corr. marg.) B: ca A(ante corr.).

55d °vrataṃ cara //] A(post corr. marg.) B D: °vrataṃ // A(ante corr.).

62a °*patākābhiḥ] ex coni: °patākādi A B.

65a praṇāditvā] corr.: pranāditvā A: pravāditvā B.

69a sa dhīro] A B. (Cf. Bc 3.1: kadācin)

69b puṃsko°] D (= Bc): pusko° A: pusko° B.

71b putrasya diṣṭyātimanoharasya] A D: putrasya didhyātimanoharasya B. (Cf. Bc 3.3 putrābhidhānasya manorathasya)

72d °cetā *iva] ex coni: °cetā[pya]va A: °cetāpya ca B. (Cf. Bc 3.4 cetā iti)

73b bhikṣūn] A: bhikṣunu B. (Cf. Bc 3.5 dikṣu)

74b sa dhīraḥ] sic A B. (Cf. Bc 3.6 kumāraḥ)

75ab dṛṣṭvā pitā taṃ sutam āgataṃ tanmano 'pi matvopavanābhilāṣiṃ] A: dṛṣṭvā pitā ta sutam āgataṃ tan mano 'pi matvā pavanābhilāṣiṃ B. (Cf. Bc 3.7 atho narendraḥ sutam āgatāśruḥ śirasy upāghrāya ciraṃ nirīkṣya)

75 note] a stanza ("mārgasya śocādhikṛtāṃ janaṃś ca uvāca rājā apakaravanīyāḥ / jarābhibhūtā vikalendriyāś ca rogābhibhūtā iti apakarṣaṇīyāḥ //") is written in the margin of A (seconda manu!). In B D the same stanza is written after of the 75th stanza in the body text.

76a °bhāṇḍabhṛdbhir] A(post corr. marg.) B: °bhābhṛdbhir A(ante corr.).

77b viṣakta°] corr.: visakta° A: visakta° D: visaka° B. (Cf. Bc 3.9 viṣakta°)

78b kīryamāṇaḥ] sic A B. (Cf. Bc 3.10 kīryamāṇam).

79d vipulyam] sic A B. (Cf. Bc 3.11 vaipulyam)

81a sa rājasūnuḥ] A: su rājasunuḥ B. (Cf. Bc 3.13 tataḥ kumāraḥ)

---

16. 第17～19章のテクスト校訂においては主に A 写本と B 写本の異読を示したが、B 写本は A 写本から派生した粗悪な伝承本であるので、A 写本を底本とする。また B 写本以外に、必要に応じて D 写本（系統的に B と同じであり粗悪な伝本）も参照した。

87b °sitakuṇḍalāni] A(post corr. marg.) B: °sikuṇḍalāni A(ante corr.). (Cf. Bc 3.19 °sitakuṇḍalāni)

88b °ghāṭitavātā°] A(post corr. marg.) B: °ghāṭivātā° A(ante corr.). (Cf. Bc 3.20 °ghāṭitavātā°)

90a tebhyo yuvānaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.22 taṃ tāḥ kumāraṃ)

92c upaiṣyatīti] corr.: upeṣyatīti A: upepyatīti B. (Cf. Bc 3.24 upaiṣyatīti)

93a yuvā sa] sic A B. (Cf. Bc 3.25 kumāraḥ)

93b °cittaiḥ] sic A B. (Cf. Bc 3.25 °veṣaiḥ)

94c prayātuṃ] corr.: prayātaṃ A B. (Cf. Bc 3.26 prayātuṃ)

95a tataḥ sa dhīro] sic A B. (Cf. Bc 3.27 tataḥ kumāro)

96b °viśakti°] sic A B. (Cf. Bc 3.28 °viṣakta°).

96 note] Between 96ab and 96cd A(seconda manu!) the following stanza is added in the margin —— śiraḥpravayo dhamanīvivṛddhaḥ pratraṣṭadantaś ca kṛṣāṃgayaṣṭiḥ / padaskhalan b(?)ālavivṛddhavaktraḥ kṛṣṇa(?)kuśaḥ snāyutvacābhinaddhaḥ //. B have the same stanza in body text.

101a eṣavayaḥ] A(post corr. marg.) B: evavayaḥ A(ante corr.).

101b kālavaśena bhāvī] A(post corr. marg.): kālavaśe bhāvī A(ante corr.): kālavaśena sāvī B.

103a niḥśvasya] corr.: niśvasya A B || sa śiraḥ] sic A B. (Cf. Bc 3.35 svaśiraḥ)

103d sa saṃvigna idaṃ] corr.: sa saṃvignam idam A B. (Cf. Bc 3.35 sa saṃvigna idaṃ).

105b bhavān eva gṛhaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.37 gṛhāṇy eva bhavān).

106c sa dhīro] sic A B. (Cf. Bc 3.38 kumāro)

107a tatrāpi] sic A B. (Cf. Bc 3.39 tatraiva)

108a tatrāparaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.40 athāparaṃ)

108c dṛṣṭvā sa] sic A B. (Cf. Bc 3.40 dṛṣṭvā ca).

108d *eva] ex coni (cf. Bc): evaṃ A B. (Cf. Bc 3.40 eva).

109b srast*āṃsabāhuḥ] ex coni (cf. Bc.): śrastāṃśubāhuḥ A B. (Cf. Bc 3.41 srastāṃsabāhuḥ).

109d samāsṛtya] sic A B. (Cf. Bc 3.41 samāśritya).

110d śakro'pi yenaiṣa kṛto 'svatantraḥ] A(post corr. marg.) B: om. A(ante corr.).

112d mamāgre vada] A(post corr. marg.): mamā vada A(ante corr.): maṃmāṃśe B.

114c idaṃ ca vākyaṃ] A(post corr. marg.) B: idaṃ vākyaṃ A(ante corr.). (Cf. Bc 3.45 idaṃ ca vākyaṃ) || °mānaḥ] corr.: °māṇaḥ A B. (Cf. Bc 3.45°mānaḥ)

115a evaṃ hi rogaiḥ] A(post corr. marg.) B: evaṃ rogaiḥ A(ante corr.) || °mānaḥ] corr.: °māṇaḥ A B.

115b rogavyasanaṃ] A: rogaṃ vyasanaṃ B.

117a ākarṇya] A: ākarṇā B.

117b viṣaṇṇacetāḥ] A: viṣaṇacetāḥ B. (Cf. Bc 3.45 viṣaṇṇacetāḥ).

117c nivartayaṃs] ≒ nivarttayaṃs A: nivarttayaṃ B.

118a tataś caran] corr.: tataś caraṃ A B. (Cf. Bc 3.47 tato nivṛttaḥ) || nṛparājasūnuḥ] A: nṛparā-jasunuḥ B. (Cf. Bc 3.47 sa nivṛttaharṣaḥ)

118d pury āgamaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.48 paryeṣaṇaṃ)

119b saṃtyaktam ātmānam anena mene] A(post corr. marg.) (= Bc 3.49b): om. A(ante corr.): saṃtyaktam ātmānam anena senara B.

120a bhūyo 'pi] sic A B. (Cf. Bc 3.50 bhūyaś ca).

120b °prakāraṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.50 °pracāram)

122b saṃvega°] corr.: saṃvega° A B. (Cf. Bc 3.52 sa rāga°).

123b parīkṣyate] sic A B. (Cf. Bc 3.53 parīkṣite)

123d yuvānaṃ] A: yurvānaṃ B. (Cf. Bc 3.53 kumāram).

124d sa dhīraś] A: sudhīraś B. (Cf. Bc 3.54 kumāraś).

125d yo bhūṣitaś] B: yo bhūṣitaḥś A. (Cf. Bc 3.55 ..bhūṣitaś)

127b tṛṇakāṣṭhabhūtaḥ] A(post corr. marg.) B: tṛṇakābhūtaḥ A(ante corr.). (Cf. Bc 3.57 tṛṇakāṣṭhabhūtaḥ)

127c °vadbhir] A: °vahiḥ B. (Cf. Bc 3.57 °vadbhiḥ)

127d janaiḥ priyas] sic A B. (Cf. Bc 3.57 priyapriyais)

129d sarvatra] sic A B. (Cf. Bc 3.59 sarvasya).

131a hi] A: om. B. (Cf. Bc 3.61 ca)

131b pramodyati] A: om. B. (Cf. Bc 3.61 pramādyati) || °bhayo 'pi] A: om. B. (Cf. Bc 3.61 °bhayaś ca)

132a rathaṃ] sic A B. (Cf. Bc 3.62 rathaḥ)

132b vihārabhūmir] A: vijñānabhūmi B. (Cf. Bc 3.62 vihārabhūmer)

133c °śāsanāt] corr.: °śāsanān A B. (Cf. Bc 3.63 °śāsanāt).

135b atinīyate] A(post corr. marg.): atinīya A(ante corr.): abhinīyate B. (Cf. Bc 3.64 atinīyate)

136a sapuṣmān] B: sapuṣmāne A.

136b te vai] A(post corr. marg.) B: te pi A(ante corr.).

136c vigataratirasāḥ] A: vigatanatirasā B.

137a mahodyāne] A: mahādyāne B.

138a tam ālokya] sic A B. (Cf. Bc 4.2 ca tās tasmai)

138c samudācāraṃ] A(post corr. marg.) B: samucāraṃ A(ante corr.). (Cf. Bc 4.2 samudācāraṃ)

139b °mānasāḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.3 °cetasaḥ)

139c prītisaṃphullaiḥ] A: prītisaṃsthulaiḥ B. (Cf. Bc 4.3 prītivikacaiḥ)

141a cāpi] sic A B. (Cf. Bc 4.5 caiva).

142a tās tasya] sic A B. (Cf. Bc 4.6 tasya tā).

142c gatvā] sic A B. (Cf. Bc 4.6 hatvā).

144a hi] sic A B. (Cf. Bc 4.8 tu).

147c apsarobhiś ca] A(post corr. int. lin.) B: apsarobhi A(ante corr.). (Cf. Bc 4.11 apsarobhiś ca) || kalitān] corr.: kalitāṃ A B. (Cf. Bc 4.11 kalitān)

147d vibudhān api] A(post corr.) B: vibudhānāpi A(ante corr.). (Cf. Bc 4.11 vibudhān api)

148b cāturyārūpa°] ≒ cāturyyārūpa° A: yāturmādrupa° B. (Cf. Bc 4.12 rūpacāturya°)

148c eva ca] A(post corr. marg.): eva A(ante corr.): iva ca B. (Cf. Bc 4.12 eva ca)

148c śaktāḥ] corr.: śaktā A B. (Cf. Bc 4.12 śaktāḥ)

151a yady api] sic A B. (Cf. Bc 4.15 yad api)

151d iti kāryo] sic A B. (Cf. Bc 4.15 itaḥ kāryo)

152c padābhyāṃ so] A: padābhyāṃ yo B. (Cf. Bc 4.16 padā vyāso)

155a muneḥ putraṃ] A. (Cf. Bc 4.19 munisutaṃ)

155d jagrāhābhijahāra] A: jagrābhijahāra B. (Cf. Bc 4.19 jagrāha ca jahāra)

156b mahattapāḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.20 mahat tapaḥ)

156c araṇyastho] A: eraṇyethā B. (Cf. Bc 4.20 ahar mene)

159cd bhāvaṃ yā gṛ°] A(post corr. marg.): bhāvaṃ gṛ° A(ante corr.): bhāvaṃ yāṃ gṛ° B. (Cf. Bc 4.23 bhāvaṃ yā gṛ°)

159d tu tāḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.23 tā[ḥ] tu)

161b *hāvair] ex coni (cf. Bc): bhāvair A B. (Cf. Bc 4.25 hāvair)

162a rājñas tā] A: rājñās tā B. (Cf. Bc 4.26 rājñas tu)

162b yūnas tasya hi] A: mūnas tasyābhi B. (Cf. Bc 4.26 kumārasya ca)

162c jahruḥ] A: jahuḥ B. (Cf. Bc 4.26 jahuḥ)

163b sa yuvā] sic A B. (Cf. Bc 4.27 kumāro)

164b strīpuraḥsaraḥ] corr.: strīpurassaraḥ A B.

164d vivasvān] corr.: vivaśvān A B. (Cf. Bc 4.28 vivasvān)

165d *saṃhatair] ex coni: saṃghatair A B. (Cf. Bc 4.29 saṃhatair)

166a srastāṃsa°] corr.: śrastāṃśu° A: śrastīśu B. (Cf. Bc 4.30 srastāṃsa°)

166ab °ālambamṛdubāhu°] A(post corr. marg.) B: °ālambabāhu° A(ante corr.).

166c skhalitaṃ] corr.: khalitaṃ A B. (Cf. Bc 4.30 skhalitaṃ)

168d hastaṃ saṃśliṣya] corr.: hastasaṃśliṣya A B. (Cf. Bc 4.32 hastasaṃśleṣa)

169b srasta°] B: śrasta° A. (Cf. Bc 4.33 srasta°)

169c ālakṣyaraśanā] corr.: ālakṣyarasanā A: ārakṣyerasanā B. (Cf. Bc 4.33 ālakṣyaraśanā)

172 note] By mistake of the scribe of A, this 172th verse overlaps with the 170th verse (= Bc 4.34). The verse of Bc 4.36 should have been written here.

174a vadanenānyā] A(post corr. marg.): vadanānyā A(ante corr.): vanedanānyā B.

176b puṣpa°] sic A B. (Cf. Bc 4.40 mālya°)

178a puruṣavat] A(post corr. marg.) B: puruṣat A(ante corr.). (Cf. Bc 4.42 puruṣavat)

178d bhoḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.42 bho)

182c yathā kāntaḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.46 iva naraḥ)

183d nirbhartsita] corr.: nirbhatsita A B. (Cf. Bc 4.47 nirbhartsita)

185b °vārajaiḥ] sic A B. (cf. Bc 4.49 °vārakaiḥ)

186d anuvṛtyānu°] sic A B. (Cf. Bc 4.50 anuvarty anu°)

187c 'nutkaḥ] ≒ nutkaḥ A: rutkaḥ B. (Cf. Bc 4.51 'nvakṣaṃ)

187d kūjitaḥ] A: kūjiteḥ B. (Cf. Bc 4.51 kūjati)

188c cintayataś cittaṃ] sic A B. (Cf. Bc 4.52 cintayato 'cintyaṃ)

189a pramadā nāryas] sic A B. (Cf. Bc 4.53 yuvatayo)

189b taṃ kāmoddāma°] A: tas taṃ kāmoddāma° B. (Cf. Bc 4.53 manmathoddāma°)

189c yuvānaṃ] sic A B. (Cf. Bc 4.53 kumāraṃ)

190b sudhairyā°] sic A B. Cf. Bc 4.54 tu dhairyā°)

190d sismiye] sic A B. (Cf. Bc 4.54 vivyathe)

191a tattve] A(post corr. marg.): bhave A(ante corr.) B. (Cf. Bc 4.55 tattve)

191c sa saṃvignena] sic A B. (Cf. Bc 4.55 samaṃ vignena)

192a kiṃ vinā] ≒ kim binā A B. (Cf. Bc 4.56 kim v imā)

192b saṃpannaṃ] sic A B. (Cf. Bc 4.56 saṃmattaṃ)

192d jareyaṃ] A: jarayaṃ B. (Cf. Bc 4.56d jarā yan)

194c tathā] sic A B. (Cf. Bc 4.58 tataḥ)

194d prahasanti] sic A B. (Cf. Bc 4.58 ca hasanti)

195d suped] A: suyed B. (Cf. Bc 4.59 śayed)

196b mṛtakaṃ ca vai] sic A B. (Cf. Bc 4.60 mṛtam eva ca)

197a 'pi] ≒ pi A B. (Cf. Bc 4.61 hi)

198b viṣayeṣv api niḥspṛham] A: viṣayeṣv api nispahaṃ B. (Cf. Bc 4.62 viṣayebhyo gataspṛham)

199cd vivakṣā me tayā] A(post corr. int. lin.): vivakṣā tayā A(ante corr.): vivakṣaḥ me tatayā B. (Cf. Bc 4.63 vivakṣā me tayā)

200a °ṣedho 'pi] ≒ °ṣedho pi A B. (Cf. Bc 4.64 °ṣedhaś ca)

200b tv anupra°] A: tv anutra° B. (Cf. Bc 4.64 cānupra°)

204c yonir] corr.: yoni A B.

204d °kāmā hi] sic A B. (Cf. Bc 4.68 kāmāś ca)

208a paramitaṃ] sic A B. (Cf. Bc 4.72 param iti)

210a *autathyasya] ex coni: autastyasya A: autastasya B. (Cf. Bc 74.74 utathyasya)

210b mamatāyāṃ] corr. (cf. Bc.): samatāyāṃ A B. (Cf. Bc 4.74 mamatāyāṃ)

211c °dharmāṇaṃ] A: °dharmāṃ B. (Cf. Bc 4.75 °karmāṇaṃ)

212a cāpi] sic A B. (Cf. Bc 4.76 caiva)

216d bheje] sic A B. (Cf. Bc 4.81 seje)

217a evamādi°] sic A B. (Cf. Bc 4.81: evamādyā)

218a nyāyataḥ] corr.: nyāyatas A B. (Cf. Bc 4.82 nyāyataḥ)

219d sa dhīraḥ] sic A B. (Cf. Bc 4.83 kumāraḥ)

220c tvām anuneṣyāmi] sic A B. (Cf. Bc 4.84 ca tvānuneṣyāmi)

221c hi] sic A B. (Cf. Bc 4.85 tu)

222ab mṛtyuś ca yadi] A(post corr. marg.) B: mṛtyu yadi A(ante corr.). (Cf. Bc 4.86 mṛtyuś ca yadi)

223b etad eva] A(post corr. marg.) B: eva A(ante corr.). (Cf. Bc 4.87 etad eva)

223c sasaṃvitkasya] ≒ sasambitkasya A B. (Cf. Bc 4.87 doṣavatsv api)

223d tathāpi na ratiḥ kṣamā] A: tathāpi na ratiḥ kṣamāḥ B. (Cf. Bc 4.87 kāmaṃ rajyeta me manaḥ)

224b bhaved api] sic A B. (Cf. Bc 4.88 bhaviṣyati)

224d ratiś caret] sic A B. (Cf. Bc 4.88 ratiḥ bhavet)

225c 'py] sic A B. (Cf. Bc 4.89 hi)

226d na hi] sic A B. (Cf. Bc 4.90 api)

227a tanmadhye] sic A B. (Cf. Bc 4.91 tan manye)

227c prasaktir] corr.: praśaktir A B. (Cf. Bc 4.91 prasaktir)

228b vartyatām iti] A(post corr. marg.) B: vartyatāmi A(ante corr.). (Cf. Bc 4.92 vartyatām iti)

230a anṛte] sic A B. (Cf. Bc 4.94 adhṛteḥ)

230c ca] A: na B. (Cf. Bc 4.94 hi)

231a eva] sic A B. (Cf. Bc 4.95 evaṃ)

232b bhāvinaṃ] sic A B. (Cf. Bc 4.97 bhāginam)

233b kāmeṣv api] sic A B. (Cf. Bc 4.97 kāmeṣu ca)

235d rodati] sic A B. (Cf. Bc 4.100 roditi)

236a sa dhīraś] sic A B. (Cf. Bc 4.100 kumāraś)

236b °āśrayaghātinīṃ] A(post corr.): °āśrayavighātinīṃ A(ante corr.): °kṣayaghātinīṃ B. (Cf. Bc 4.100 °āśrayaghātinīṃ)

237b niṣphalaiḥ] corr.: nisphalaiḥ A B. (Cf. Bc 4.101 niṣphalaḥ)

237c sa eva] sic A B. (Cf. Bc 4.101 sva eva) || viniguhya] sic A B. (Cf. Bc 4.101 vinigṛhya)

238a janaḥ striyaṃ] A: janastriyaṃ B. (Cf. Bc 4.102 janaśriyaṃ)

238b cānye] A(post corr. marg.): sāṇya A(ante corr.): cānya B. (Bc 4.102 sāyaṃ)

239a viṣayavimukhaṃ] A(post corr. marg.) B: vimukhaṃ A(ante corr.). (Bc 4.103 viṣayavimukhaṃ) || hi] sic A B. (Cf. Bc 4.103 tu)

239b hṛdayagataśalyo] B: hṛdayaśalyo A. (Cf. Bc 4.103 hṛdayagataśalyo)

240a °virato] A: viratā B.

240c munīndrān] A: munindrān B.

240d dhyātvā] A: om. B. ‖ 'bhūt] A: 'sut B.

Colophon: iti jīrṇa°] A(ante corr.): iti śrīlalitavistare jīrṇa° A(post corr. marg.) B.

Colophon: vighātano] A: vighātanā B.

2.2　TJAM 第17章の和訳（全訳）

『老人・病人・死人を観察して性愛の欲望を退ける』という第17章

かの阿羅漢、大通慧者である出家修行者ウパグプタは {**or:** 釈迦族の師子は} 再びかのアショーカ王を {**or:** 出家修行者アーナンダを} 見つめながら話しかけて、次のように教示しました。— [1]

それらの夢の出来事を聞くと、シュッドーダナ王は「きっとあの息子は出家してしまう」と沈思して、懊悩しました。[2]

その後かの王は父として息子に会いたいと願い、立ち上がると、大臣たちを伴って急いで後宮の中に歩み入りました。[3]

其処に入り来ると、彼はあたりを見渡し、近侍の者を呼んで、丁重に次の様に尋ねました。[4]

「おお侍従官よ、私の息子は何処にいるのだろうか。彼の顔を見るために私はやって来たのだ。それ故、私を息子に会わせてほしい。」[5]

そう王が命じたのを聞いて、かの侍臣が「王よ、あなた様のご子息はここにおります。どうかこちらにいらして、お会いになって下さい」と、[6]　そう答えたのを聞くと、さっそく父であるシュッドーダナ王は赴いて、かの息子を見ました。[7]

性の享楽への欲求をもたず、瞑想を愛するその息子をずっと長い間見つめながら、彼は心で次の様に考えました。[8]

「この息子は大士（菩薩）であり、欲望を離れ、王権を得ようと願っていない。夢の中で見られたように、きっと出家してしまうに違いない。」[9]

このように思い耽りながら、かの王はその息子のもとに行きました。抱きしめて、頭にキス（鼻で嗅ぐようにするキス）をしながら涙をこぼし、次のように語りました。[10]

「ああ、息子よ、どうしてお前は性の享楽への欲求をもたず、出家修行者のように欲望を離れた心で、瞑想を愛好し続けているのか。[11]

お前が欲望に無関心になるほどの苦しみが、どうしてお前に生まれたのか。もし望むなら、ここで語って欲しい。そのお前が願うものを私は与えよう。[12]

もしお前が欲するなら、大地すべてを、王権を、栄光と諸々の財産を私は捨てて、お前に必ず与えよう。受け取って、欲するがままに楽しむがよい。[13]

あらゆる法の中でも最も重要なものである王法に、このあらゆる世の人々が依拠しながら、いつも快適に暮らしているのだ。[14]

その［世の人々］においても愛欲（カーマ）は偉大な法であり、輪廻を成就せしめるものである。その目的のため性愛の欲望の行為という誓行において偉大な快楽がある。[15]

輪廻の法の成就において、性愛（ラーガ）は実に［お前の］心を拡大させるだろう。それ故、性愛という大喜悦の快楽を味わい、楽しみながら［それを］行いなさい。[16]

性愛がなければ、輪廻における法・益・徳性・善き幸せはない。それ故、性愛に尊重の思いを常にいだき、快楽を楽しみつつ愛欲を享受しなさい。[17]

性愛は愛欲（カーマ）を成就させるし、愛欲によって子孫が生まれることができる。子孫は法（ダルマ）を成就させるだろうし、法によって家系の維持がある。[18]

家の法（クラ・ダルマ）の持続があるところに、常に繁栄の女神がとどまるだろう。繁栄の女神がいるところ、あらゆる富と財がある。[19]

あらゆる富と財があれば、その者は望むとおりの布施を行えるだろう。その功徳によって心が清められた者は、幸福な美の輝きある善き徳性の拠り所たる者となるだろう。[20]

邪悪な友人を嫌悪し、善良な友人の徳性を喜び、道徳的に勝れ、善良な行いをなす、三輪清浄の者は、[21]　あらゆる有情の益を助け、忍辱の誓行を行うことが出来る。その後、精進と大勇猛心をもって一切法という富を得るだろう。[22]

その後、禅定によって心を清め、智慧（般若）という宝を得ることが出来る。その宝の光明という灯明によって、善き者たちの道（善趣）を照らしながら進むことだろう。[23]

このように認識して、息子よ、お前は性愛の行為という誓行を行いつつ、愛する女たちと共に愛し合い、愛欲（カーマ）を享受し、快楽を楽しみなさい。[24]

あらゆる季節に花に飾られ、よき色と香りと味を具えた果実の樹々が飾っている、悦楽の庭園に住しながら、[25]　色とりどりの花環によって自らを飾り、熟して身体によい果実を欲するままに食べながら、[26]　八種の功徳のある浄らかな水に満ちた、紅蓮や青蓮などの花々に溢れた、種々の鳥たちが沢山いる見事な池で沐浴し、[27]　快い三種の宮殿、［すなわち］常に暖かい冬殿、冷涼である夏殿、［冷暖］均等の家屋である雨季殿に [28]　住しながら、若い女たちと共に戯れて歓び、欲するがままに享受して、絶えず安楽に暮らしなさい。[29]

なぜなら輪廻において大歓喜・快楽の喜悦があるこの世俗法の達成は、布施の誓行によって生じたものである。[30]

梵天やシャクラなどの神々すべても、世界の守護神たちも、愛の欲望に染まった美しい女たちと共に享楽し、愛欲（カーマ）を楽しんでいる。[31]

婆羅門たちや仙人たちも、家の法を行じており、彼らも愛欲という徳目を好み、妻と共に楽しんでいる。[32]

あらゆる世界の支配者、大地の守護者たる諸王、クシャトリヤ、人民の守護主たち —— 彼らも五種の［欲望の］徳目（五欲楽）を意欲する若い女たちの群と楽しんでいる。[33]

生類の主であるヴァイシャたちも五欲楽を楽しみ、女たちと性的享楽を味わいながら、家法の掟に従っている。[34]

家住者たち、商人たち、シュードラたちも愛欲の味わうべき快楽を求めて、あらゆる商品を売り買いしながら、財の獲得を行っている。[35]

隊商長たち、商人の長たちも愛欲の快楽を願う心を抱いて、海すら越えて、宝石の獲得を行う。[36]

有徳の財産家たちも様々な手段をもって財産の獲得を行って、愛欲の快楽のために常に熱心な努力を怠らない。[37]

貧しい者たち、農夫たちもまた耕作の仕事に努力しつつ、愛欲の快楽のために［その仕事を］ひどい労苦であると考えない。[38]

奴婢や召使たちも他者に仕える仕事に努力し、彼らも［皆］愛欲を思う心を抱いて、絶えず財を稼いでいる。[39]

家来たち、兵、戦士たち —— 彼らも［皆］愛欲を思う心を抱いて、自分の命すら顧みることなく、戦闘の圏内に入ってゆく。[40]

不運な者たち、貧窮者たちすら、家から家へ食物を求めて食べながら、愛欲の快楽を味わうため常に乞い求めて彷徨い歩いている。[41]

このようにして、あらゆる人間たちが、栄えある者も哀れな者も、欲望のままに愛欲を味わい、悦び、楽しんでいる。[42]

家畜、動物たち、虫たち、鳥たちも、それぞれの美しい伴侶を愛し、楽しみながら、性愛の悦びを味わっている。[43]

鬼（ブータ）、餓鬼、ピシャーチャたち —— 彼らも［皆］愛欲の快楽を思う心を抱いて、それぞれの妻との性愛の悦びを味わいながら、喜悦して暮らしている。[44]

ダーナヴァ、ガルダ、ナーガ（龍）たちも愛欲の快楽を求め、女たちと性愛の享受を味わい、常に愉悦している。[45]

ガンダルヴァ、キンナラ、ヤクシャ（夜叉）、クンバーンダ、羅刹たちも、女たちと共に快楽を楽しみ、[46]　同様にヴィディヤーダラ、シッダたち、またサーディヤを始

めとする者たちすら、女たちの支配下にあり、つねに楽しんで快楽を享受している。[47]

シャクラを始めとする神々も皆悦んで、アプサラス（天女）の群と共に、天の不死の甘露を味わいながら、自ら意欲して快楽を楽しんでいる。[48]

またヤーマ天、サントゥシタ天、化楽天、他化自在天の神々も、[49]　あらゆる感官の享楽の対象に愛著し、それぞれのアプサラスの群と共に、天の不死の甘露を味わいながら、自ら意欲して快楽を楽しんでいる。[50]

欲界に生まれたいかなる者が、愛欲の支配下にないだろうか。あらゆる者が愛する伴侶の支配下にあり、家法の掟に従っているのだ。[51]

愛欲（カーマ）こそ実に一切の輪廻の法の基礎たるものと言われる。愛欲がなければどうして三界において法が活動できるだろうか。[52]

それ故［お前も］愛欲の支配下にいて、家族の法に住し、布施を行いながら、快楽を味わい、悦びをもって楽しみながら、暮らしなさい。[53]

若者である間は、自分の愛する女たちと共に楽しみ、歓び、自分の家法の維持のために自分の家系の継続を達成しなさい。[54]

その後、老境に達した時に、自分の家の息子を後継ぎに置き、出家して苦行の森に住して、牟尼の誓行を行いなさい。[55]

もしそのようにするなら、生きている間ずっと快楽を楽しみながら、お前に常に幸があろう。最後に寂滅の至福に達して、仏の住まいにお前は達するだろう。[56]

いとしい子よ、そのように十分認識して、自分の家の持続を達成させる性愛の行為という誓行を堅持し、美しい女たちと共に楽しみなさい。」[57]

このように父王が教示されたのを聞いて、かの大慧者はその父を見つめながら「わかりました」と答えました。[58]

その後、父であるかの王は、息子がよく理解したと考え、大臣を呼んで、見つめながら次の様に命じました。[59]

「大臣よ、この副王（王子）が、園林に行きたいと願っている。その道を荘厳し、鐘を鳴らして布告しなさい。」[60]

この様に王が命じたのを聞き、かの大臣は「かしこまりました」と答え、ただちに都城の道を完全に掃除しました。[61]

そして飾り旗やのぼりなどによって至る所を飾り付けし、またかの歓喜園においても飾り付けをしました。[62]

それから［大臣は］彼の部下を呼んで、王に命じられたことを次の様に告げました。「君、鐘を鳴らして、あらゆる人民にも同様に報せなさい。」[63]

彼が命じたのを聞いて、その者は「そうします」としっかり心得て、鐘を手に取り、すぐに従者を伴って、悦んで［都城を］歩き回りました。[64]

そして都城のあらゆる場所で鐘を鳴らしながら、王に命じられた通りに、すべての人民に語りかけ、大声で布告しました。[65]

「かの副王たる王子、栄光あるサルヴァールタシッダ様は今から七日後に、観覧のため歓喜園に行かれるであろう。[66]

それ故、この地で都城のどこにも不適切な物が置かれていてはならない。至る所にめでたい物だけが置かれるべきである。」[67]

鐘が鳴らされてのその布告を聞いて、すべての都民たちは歓喜し、かの尊いお方を見たいと願い、［その様に］行動しました。[68]

以下、ネパールに伝承されていた馬鳴の Buddhacarita 第3章と第4章からの逐字的な借用が始まる。TJAM のそれらの借用詩節において、梵文テクストが Buddhacarita と大部分合致するか、または完全に同じであるような場合、ここでは翻訳を省略するが、テクストの内容が大きく異なる詩節については和訳を示す。

Buddhacarita 3.1 からの借用詩節	[69]
Buddhacarita 3.2 からの借用詩節	[70]
Buddhacarita 3.3 からの借用詩節	[71]
Buddhacarita 3.4 からの借用詩節	[72]
Buddhacarita 3.5 からの借用詩節	[73]
Buddhacarita 3.6 からの借用詩節	[74]
Buddhacarita 3.7 と前半が異なる詩節	[75]

訳：父はかの息子がやって来たのを見ると、彼の心が園林を欲していることを考え、「行きなさい」と言葉では命じ、心では愛情のゆえに彼を離しませんでした。[75]

Buddhacarita 3.8 からの借用詩節	[76]
Buddhacarita 3.9 からの借用詩節	[77]
Buddhacarita 3.10 からの借用詩節	[78]
Buddhacarita 3.11 からの借用詩節	[79]
Buddhacarita 3.12 からの借用詩節	[80]
Buddhacarita 3.13 からの借用詩節	[81]
Buddhacarita 3.14 からの借用詩節	[82]
Buddhacarita 3.15 からの借用詩節	[83]
Buddhacarita 3.16 からの借用詩節	[84]
Buddhacarita 3.17 からの借用詩節	[85]
Buddhacarita 3.18 からの借用詩節	[86]

Buddhacarita 3.19 からの借用詩節 [87]
Buddhacarita 3.20 からの借用詩節 [88]
Buddhacarita 3.21 からの借用詩節 [89]
Buddhacarita 3.22 からの借用詩節 [90]
Buddhacarita 3.23 からの借用詩節 [91]
Buddhacarita 3.24 からの借用詩節 [92]
Buddhacarita 3.25 からの借用詩節 [93]
Buddhacarita 3.26 からの借用詩節 [94]
Buddhacarita 3.27 からの借用詩節 [95]
Buddhacarita 3.28 からの借用詩節 [96]
Buddhacarita 3.29 からの借用詩節 [97]
Buddhacarita 3.30 からの借用詩節 [98]
Buddhacarita 3.31 からの借用詩節 [99]
Buddhacarita 3.32 からの借用詩節 [100]
Buddhacarita 3.33 からの借用詩節 [101]
Buddhacarita 3.34 からの借用詩節 [102]
Buddhacarita 3.35 からの借用詩節 [103]
Buddhacarita 3.36 からの借用詩節 [104]
Buddhacarita 3.37 からの借用詩節 [105]
Buddhacarita 3.38 からの借用詩節 [106]
Buddhacarita 3.39 からの借用詩節 [107]
Buddhacarita 3.40 からの借用詩節 [108]
Buddhacarita 3.41 からの借用詩節 [109]
Buddhacarita 3.42 からの借用詩節 [110]
Buddhacarita 3.43 に内容が類似する詩節 [111]

訳：そう語ったのを聞いて、かの王子は注意深い眼でその病人を眺め、更にかの御者を見つめて不安な心で、丁重に次の様に質問しました。[111]

Buddhacarita 3.43 に内容が類似する詩節 [112]

訳：「彼だけの身体に病気は起こるものなのか、或いは更に、輪廻的生存にいるあらゆる生類、我々の［身体］にも［それが起こると］知られているのか、御者よ、そのことを私の前であなたは語りなさい。」[112]

Buddhacarita 3.44 に内容が類似する詩節 [113]

訳：彼がそう語ったのを聞いて、かの御者は王子を見つめながら、次の様に語りました。「賢きお方よ、この［病という］弱点は［生き物に］共通のものなのです。輪廻的生存の住まいのどこにおいても同様なのです。」[113]

Buddhacarita 3.45 からの借用詩節 [114]

Buddhacarita 3.46 に内容が類似する詩節 [115]

訳：「このように病によって押しひしがれていながら、どんな人でも［生に］歓喜している。生類がもつこの病気という禍を見ながら、どうしてこのように楽しもうと、ふるまっているのか。病気の恐怖から逃れていないのに、あらゆる人々が、愚迷の心をいだいて笑っている。」[115]

Buddhacarita 3.47 からの借用詩節 [116]

Buddhacarita 3.47 に内容が類似する詩節 [117]

訳：そのように［王子が］語ったのを聞いて、御者は落胆した心で「かしこまりました」と返答して、その通りに車を転じると、それを王宮の中に入れました。[117]

Buddhacarita 3.48 からの借用詩節 [118]
Buddhacarita 3.49 からの借用詩節 [119]
Buddhacarita 3.50 からの借用詩節 [120]
Buddhacarita 3.51 からの借用詩節 [121]
Buddhacarita 3.52 からの借用詩節 [122]
Buddhacarita 3.53 からの借用詩節 [123]
Buddhacarita 3.54 からの借用詩節 [124]
Buddhacarita 3.55 からの借用詩節 [125]
Buddhacarita 3.56 からの借用詩節 [126]
Buddhacarita 3.57 からの借用詩節 [127]
Buddhacarita 3.58 からの借用詩節 [128]
Buddhacarita 3.59 からの借用詩節 [129]
Buddhacarita 3.60 からの借用詩節 [130]
Buddhacarita 3.61 からの借用詩節 [131]
Buddhacarita 3.62 からの借用詩節 [132]
Buddhacarita 3.63 からの借用詩節 [133]
Buddhacarita 3.64 からの借用詩節 [134]
Buddhacarita 3.65 からの借用詩節 [135]

Buddhacarita に対応がない独自の詩節　　[136]

訳：其処で、かの菩薩は視線をあちこちに動かし、花が咲いた樹を見て、「あれらの満開の花たちも、寒い季節になれば、萎れてしまうことだろう。このようにすべての者も最後の時には快楽・歓びを失って萎れるにいたるだろう」と、そのように死を沈思しながら、快楽の心を離れ、瞑想に耽ったままでいました。[136]

Buddhacarita 4.1 に内容が類似する詩節　　[137]

訳：その後、かの大きな園林において、性愛の快楽を強く望む若い女たちは、あたかも到着した若い花婿を迎えるように、彼に向かって歩いて来ました。[137]

Buddhacarita 4.2 からの借用詩節　　[138]
Buddhacarita 4.3 からの借用詩節　　[139]
Buddhacarita 4.4 からの借用詩節　　[140]
Buddhacarita 4.5 からの借用詩節　　[141]
Buddhacarita 4.6 からの借用詩節　　[142]
Buddhacarita 4.7 からの借用詩節　　[143]
Buddhacarita 4.8 からの借用詩節　　[144]
Buddhacarita 4.9 からの借用詩節　　[145]
Buddhacarita 4.10 からの借用詩節　　[146]
Buddhacarita 4.11 からの借用詩節　　[147]
Buddhacarita 4.12 からの借用詩節　　[148]
Buddhacarita 4.13 からの借用詩節　　[149]
Buddhacarita 4.14 からの借用詩節　　[150]
Buddhacarita 4.15 からの借用詩節　　[151]
Buddhacarita 4.16 からの借用詩節　　[152]
Buddhacarita 4.17 からの借用詩節　　[153]
Buddhacarita 4.18 からの借用詩節　　[154]
Buddhacarita 4.19 からの借用詩節　　[155]
Buddhacarita 4.20 からの借用詩節　　[156]
Buddhacarita 4.21 からの借用詩節　　[157]
Buddhacarita 4.22 からの借用詩節　　[158]
Buddhacarita 4.23 からの借用詩節　　[159]
Buddhacarita 4.24 からの借用詩節　　[160]
Buddhacarita 4.25 からの借用詩節　　[161]
Buddhacarita 4.26 からの借用詩節　　[162]

Buddhacarita 4.27 からの借用詩節 [163]
Buddhacarita 4.28 からの借用詩節 [164]
Buddhacarita 4.29 からの借用詩節 [165]
Buddhacarita 4.30 からの借用詩節 [166]
Buddhacarita 4.31 からの借用詩節 [167]
Buddhacarita 4.32 からの借用詩節 [168]
Buddhacarita 4.33 からの借用詩節 [169]
Buddhacarita 4.34 からの借用詩節 [170]
Buddhacarita 4.35 からの借用詩節 [171]
Buddhacarita **4.34 (!)** からの借用詩節[17] [172]
Buddhacarita 4.37 からの借用詩節 [173]
Buddhacarita 4.38 からの借用詩節 [174]
Buddhacarita 4.39 からの借用詩節 [175]
Buddhacarita 4.40 からの借用詩節 [176]
Buddhacarita 4.41 からの借用詩節 [177]
Buddhacarita 4.42 からの借用詩節 [178]
Buddhacarita 4.43 からの借用詩節 [179]
Buddhacarita 4.44 からの借用詩節 [180]
Buddhacarita 4.45 からの借用詩節 [181]
Buddhacarita 4.46 からの借用詩節 [182]
Buddhacarita 4.47 からの借用詩節 [183]
Buddhacarita 4.48 からの借用詩節 [184]
Buddhacarita 4.49 からの借用詩節 [185]
Buddhacarita 4.50 からの借用詩節 [186]
Buddhacarita 4.51 からの借用詩節 [187]
Buddhacarita 4.52 からの借用詩節 [188]
Buddhacarita 4.53 からの借用詩節 [189]
Buddhacarita 4.54 からの借用詩節 [190]
Buddhacarita 4.55 からの借用詩節 [191]
Buddhacarita 4.56 からの借用詩節 [192]
Buddhacarita 4.57 からの借用詩節 [193]
Buddhacarita 4.58 からの借用詩節 [194]

---

17. このTJAM第 172 偈は第170 偈（= Bc 4.34) とテクストが重複している。本来ここに Bc 4.36 を写すはずであったが、A 写本の筆写人が誤って Bc 4.34 を写してしまったものである。

Buddhacarita 4.59 からの借用詩節 [195]

Buddhacarita 4.60 からの借用詩節 [196]

Buddhacarita 4.61 からの借用詩節 [197]

Buddhacarita 4.62 からの借用詩節 [198]

Buddhacarita 4.63 からの借用詩節 [199]

Buddhacarita 4.64 からの借用詩節 [200]

Buddhacarita 4.65 からの借用詩節 [201]

Buddhacarita 4.66 からの借用詩節 [202]

Buddhacarita 4.67 からの借用詩節 [203]

Buddhacarita 4.68 からの借用詩節 [204]

Buddhacarita 4.69 からの借用詩節 [205]

Buddhacarita 4.70 からの借用詩節 [206]

Buddhacarita 4.71 からの借用詩節 [207]

Buddhacarita 4.72 からの借用詩節 [208]

Buddhacarita 4.73 からの借用詩節 [209]

Buddhacarita 4.74 からの借用詩節 [210]

Buddhacarita 4.75 からの借用詩節 [211]

Buddhacarita 4.76 からの借用詩節 [212]

Buddhacarita 4.77 からの借用詩節 [213]

Buddhacarita 4.78 からの借用詩節 [214]

Buddhacarita 4.79 からの借用詩節 [215]

Buddhacarita 4.80 からの借用詩節 [216]

Buddhacarita 4.81 からの借用詩節 [217]

Buddhacarita 4.82 からの借用詩節 [218]

Buddhacarita 4.83 からの借用詩節 [219]

Buddhacarita 4.84 からの借用詩節 [220]

Buddhacarita 4.85 からの借用詩節 [221]

Buddhacarita 4.86 からの借用詩節 [222]

Buddhacarita 4.87 に内容が類似する詩節 [223]

訳：もし女たちのこの肉体的な美が永遠のものであったとしても、それでも、知ある者にとって、愛欲において楽しむことは堪えられない。[223]

Buddhacarita 4.88 からの借用詩節 [224]

Buddhacarita 4.89 からの借用詩節 [225]

Buddhacarita 4.90 からの借用詩節 [226]

Buddhacarita 4.91 からの借用詩節 [227]
Buddhacarita 4.92 からの借用詩節 [228]
Buddhacarita 4.93 からの借用詩節 [229]
Buddhacarita 4.94 からの借用詩節 [230]
Buddhacarita 4.95 からの借用詩節 [231]
Buddhacarita 4.96 からの借用詩節 [232]
Buddhacarita 4.97 からの借用詩節 [233]
Buddhacarita 4.98 からの借用詩節 [234]
Buddhacarita 4.99 からの借用詩節 [235]
Buddhacarita 4.100 からの借用詩節 [236]
Buddhacarita 4.101 からの借用詩節 [237]
Buddhacarita 4.102 からの借用詩節 [238]
Buddhacarita 4.103 からの借用詩節 [239]
Buddhacarita に対応がない独自の詩節 [240]

訳：このようにかのサルヴァールタシッダは感官の対象を嫌悪し、老・病・死を考えて、悟りの智慧を欲し、揺るぎない心で、菩提行を愛し、あらゆる徳性の蔵たる牟尼たちの王、一切の仏たちを見んと欲して、憶念しながら瞑想し、三昧に専念して心楽しみ、自分の住まいの中に居ました。[240]

『老人・病人・死人を観察して性愛の欲望を退ける』という第17章［終わる］。

３．Tathāgatajanmāvadānamālā 第18章の校訂研究

第18章を内容的に８区分して、各部所のソースとオリジナル箇所をおおまかに示せば、次の通り：

（１）第6～第26詩節（観耕、樹下の瞑想、一比丘を見る）の記述は Buddhacarita 第5章を利用。

（２）第27～第61詩節（王子が出家への意欲を友人たちに話す）の記述は TJAM オリジナル。

（３）第62～第66詩節（ウダーインの忠告 1）の記述は Buddhacarita 第4章を利用。

（４）第67～第121詩節（ウダーインの忠告 2）の記述は TJAM オリジナル。

（５）第122～第126詩節（女の声を帰城の途中で聞いて涅槃を思う）の記述は Buddhacarita 第5章を利用。

（６）第127～第138詩節（菩薩が父王に出家を願い出る）の記述は TJAM オリジナル。

（７）第139～150詩節（出家の是非をめぐる菩薩と王との対話 1）の記述は Buddhacarita 第5章を利用。

（８）第151～第215詩節（出家の是非をめぐる菩薩と王との対話２）の記述は TJAM オリジナル。

3.1　TJAM 第18章『出家に進み行くことを請い願い、理解せしめる』の梵文テクスト

18 pravrajyābhigamanaprārthanābhisaṃbodhano nāma parivarta

[116a3] atha so 'rhan mahābhijñ**a upagupto** {**or:** °ḥ śākyasiṃho} yatīśvaraḥ /
aśokaṃ {**or:** ānandaṃ} taṃ **patiṃ** {**or:** yatiṃ} paśyan samāmantryaivam ādiśat // 1
tasya sarvārthasiddhasya saṃbodhivratasādhanam /
vakṣyāmy ahaṃ mahāsattva śṛṇuṣva tat samāhitaḥ // 2
tadyathāsau mahāsattvo lobhyamāno 'pi yatnataḥ /
kāntābhī ratiraktābhī rantuṃ naiva samaicchata // 3
atha sa viṣayāsakto vasante 'pi vanāśrame /
vivikto vṛkṣam āśritya dhyātvā sthātuṃ samaihataḥ // 4
tata iṣṭasuhṛnmitrasacivaiḥ sa samanvitaḥ /
kaṇṭhakam aśvam āruhya vane draṣṭuṃ mudācarat // 5

tatra mārge mahīṃ sarvāṃ kṛṣyamāṇāṃ samantataḥ /
śaṣpadarbhāṅkurotpannāṃ sampaśyann acarac chanaiḥ // 6 ≈ **Bc 5.5**
tatrānekān krimīn kīṭān jantūṃs tān āturān pathi /
dṛṣṭveva svajanān ārttāñ śuśoca sa kṛpāmatiḥ // 7 ≈ **Bc 5.5**
kṛṣataś ca narān vīkṣya vātātapāhatāśrayān /
dhuryāṃś ca vahato bhārāṃ cukṣubhe 'tikṛpāhataḥ // 8 ≈ **Bc 5.6**
avatīrya tato 'śvāt sa vyacarad bhūtale śanaiḥ /
sarveṣāṃ hi jarārogamṛtyūn eva vicintayan // 9 ≈ **Bc 5.7**
abhīpsur vijane sthātuṃ sarvāṃs tān anuyāyinaḥ /
nivārya svayam ekānte gatvā paśyan samantataḥ // 10 ≈ **Bc 5.8**
vṛkṣachāyāṃ samāśritya tṛṇāsana[116b]samāśritaḥ /
sarvān buddhān anusmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 11 ≈ **Bc 5.9**
jagataḥ prabhavavyayau vicintyan niścalāśayaḥ /
prathamadhyānasatsaukhyam anāsravaṃ samāptavān // 12 ≈ **Bc 5.9; 5.10**
tataḥ prītisukhaṃ prāpya sa vivekasamādhijam /
sarvalokagatiṃ vīkṣya pradadhyāv evam ātmanā // 13 ≈ **Bc 5.11**
yaj jano 'yaṃ jarāvyādhimṛtyudharmāvimocitaḥ /
mṛtakam āturaṃ jīrṇam madāndho nindate param // 14 ≈ **Bc 5.12**
ahaṃ ced īdṛśaḥ svayaṃ vinindeya paraṃ tathā /
na hi tat sadṛśaṃ vā syāt kṣamaṃ mama vijānataḥ // 15 ≈ **Bc 5.13**
iti vipaśyatas tasya jagadjarāturavyayān /
balayauvanajīveṣu svātmagato mado 'kṣiṇot // 16 ≈ **Bc 5.14**
na jaharṣānutepe na vicikitsāṃ ca nāyayau /
tandrinidre ca kāme na rarañje nāvamanyate // 17 ≈ **Bc 5.15**
iti buddhir viśuddhābhūn nīrajaskāsya sanmateḥ /
anyair adṛśyamānaś ca bhikur eka upāsarat // 18 ≈ **Bc 5.16**
vīksya sarvārthasiddhas tam abhyapṛcchat sa sādaram /
bhavān kaḥ kuta āyāti kimarthaṃ tad bravītu me // 19 ≈ **Bc 5.17ab**
iti taduktam ākarṇya sa bhikṣur yatipuṅgavaḥ /
nṛpātmajaṃ tam ālokya purastha evam abravīt // 20 ≈ **Bc 5.17b**
ahaṃ pravrajito bhikṣuḥ śramaṇaḥ saugato yatiḥ /
jarārogāntabhīto 'smi mumukṣur bodhisaṃcarī // 21 ≈ **Bc 5.17cd**
jagati kṣayidharme 'tra mṛgaye saugataṃ padam /
svaparatulyasadbuddhiniḥkleśo bhavaniḥspṛhaḥ // 22 ≈ **Bc 5.18**
vasaṃś caityavihāre vā tarumūle girau vane /

tyaktaparigraho yogī bhikṣānno vicaro nṛpa // 23 **≈ Bc 5.19**

ity uktvā sa mahābhijñas tatra utthāya pakṣivat /

vihāyasā jvaladvahnir iva devālayaṃ yayau // 24 **≈ Bc 5.20**

tam evaṃ khe gataṃ vīkṣya vismitaḥ sa nṛpātmajaḥ /

tadvrataṃ samupālabdhyai pravrajituṃ samaicchata // 25 **≈ Bc 5.21**

tataḥ sudhīḥ sa śuddhātmā bodhisattvo jitedriyaḥ /

nivṛtya ca tadudyāne dhyātvā tasthau samāhitaḥ // 26 **≈ Bc 5.22**

tatra te sacivāḥ sarve taṃ vṛkṣatalam āśritam /

samīkṣya sahasopetya parivṛtyo[117a]patasthire // 27

tān sarvān samupāsīnān dṛṣṭvā bhūpātmajo 'pi saḥ /

rāgacaryāviraktātmā niḥśvasann evam abravīt // 28

aho janmajarārogavyayaṃ dṛṣṭvāpi rāginaḥ /

svecchayā ratisaṃbhogaṃ bhuktvā ramanti nirbhayāḥ // 29

sarve 'pīme narā nūnaṃ jarāturā hatendriyāḥ /

mṛtyum āsādya bhūyo 'pi janmalabdhā bhavādhvani // 30

svecchākarmānusaṃcārāḥ saṃpattisukhasādhinaḥ /

svadaivaphalabhogyāni bhuktvā bhrameyur ābhavam // 31

yadā svargagatā devā bhuktvāmṛtaṃ pramoditāḥ /

ratibhogātisaṃraktāḥ pracareyuḥ pramoditāḥ // 32

kāle tataḥ paricyutvā svadaivābhipramoditāḥ /

prajātā martyaloke ca kecic cāpy āsure kule // 33

tiryagyoniṣu kecic ca kecit prete ca nārake /

svakarmaphalabhuñjānā bhrameyuḥ sarvadā bhave // 34

muktimārgam apaśyanto bhramyamānā vane 'ndhavat /

vividhāny api duḥkhāni bhuñjamānā vimohitāḥ // 35

kleśaduḥkhābhisaṃtaptā aśaraṇyā anāyakāḥ /

asaddharmābhisaṃraktāś careyur evam ābhavam // 36

kadācit sugatān dṛṣṭvā mudā vandeyur ānatāḥ /

tadā te vimalātmāno labheyur dharmamānasaṃ // 37

tato dharmābhivāñchanto mṛgeyur dharmam uttamam /

śrutvā te saugataṃ dharmaṃ bodhicittam avāpnuyuḥ // 38

tatas te syur mahāsattvā bodhisattvā jitendriyāḥ /

pravrajyāsaṃvaraṃ dhṛtvā saṃcareraṅ jagaddhite // 39

tatas te bodhisaṃbhāraṃ pūrayitvā yathākramam /

arhatpadaṃ samāsādya jitvā māragaṇān api // 40

trividhāṃ bodhim āsādya labheyuḥ saugatālayam
niḥkleśā nirmalātmānaḥ pariśuddhendriy*āśrayāḥ // 41
iti matvāham atraivaṃ dhyātvā saṃbodhimānasaḥ /
triratnasmaraṇaṃ dhṛtvā sthātum icchāmi sarvadā // 42
etan me vākyam ākarṇya sarve yūyaṃ sahāyakāḥ /
bhadraśrīsadguṇaṃ saukhyaṃ dātuṃ prāptuṃ yadīcchatha // 43
tathā me vacanaṃ śrutvā gatvā svasvālayasthitāḥ /
dattvārthibhyaḥ sadā dānaṃ saṃcaradhvaṃ samāhitāḥ /44
śuddhaśīlasamācārāḥ sambodhini[117b]hitāśayāḥ /
triratnabhajanaṃ kṛtvā caradhvaṃ ghoṣataṃ vratam // 45
tataḥ kṣāntivrataṃ dhṛtvā svaparātmahitodyatāḥ /
sambodhisādhanaṃ dharmaṃ dhṛtvā carata sarvadā // 46
tataḥ kleśān vinirjitya duṣṭān māragaṇān api /
samādhinihitātmānaś carata dhyānasaṃvaram // 47
tataḥ prajñābdhim uttīrya sambodhijñānam uttamam /
cintāmaṇiṃ samāsādya saṃbuddhapadam āpsyatha // 48
evaṃ bauddhapadaṃ prāptuṃ yadīcchatha jagaddhite /
sarve svasvālaye sthitvā caradhvaṃ bodhisaṃvaram // 49
aham api jagalloke saddharmasaṃprakāśitum /
saṃbodhijñānam āsādya prāpsyāmi saugataṃ padam // 50
ato 'haṃ sāmprataṃ gatvā gayāśīrṣe nagottame /
tapo 'tiduṣkaraṃ taptvā jayan sarvāṃs tapasvinaḥ // 51
tato bodhidrume gatvā duṣṭān māragaṇāñ jayan /
dhyātvā saṃbodhim āsādya saṃbuddhapadam āpnuyām // 52
tataḥ sarveṣu lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
bodhimārge pratiṣṭhāpya cārayeyaṃ śubhe jagat // 53
evaṃ dharmamayaṃ kṛtvā sarvatra bhuvaneṣv api /
samāpya saugataṃ kāryaṃ samāpsyāmi sunirvṛtim // 54
etaddhetor gayāśīrṣe girau gacchāni sāmpratam /
yūyaṃ svasvālaye gatvā carata bodhisaṃvaram // 55
yadāhaṃ bodhisaṃprāptaḥ saddharmasaṃprakāśayan /
tadāgatyeha yuṣmākam upadekṣyāmi saṃvaram // 56
sarve yūyaṃ samāgatya śāsane me samāśritāḥ /
pravrajyāsaṃvaraṃ dhṛtvā saṃcaradhvaṃ jagaddhite // 57
mayā sārdhaṃ caranto 'pi kṛtvā sarvatra bhadratām /

saddharmaṃ samupādiśya cārayata jagacchubhe // 58
tathā cen nirmalātmānaḥ pariśuddhendriyāśrayāḥ /
arhanto bodhim āsādya sambuddhapadam āpsyatha // 59
tato dharmaṃ prakāśitvā kṛtvā dharmamayaṃ jagat /
samāpya saugataṃ kāryaṃ samāpsyatha sunirvṛtim // 60
etat satyaṃ mayākhyātaṃ śrutvā sarve prabodhitāḥ /
yūyaṃ svasvālaye sthitvā saṃcaradhvaṃ [118a] sadā vṛṣe // 61
iti tenoditaṃ śrutvā purohitātmajo dvijaḥ /
udāyī nāma taṃ paśyan sudhīram evam abravīt // 62 **≈ Bc 4.62**
śṛṇu sakhe suhṛdvākyaṃ yan mayā hitam ucyate /
yat te 'haṃ supriyo 'smīṣṭaḥ suhṛt sakhā sadānugaḥ // 63 **≈ Bc 4.64**
yaḥ sakhā suhṛdaḥ sakhyur hitārthaṃ nopabhāṣati /
akārye cārayen naiva sa kim iṣṭaḥ suhṛt sakhā // 64 **≈ Bc 4.65**
yaś cāpi suhṛdaḥ sakhyuḥ śṛṇute na hitaṃ vacaḥ /
śrutvāpi mānayen naiva so 'pi kiṃ supriyaḥ sakhā // 65
ity ahaṃ te hitaṃ vākyaṃ vaktum icchāmi sanmate /
tad arhati bhavāñ chrotuṃ yadi me tvaṃ suhṛt sakhā // 66
pitā te sarvarājendro vṛddhas tyaktvā parigrahān /
vanāśrame samāśritya municaryāṃ samācaret // 67
yac cāpi te pitū rājñas tvam eka ātmajaḥ sutaḥ /
tad atra ko nṛpo rājā saṃpālayet prajās sadā // 68
yāvan na jāyate putras tāvad rājyāśrame vasan /
saṃvṛtidharmam ādhāya saṃcara svakulavratam // 69
yadā te ātmajo jātaḥ saṃskārapariśodhitaḥ /
sarvavidyāguṇābhijño yuvarājo vinītikaḥ // 70
tadā taṃ śrīguṇādhāraṃ abhiṣiñcya yathāvidhi /
nṛpāsane pratiṣṭhāpya kṛtvā narādhipaṃ prabhum // 71
sambodhijñānasaṃprāptyai tyaktvā sarvān parigrahān /
pravrajyāsaṃvaraṃ dhṛtvā saṃcarasva jagaddhite // 72
evaṃ cet te sadā bhadraṃ bhavec chrīsatsukhānvitam /
kuladharmasthitiś cāpi jayaśrīkīrtisaṃyutāḥ // 73
tathā bhavāñ jagalloke saddharmaṃ saṃprakāśayan /
jagad dharmamayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāt // 74
sarve 'pi hi mahāsattvā bodhisattvā narādhipāḥ /
svātmajaṃ svāsane sthāpya kṛtvā rājyādhipaṃ prabhum // 75

vṛddhā rājyāśramaṃ tyaktvā samāśritya vanāśrame /
municaryāvrataṃ dhṛtvā saṃprayātāḥ sunirvṛtiṃ // 76
evaṃ sarve 'pi saṃbuddhā atītā vartamā[118b]nikāḥ /
janayitvātmajaṃ dhīraṃ pratiṣṭhāpya nṛpāsane /
vinīya sarvalokānāṃ saṃvṛtidharmapālane // 77
vṛddhā gṛhāśramaṃ tyaktvā samāśritya vanāśrame /
pravrajyāsaṃvaraṃ dhṛtvā saṃcaranto jagaddhite // 78
niḥkleśā vimalātmānaḥ pariśuddhatrimaṇḍalāḥ /
jitvā māragaṇān duṣṭān bodhiṃ prāpya munīśvarāḥ // 79
saddharmaṃ samupādiśya kṛtvā dharmamayaṃ jagat /
samādhinihitātmāno yātā yāsyanti nirvṛtim // 80
evam anāgatāś cāpi ye bhaveyur munīśvarāḥ /
te 'pi sarve samutpādya svātmajaṃ rājyapālane /
abhiṣiñcya pratiṣṭhāpya nṛpāsane vinīya ca // 81
vṛddhā rājyāśramaṃ tyaktvā samāśrītya vanāśrame /
pravrajyāsaṃvaraṃ dhṛtvā samādhinihitāśayāḥ // 82
jitvā māragaṇān duṣṭān niḥkleśā vimalendriyāḥ /
saṃbodhijñānam āsādya bhaviṣyanti munīśvarāḥ // 83
te 'pi sarvatra saddharmam upādiśya jagaddhite /
jagad dharmamayaṃ kṛtvā saṃyāsyanti sunirvṛtim // 84
evaṃ vijñāya bhūmendra saṃsāradharmasādhanam /
yāvan na vidyate *putras tāvad rājyāśrame vasan // 85
sarvalokahitārthena saṃvṛtidharmaṃ cārayan /
janayitvātmajaṃ devyāṃ saṃpālayasva sādaram // 86
tato vinīya kaumāryaṃ tam ātmajaṃ yathākramam /
adhītya sakalā vidyāḥ saṃvṛtau saṃpracārayan // 87
tato 'bhiṣiñcya yauvanyaṃ pratiṣṭhāpya nṛpāsane /
sarvadharmādhipaṃ kṛtvā saṃcārayan prajāhite // 88
tatas sve vārddhake tyaktvā rājyaṃ samsāraniḥspṛhaḥ /
pravrajyāsadvrataṃ dhṛtvā saṃcarasva jagaddhite // 89
tathā cet tvaṃ viśuddhātmā jitvā māragaṇān api /
trividhāṃ bodhim āsādya sarvajño 'rhañ jino bhaveḥ // 90
tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan
jagad dharmamayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 91
evaṃ te sarvadā bhadraṃ vaṃśa[119a]sthitir bhaved api /

iha dharmayaśaḥ saukhyaṃ paratra saugatālayam // 92
kiṃ cāpy etāḥ priyāḥ kāntā bhāryās te dharmacārikāḥ /
suśīlābharaṇā bhadrāḥ kalpavidyāvicakṣaṇāḥ // 93
kathaṃ tvayā parityājyā satyadharmānucārikāḥ /
yuvatyaḥ pramadā rāmāḥ sudakṣiṇāḥ priyaṃvadāḥ // 94
yadā tvayā parityaktās tadātmavirahārditāḥ /
sarvāḥ kleśāgnisaṃtaptāś careyuḥ kelisaṃratāḥ // 95
tvannāmānusmṛtim ādhāya kāścid yāyur yamālayam /
dhyātvā tvāṃ eva paśyantyas tiṣṭheyur niścalendriyāḥ // 96
kāścid bhrameyur unmattā iva rāgābhimohitāḥ /
kāścid viṣādyapathyāni bhuktvā vibhrāntamānasāḥ /
smṛtvā te prāṇam utsṛjya gaccheyur narakeṣv api // 97
kāścit pāśair gale baddhā prahatvā cātmani svayam /
patitvā vā jale gāḍhe vahnau vāpi mahojjvale // 98
prapātād vā patitvāpi kāścid annaṃ payo 'pi ca /
abhuktvaiva tava smṛtvā tyajeyuḥ prāṇam ātmanā // 99
tadā kiṃ te mahāsattva pravrajya vratasādhanaiḥ /
saṃbodhim api saṃprāpya rahite prācared vṛṣam // 100
strīhatyā kaluṣātmā tvaṃ kathaṃ bodhiṃ samāpnuyāḥ /
saṃbuddho 'rhan viśuddhātmā dharmarājā hi nirmalaḥ // 101
mātā te gautamī cāpi parityaktā tvayā yadā /
tadā te snehaduḥkhāgnitāpitā vihatāśayā // 102
tava rūpam anusmṛtvā bhadraśrīsadguṇānvitam /
dhyātvā nāma samuccārya tyajet prāṇam adhīritā // 103
sarve lokāḥ prajāś cāpi tvayi yāte 'vibodhitāḥ
kleśamadābhimānāndhāś careyur duriteṣv api // 104
tadaitatpāpasaṃcārāt pravartet pracalaḥ kaliḥ /
tadā sarve durārādhyā daśākuśalacāriṇaḥ // 105
duṣṭāśayā durācārāḥ pāpānuraktamānasāḥ /
unmattā iva durdāntāś cariṣyanti yathecchayā // 106
arājakam idaṃ rājyaṃ dṛṣṭvā sarve 'pi te dviṣaḥ /
parākramya prajā hatvā grahīṣyanti yathecchayā // 107
tadā ko 'tra prajā rājā saṃpālayed yathā bhavān /
kalipracāraṇotpātaṃ durbhikṣaṃ vā cared api // 108
tataḥ sarve 'pi lokās te durvṛttikliṣṭamānasāḥ [119b] /

satyadharmaṃ pratikṣipya bhaveyuḥ kāmacāriṇaḥ // 109
tatas te duritā raktā dāruṇapātakeṣv api /
pracaranto nirviśaṅkaṃ yāsyanti narake dhruvam // 110
tatra te kṣutpipāsāgni*dāhitāḥ karmabhoginaḥ /
tīvraduḥkhāhatātmāno bhrameyuḥ sarvanārake // 111
svasaṃtānān nipātyaivaṃ nārake nirdayāśayaḥ
parān eva samuddhṛtya kiṃ tvaṃ dharmam avāpnuyāḥ // 112
bodhim api samāsādya kṛtvāpi kiṃ jagaddhitam /
saddharmaśrīyaśaḥsaukhyaṃ labdhvāpi na praśobhitaḥ // 113
iti vijñāya rājendraprajāḥ svaśaraṇāśritāḥ /
svātmajā iva saṃpaśyan saṃpālayitum arhasi // 114
yāvad yuvā samāśritya rājyāśrame prajāhite /
dattvārthibhyo yathākāmaṃ bodhicaryāṃ caran vasa // 115
yadā vṛddho viraktātmā kṛtvātmajaṃ narādhipaṃ /
pravrajya saṃvaraṃ dhṛtvācara saddharmam ādiśan // 116
evaṃ te sarvadā bhadraṃ nirutpātaṃ bhaved api /
pravrajya saṃvaraṃ dhṛtvā saṃbodhim api prāpsyasi // 117
tato 'rhaṃs trijagacchāstā saddharmaṃ saṃprakāśayan /
jagad bhadramayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 118
etat taduktam ākarṇya bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
prabodhitaḥ samālokya tasthau dhyānasamāhitaḥ // 119
tataḥ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvo mahāmatiḥ /
udāyinaṃ sahāyaṃ taṃ sampaśyann evam abravīt // 120
mano na rocate kāmaṃ jarārogakṣayāśrayam /
yuṣmākaṃ *vacane mohaṃ pure gantuṃ samutsahe // 121
ity uktvā sa mahāsattvaḥ samutthāya tataś caran /
aśvam āruhya saṃpaśyan puramārgam upācarat // 122 **≈ Bc 5.22**
tatra sarve sahāyās te dṛṣṭvā taṃ sahasā pathi /
sametyābhyanugacchanto mahotsāhaiḥ samācaran // 123
nṛpātmajaṃ tam āyātaṃ śrutvā draṣṭum upāgatāḥ /
sarve paurā narā nāryaḥ samapaśyan pramoditāḥ // 124
taṃ samīkṣya varā kanyā natvāhaivaṃ kṛtāñjaliḥ /
sabhāgyā nirvṛtā sā strī yasyā īdṛg varaḥ patiḥ // 125 **≈ Bc 5.24**
nirvṛteti ravaṃ śrutvā sa sudhīro 'bhinoditaḥ /
nirvṛtisukhasaṃprāptyai matiṃ dhṛtvālayaṃ yayau /126 **≈ Bc 5.25**

tatra taṃ janakaṃ dṛṣṭvā mantri[120a]janaiḥ saha sthitam /
natvā pādābjayoḥ paśyann upāśrayat prasannadhīḥ // 127 ≈ **Bc 5.27**
tato rājā niśamyaitat sarvavṛttaṃ janoditam /
matvātmajamanobhāvaṃ sampaśyann evam abravīt // 128
tāta vatsa sudhīr vijña kiṃ te mano *'bhilāṣati /
vadasva tat puro me 'tra pradāsyāmi yad īpsitam // 129
iti pitrā samādiṣṭaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /
janakaṃ taṃ samālokya sāñjalir evam abravīt // 130
mṛtyuṃ hi jagatāṃ dṛṣṭvā sarvatra bhavacāriṇām /
tat pravrajyāvratam ādhāya nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 131 ≈ **Bc 5.28**
tadanujñāṃ pradattvā me dharmaśrīsadyaśo'nvitaḥ /
sarvalokahitaṃ kurvan sukham bhuktvā samācara // 132
yan mayā sādhitaṃ puṇyaṃ tatṣaṣṭhāṃśaṃ bhavāṃl labhet /
etatpuṇyavipākena bodhicittaṃ samāptavān // 133
bodhisattvo mahābhijño bhadraśrīsadguṇāśrayaḥ /
sarvasattvahitādhānaṃ bodhicaryāvrataṃ caret // 134
tataḥ saṃbodhisaṃbhāraṃ pūrayitvā yathākramam /
daśabhūmīśvaro nātho sarvadharmādhipo bhavet // 135
tato māragaṇāñ jitvā pariśuddhatrimaṇḍalaḥ /
arhan saṃbodhim āsādya sambuddhaḥ sugato bhavet // 136
tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
jagad bhadramayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāt // 137
iti matvā bhavān deva saddharmaṃ yadi vāñchati /
śraddhānugrahacittena tadanujñāṃ dadātu me // 138
iti putroditaṃ śrutvā janakaḥ sa nṛpādhipaḥ /
tam ātmajaṃ samālokya sāñjalir evam abravīt // 139
pratisaṃhara tāta buddhim etāṃ
    na hi kālas tava dharmasaṃśrayasya
vayasi prathame matau calāyāṃ
    bahudoṣāṃ **pravahanti** dharmacaryām // 140 = Bc 5.30
viṣayeṣu kutūhalendriyasya
    vratakhedeṣv asamarthaniścayasya /
taruṇasya manaś calaty araṇyād
    anabhijñasya viśeṣato viveke // 141 = Bc 5.31
mama tu priyadharma dharmakālas

tvayi lakṣmīm avasṛjya lakṣma[120b]bhūte
sthiravikrama vikrameṇa dharmas
tava hitvā tu guruṃ bhaved adharmaḥ // 142 = Bc 5.32
tad imaṃ vyavasāyam utsṛja tvaṃ
bhava tāvan nirato gṛhasthadharme /
puruṣasya vayaḥsukhāni bhuktvā
ramaṇīyo hi tapovanapraveśaḥ // 143 = Bc 5.33
iti vākyam **asau** niśamya rājñaḥ
kalaviṅkasvara uttaraṃ babhāṣe /
yadi me pratibhūś caturṣu rājan
bhavasi tvaṃ na tapovanaṃ śrayiṣye // 144 = Bc 5.34
na bhaven maraṇāya jīvitaṃ me
viharet svāsthyam idaṃ ca me na rogaḥ /
na ca yauvanam ākṣipej jarā me
na ca saṃpattim imāṃ hared vipattiḥ // 145 = Bc 5.35
iti durlabham **abhiyācitāraṃ**
tanayaṃ **vīkṣya jagāda** śākyarājaḥ /
tyaja buddhim imām atipravṛttām
avahāsyo 'timanorath**aḥ kramaś** ca // 146 = Bc 5.36
atha merugurur guruṃ babhāṣe
yadi nāsti krama eṣa nāsmi vāryaḥ /
śaraṇāj jvalanena dahyamānān
na hi **niścikramituṃ** kṣamaṃ grahītum // 147 = Bc 5.37
jagataś ca **yathā** dhruvo viyogo
na tu dharmāya varaṃ svayaṃviyogaḥ /
avaśaṃ nanu viprayojayen mām
akṛtasvārtham atṛptam eva mṛtyuḥ // 148 = Bc 5.38
iti mṛtyuṃ bhave dṛṣṭvā bhavasaṃratiniḥspṛhaḥ /
pravrajya bodhim āsādya nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 149
iti tāta kṛpā te 'sti mayi sambodhisādhini /
anumodya prasannātmā tadanujñāṃ pradehi me // 150
iti putrārthitaṃ śrutvā janakaḥ sa nṛpādhipaḥ /
snehaduḥkhāgnitaptātmā galadaśrumukho 'vadat // 151
kasya mṛtyur bhave nāsti kaś ca rogair na pīḍyate /
ko na jīrṇo bhavet kasya sampattiḥ sarvadā sthirā // 152

avaśyaṃ bhāvino bhāvā bhavanti bhavacāriṇāṃ /
iti niḥśaṅkito vīraḥ kṛtvā dharmaṃ sukhaṃ caret /
kiṃ tadanyat mahaddharmam icchan saṃsāraniḥspṛhaḥ // 153
pravrajya durgame 'raṇye duṣṭajantusamākule /
vyādhataskarasaṃcāre daṃśamaśakasaṃkule /
śītavātātapākrāntaśarīras taptum icchasi // 154
kiṃ cāpi [121a] te mahad duḥkhaṃ bhayaṃ cāpi kuto vada /
yena tvaṃ rājyam utsṛjya pravrajituṃ samicchasi // 155
eko 'pi te ripur nāsti sarve nṛpā vaśe tava /
tat kasmāt te bhayaṃ tāta yad rājyaṃ tyaktum icchasi // 156
saptaratnāni te santi bhadraśrīsadguṇāny api /
tat kuto jāyate duḥkhaṃ vada sarvanṛpādhipa // 157
iti pitroditaṃ śrutvā bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
janakaṃ mantrilokāṃś ca sampaśyann evam abravīt // 158
śṛṇu tāta yadarthe 'haṃ saṃtrasto bhavaniḥspṛhaḥ /
vihāya viṣayān rājyaṃ pravrajituṃ samutsahe // 159
santi me vidviṣo vīrā mahānto 'hitakāriṇaḥ /
ye sadevāsurāṃl lokān pramathnanti bhavāśritān // 160
tebhyas trilokaduṣṭebhyo bhayāni vividhāny ahaṃ /
dṛṣṭvā bhavāśrayaṃ tyaktvā nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 161
yac caitair aribhir duṣṭaiḥ prakṣipto narakeṣv api /
nānāvidhāni duḥkhāni bhuñjamāno *'bhramaṃ purā // 162
tāni sarvāṇi duḥkhāni smṛtvādhunā muhur muhuḥ /
saṃtrastas tadvimuktyarthaṃ sambodhiṃ prāptum utsahe // 163
sarve lokā api kleśaiḥ parikliṣṭāśayā bhave /
bhramanto duḥkhabhuñjānāḥ patitā narakeṣv api // 164
tad ete ripavo duṣṭā mahānto 'hitakāriṇaḥ /
pramathnanti jagat sarvaṃ narake pātayanty api // 165
etān duṣṭāñ jagacchatrūn sarve lokādhipā api /
nirjetum ṛṣayaś cāpi na śaknuvanti sarvathā // 166
harīndrabrahmarudrādyaḥ sarve lokādhipā api /
kleśābhivaśagā mattāḥ pracaranti yathecchayā // 167
sarve lokā api kleśavaśasthitāḥ pramattitāḥ /
yathecchākāmabhuñjānāḥ pracaranty aśubhāśritāḥ // 168
ete hi prabalā duṣṭā jagadunmattakāriṇāḥ /

nirjetuṃ naiva kenāpi śakyante bhavacāriṇā // 169
buddhā eva mahābhijñā bhavacaryāvinirgatāḥ /
etān duṣṭān vinirjitvā saṃprāptā bodhim utta[121b]mām // 170
lokānām api nirjitya hy etān duṣṭāñ jagadarīn /
saddharmaṃ samupādiśya prakurvantaḥ subhadrakam // 171
tato dharmamayaṃ kṛtvā sarvatra bhuvaneṣv api /
samāpya saugataṃ kāryaṃ sunirvṛtiṃ samāgatāḥ // 172
aham apy evam ālokya kartuṃ dharmamayaṃ jagat /
pravrajyāsaṃvaraṃ dhṛtvā samādhiṃ prāptum utsahe // 173
tad etān prabalāñ chatrūn hantuṃ saṃnirjitya yatnataḥ /
rājyāśramaṃ parityajya pravrajituṃ samutsahe // 174
pravrajyāsaṃvaraṃ dhṛtvā nihatyaitāñ jagaddviṣaḥ /
arhan saṃbodhim āsādya sambuddhapadam āpnuyām /175
tataḥ sarvatra lokānāṃ nirjityaitān mahaddviṣaḥ /
saddharmaṃ samupādiśya kariṣyāmi sumaṅgalam // 176
jagad dharmamayaṃ kṛtvā saddharmaṃ saṃprakāśayan /
samāpya saugataṃ kāryaṃ sunirvṛtiṃ samāpnuyām // 177
etaddhetor ahaṃ tāta pravrajituṃ samutsahe /
tadanujñāṃ bhavān mahyaṃ śraddhayā dātum arhati // 178
iti putroditaṃ śrutvā janakaḥ sa mahīpatiḥ /
galadaśrumukhaḥ paśyann ātmajam evam abravīt // 179
yady evaṃ te samicchā hi tathāpi me vacaḥ śṛṇu /
yāvad yuvā gṛhe dharmaṃ saṃcarasva prajā avan // 180
janayitvātmajaṃ rājye pratiṣṭhāpya vinīya ca /
yadā vṛddho jarākrāntaḥ pravrajasva jagaddhite // 181
evaṃ cet tvaṃ mahaddharmaṃ bhadraśrīkīrtisaṃyutam /
saukhyaṃ saṃbodhim āsādya saṃbuddhapadam āpnuyāḥ // 182
tathā dharmam upādiśya kṛtvā dharmamayaṃ jagat /
samāpya saugataṃ kāryaṃ sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 183
iti matvā mahābhijña tāvad rājyāśrame vasan /
sarvasattvahitaṃ kṛtvā saṃcarasva śubhe raman // 184
yadi snehaṃ mayi tyaktvā rājyaṃ jñātīṃś ca bāndhavān /
nirapekṣaḥ svajīve 'pi pravrajase jagaddhite // 185
tadā tvatsnehaduḥkhāgnipratapto 'haṃ pramohitaḥ /
sarājyaṃ deham utsṛjya vrajeyaṃ maraṇaṃ dhruvam // 186

gautamī sāpi mātā ca snehaduḥkhāgnitā[122a]pitā /
tvām eva manasā smṛtvā yāyād yamālayaṃ dhruvam // 187
yaśodharāpi te bhāryā snehaduḥkhāgnitāpitā /
tvadguṇānusmṛtiṃ dhṛtvā tanuṃ tyaktvā yame vrajet // 188
anyā api ca sarvās tāḥ priyās te virahārditāḥ /
kleśāgnitaptaduḥkhārtā yāyur nūnaṃ yamālayam // 189
arthino 'pi prajālokā api sarve nirāśitāḥ /
tvadguṇānusmṛtiṃ dhṛtvā bhrameyur vigatoddhavāḥ // 190
etatpātakajātāni duḥkhāni te bhavāntare /
bhoktavyāni na naśyeyur gaccheyuḥ praśamaṃ katham // 191
tathā kiṃ pravrajitvāpi kṛtvāpi ca jagaddhitam /
kiṃ bodhim adhigamyāpi kevalaṃ duḥkhasādhanam // 192
iti vijñāya vijña tvaṃ tāvan mā pravrajyotsukaḥ /
yadā vṛddhas tadā gatvā pravrajyāsaṃvaraṃ caran // 193
jitvā kleśān mahāśatrūn bodhiṃ prāpya jagaddhite /
saddharmaṃ samupādiśya saṃcarasva samantataḥ /194
tathā tvaṃ pariśuddhātmā sarvadharmādhipo jinaḥ /
jagad dharmamayaṃ kṛtvā *sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 195
vayam api tathā sarve tvatsaddharmaviśodhitāḥ /
sambodhijñānam āsādya yāsyāmahe sunirvṛtim // 196
iti matvā mahāsattva kṛpāsmāsu tavāsti cet /
tāvad rājyāśrame sthitvā bodhicaryāvrataṃ cara // 197
iti pitroditaṃ śrutvā bodhisattvo mahāmatiḥ /
dhyātvā kṣaṇaṃ samālokya janakam evam abravīt // 198
satyam evaṃ samādiṣṭaṃ hitārthaṃ me tvayā pitaḥ /
śṛṇu me 'pi hitaṃ vākyam abhiprāyaṃ yad ucyate // 199
mṛtyur hi balavāṃs tāta kasya vaśe samāsthitaḥ /
aviśvāsyo jagalloke sarvahantātinirdayaḥ // 200
sarveṣām api jantūnāṃ sarvataḥ samupāśritaḥ /
kenāpi śakyate jetuṃ naiva hi tribhaveṣv api // 201
akasmāt sa mahāvīryaḥ prāgatya samupāśritaḥ /
puratas te gṛhītvā māṃ hariṣyati yamājñayā // 202
tadā kiṃ te kariṣyāmi tvaṃ mayi kiṃ kariṣyasi /
[122b] jñātibandhviṣṭabhṛtyāś ca kiṃ kariṣyanti te mama // 203
vṛddho jīrṇendriyo rogī bhogye 'pi viratādaraḥ /

tadā jagaddhitaṃ kartuṃ prācareyam ahaṃ katham // 204
vipattayo hi sarveṣāṃ bhoktavyā api daivajāḥ /
tadāhaṃ kiṃ kariṣyāmi yadā jāto vipan mama // 205
kadācit kupitā bhūpā sarve 'pi me virodhitāḥ /
hatvā jīvaṃ hariṣyanti sarājyāḥ sarvasampadaḥ // 206
bandhane vā pratiṣṭhāpya māṃ sajñātīṣṭabāndhavam /
cirān niṣkāsayitvā vā prerayiṣyanti jaṅgale // 207
tadāhaṃ kiṃ kariṣyāmi nighnito durbalendriyaḥ /
svātmānam api saṃdhātuṃ na śaknuyām adhīritaḥ // 208
kathaṃ cittaṃ samādhāya pravrajya saṃvaraṃ caran /
duṣṭān māragaṇāñ jitvā sambodhiṃ samavāpnuyām // 209
vinā saṃbodhijñānena saddharmaṃ ka upādiśet /
vinā dharmopadeśena kathaṃ kuryāj jagaddhitam // 210
iti matvā mahārāja bodhiṃ prāptuṃ jagaddhite /
māracaryāṃ samutsṛjya pravrajituṃ samutsahe // 211
yadi sneho 'sti te tāta mayi saddharmasādhini /
tadanujñāṃ pradattvā me yaśaḥśrīdharmam āpnuhi // 212
iti putroditaṃ śrutvā pitā prabodhito 'pi saḥ /
galadaśrumukhaḥ paśyaṃs tasthau snehaviṣārditaḥ // 213
tataḥ sarvārthasiddho 'sau bodhisattvaḥ samutthitaḥ /
gatvā svālayam āśritya tasthau dhyānasamāhitaḥ // 214
so 'pi śuddhodano rājā mantribhṛtyajanānvitaḥ /
gatvā svālayam āśrītya tasthau tad eva cintayan // 215
iti ***tasya** {**or:** mama} purākṛtyaṃ sāṃprataṃ tat mayocyate /
tvam api ca mahāsattva śrutvaitad anumodatu // 216
ye 'pīdaṃ śraddhayā śrutvā pravrajyāgamanārthanam /
anumodanti te sarve bhaveyuḥ śrīguṇāśrayāḥ // 217
iti śāstrā samākhyātaṃ niśamya sa mahāmatiḥ /
tathety abhyanumoditvā prābhyanandat sasabhyakaḥ // 218

// iti [123a] pravrajyābhigamanaprārthanābhisaṃbodhano nāmāṣṭādaśo 'dhyāyaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 18

1a mahābhijña] corr.: mahābhijñaḥ A B.

1b upagupto] A(post corr. marg.) A: śākyasiṃho A(ante corr.).

1c aśokaṃ] A(post corr.) B: ānandaṃ A(ante corr.) ‖ patiṃ] A(post corr.) B: yatiṃ A(ante corr.).

1d samāmantryaivam] corr.: samāmantryevam A: samāmanty evam B.

6c śaṣpa°] A(post corr.) B(post corr.): śaśpa A B.

7a tatrānekān] A: tatrānekon B.

7b jantūṃs tān āturān] A(post corr.): jantūṃs tām ātun A(ante corr.): jantusthām āturān B.

10c sarvāṃs] corr.: sarvās A B.

12a prabhava°] corr.: prabhave A B.

12b niścalāśayaḥ] A(post corr. marg.) B: niścalāyaḥ A(ante corr.).

13a prāpya] A: prāpye B.

15b vinindeya] A: viniṃdāyāyu A(marg.; seconda manu!): vigniṃdeya B.

23a vasaṃś] A(post corr.): nivasaṃś A(ante corr.) B.

23d vicaro] A(ante corr.): vicarau A(post corr.): vicarai B.

31 note] pāda ab are written in the margin of A (propria manu!)

34b nārake] corr.: nārakeḥ A B.

34d sarvadā bhave] sic A B.

41 note] pāda cd are written in the margin of A, but are missing in B.

41d °ndriy*āśrayāḥ] ex coni (cf. 59b): °ndriyāśayāḥ A.

42a atraivaṃ] corr.: atrevaṃ A: etraivaṃ B.

42b °mānasaḥ] A(post corr. marg.) B: °mānaḥ A(ante corr.).

45d ghoṣataṃ] A: pauṣataṃ B.

47a vinirjitya A(post corr. marg.) B: virjitya A(ante corr.).

52a bodhidrume] A: bodhidrumataṃ B.

52d saṃbuddhapadam] A: saṃbodhipadam B.

55b gacchāni] A: gacchāmi B.

59d sambuddhapadam] A(post corr. marg.): sambuddham A(ante corr.).

85c *putras] ex coni: putra A B.

100b mahāsattva] ≒ mahāsatva B: mahāsatve A.

100d prācared vṛṣaṃ] A: prācared dhṛṣaṃ B.

104b yāte 'vibodhitāḥ] corr.: yāte vibodhitāḥ A: yātavibodhitāḥ B.

106 note] pāda ab are written in the margin of A (propria manu!).

106a mānasāḥ] corr.: mānasaḥ A.

107 note] verses 107 and 108 are written in the margin of A (propria manu!).

111a tatra te] A(post corr. marg.) B: tatra A(ante corr.).

111b *dāhitāḥ] ex coni: dahitāḥ A B

112 note] two verses 112 and 113 are written in the margin of A (propria manu!).

119c prabodhitaḥ] corr.: prabodhitas A B.

129b *'bhilāṣati] ex coni (m.c. of 'bhilaṣati?): bhilāṣatā A B.

131d nirvṛtiṃ] B: nivṛtiṃ A.

138c cittena] A(post corr. marg.): citte A(ante corr.): cittera B.

140d bahudoṣāṃ pravahanti] corr.: bahudoṣān pravahanti] A(post corr. marg.): bahudoṣāṃ vahanti A(ante corr.): bahudoṣā pravahanti B. (Cf. Bc 5.30 bahudoṣāṃ hi vahanti) || °caryām] corr.: °caryā A B. (Cf. Bc 5.30 °caryām)

140 note] the stanzas 140 to 148 are identical to Bc 5.30 to 5.38.

144a vākyam asau niśamya] A(post corr. marg.) B: vākya[śa]mya A(ante corr.). (Cf. Bc 5.34 vākyam idaṃ niśamya)

146a abhiyācitāraṃ] A: bhiyācitāraṃ B. (Cf. Bc 5.36: artham ūcivāṃsaṃ)

146b vīkṣya jagāda] A B. (Cf. Bc 5.36 vākyam uvāca)

146d °rathaḥ kramaś ca] A B. (Bc 5.36 °ratho 'kramaś ca)

147c jvalanena] B: jvālanena A. (Cf. Bc 5.37 jvalanena)

147d niścakramituṃ] A: niścakramitraṃ B. (Cf. Bc 5.37 niścikramiṣuḥ)

148a yathā] A B (Cf. Bc 5.38 yadā)

148b na tu] A B. (Cf. Bc 5.38 nanu) || dharmāya] A(post corr. marg.): dharmā A(ante corr.) B.

154e °śarīras] corr.: °śarīlas A B.

161a trilokaduṣṭebhyo] corr.: trilokaduṣṭebhye A B.

162d *'bhramaṃ] ex coni: 'bhramat A B.

170c vinirjitvā] B: vinijitvā A.

174cd parityajya pra°] A(post corr. marg.) B: paritya pra° A(ante corr.).

176d sumaṅgalaṃ] A: sumagālaṃ B.

187ab mātā ca sneha°] A(post corr. marg.) B: mātā sneha° A(ante corr.).

189a sarvās tāḥ] corr.: sarvās te A(ante corr.): sarvās teḥ A(post corr.) B.

195d *sunirvṛtiṃ] ex coni: sunirvṛtaṃ A.

196b tvatsaddharma°] A(post corr. marg.): tvaddharma° A(ante corr.).

199b hitārthaṃ me tvayā] A(post corr. marg.): hitārthaṃ tvayā A(ante corr.): hitārthaṃ svayā B.

200a balavāṃs tāta] corr.: balavān tāta A B.

203cd °bhṛtyāś ca kiṃ] A(post corr. marg.) B: bhṛ kiṃ A(ante corr.).

205a vipattayo] A(post corr. marg.) B: vipatta[m]o A(ante corr.).

210c dharmopadeśena] A(post corr. int. lin.) B: dharmopadena A(ante corr.).

216a *tasya] ex coni: .... A(ante corr.): mama A(post corr.).

Colophon: iti pravrajyā°] A(ante corr.): iti śrīlalitavistare pravrajyā° A(post corr. marg.) B.

3.2　TJAM 第18章の和訳（全訳）

『出家に進み行くことを請い願い、理解せしめる』という第18章

かの阿羅漢たる出家修行者たちの王、大通慧者ウパグプタは (upagupto) {**or:** 釈迦族の獅子は (śākyasiṃho)}、かの王アショーカを (aśokaṃ taṃ patiṃ) {**or:** かの出家アーナンダを (ānandaṃ taṃ yatiṃ)} 見つめながら呼びかけて、次のように語りました。— [1]

「大士よ、かのサルヴァールタシッダの、悟りのための誓行の達成を私は語りましょう。集中してそれをお聞きなさい。[2]

それはかくの如くです。—　大士（菩薩）は熱心に求められているにもかかわらず、性愛に愛着した美しい女たちと共に楽しむことを望みませんでした。[3]

感官の対象に愛著しない彼は、春にもかかわらず、森のアーシュラマ（隠棲地）で孤独に樹の根元に坐って瞑想しながら居ることを欲しました。[4]

その後、好きな仲間・親友・朋友たちを伴って、馬のカンタカに乗り、景色を見んとして楽しげに森を遊歴しました。[5]

その道で、若草やダルバ草や新しい芽葉が生じたすべての大地が至るところ耕されているのを見ながら、彼はゆっくりと逍遥しました。[6]

無数の蛆虫や昆虫、それらの苦しむ生き物たちを道で見て、憐れみの思いをいだく彼は、まるで自分の親族が苦しんでいるかのように悲しみました。[7]

また身体が風や熱い日差しに打たれて耕作している人々、重荷を運んでいる駄獣たちを眺めて、彼はひどく同情に打たれて、動揺しました。[8]

その後彼は馬から降りて、ゆっくり地面を歩き回りました。「あらゆる者には老いと病と死があるのだ」と思考しながら。[9]

誰もいない場所で過ごしたいと願って、すべてのその随行した者たちを遠ざけ、あたりを見渡しながら、自ら一隅に行き、[10]　木蔭に身を寄せ、草の座に坐って、あらゆる仏を憶念しながら、瞑想に集中して過ごしました。[11]

彼は生類の誕生と死を思惟しながら、心を不動にして、無漏なる、初禅の善き安楽を獲得しました。[12]

その後、孤独な精神統一から生じる、喜び（喜）と安楽（楽）を得てから、あらゆる生類の行処（あり方）を観察し、自ら次の様に深思しました。[13]

「これらの人々は老病死の法から解放されておらず、［若さの］驕りによって盲目となって、死んだり病気になったり老いている他人を軽侮している。[14]

自分自身もそのようなものである私が、もし同様に他人を軽侮するなら、そのことは［真実を］認識する私にとってふさわしいことでなく、適切なことではない。」[15]

このように生類の中の老いた者・病んだ者・死んだ者たちを観察した時、彼から、力・若さ・生命についての自己に関する驕慢が消え去りました。[16]

彼は笑うことも、悲しみに沈むこともなく、疑いをもつに至ることもなく、怠惰や眠気に陥ることもなく、愛著も軽蔑もしませんでした。[17]

このようにして、かの善慧者（菩薩）の精神は、塵（煩悩）を離れて清らかになりました。すると他の人には見えない一人の比丘が近づいてきました。[18]

サルヴァールタシッダはその人を見て丁重に尋ねました。「あなたはどなたですか。何処から、何のためにいらっしゃいましたか。どうかそれを私におっしゃってください。」[19]

そのように彼が尋ねるのを聞いて、出家修行者たちの最勝者（雄牛）のようなその比丘は前に立ち、かの王子をじっと見て、次の様に答えました。[20]

「私は出家した者、比丘・沙門であり、善逝に属する（仏教の）出家修行者です。老病死を怖れ、解脱せんとして、悟りのために行をなす者です。[21]

有滅の法をもつこの世界において仏の位を私は求めています。身内にも他人にも平等な善き心において無煩悩となり、輪廻的生存を欲しません。[22]

王子よ、［この私は］祠や寺院、樹の根元、山や森の中に住みながら、所有物を捨て、ヨーガ行者として、食物を乞食しつつ遊行する者なのです。」[23]

偉大な通智者たる彼はそう言うと、鳥の如く上に昇り、燃え輝く火のように虚空を通って神々の住まいに去ってゆきました。[24]

その人がそのように空へ去ったのを見て、かの王子は驚愕し、その［行者の］誓戒を得るために出家することを欲しました。[25]

その後、かの賢き、清浄な心をもち、感官を抑制した菩薩は［都に］引き返すと、其処の園林において瞑想しながら、心集中して過ごしました。[26]

其処で彼ら友人たちは皆、彼が樹の根元に坐っているのを見ると、ただちに近づいてとり囲み、近侍しました。[27]

彼らが皆、近侍するのを見て、欲望の行為を嫌悪する心をもつかの王子は溜息をついて、次の様に語りました。[28]

「ああ、欲望をもつ者たちは、生老病死を見てもなお、自己の欲するがままに欲望の享受を味わい、怖れなく楽しんでいます。[29]

これらの人のすべては、老い、病気になり、損なわれた感官を有し、死に達しては、更にまた輪廻的生存の道において再生を得ているのです。[30]

自分が欲する行いをし続ける者たち、成功と快楽を達成した者たちは、自らの運命の果の味わうべきものを味わいながら、輪廻的生存をずっと彷徨い続けることでしょう。[31]

天界に行ったなら、神々として、不死の甘露を味わいながら歓び、性愛の享楽に愛著し、歓喜し、行動するでしょう。[32]

その後、時が来て、自分の運命に歓んでいた者たちは［天界から］死没して、或る者たちは死すべき生き物の世界に、またアスラ族に生まれます。[33]

或る者たちは畜生に、或る者たちは餓鬼や地獄において、自分の業を味わいながら、輪廻的生存の中を常に彷徨います。[34]

脱出の路を見つけられないまま、盲人の如く森の中を彷徨う者たちは、様々な苦を味わいながら、迷乱に陥ります。[35]

煩悩の苦しみに焼かれながら、寄る辺とすべきものをもたず、導師をもたず、正法ではない教えに執着し、そのようにして輪廻的生存をずっと彷徨い続けるでしょう。[36]

しかし或る時、善逝たち（諸仏）を見て、喜心をもって礼拝し稽首するなら、その時彼らは心が無垢となり、法を望む心を得ることでしょう。[37]

その後、彼らは正法を欲して、最高の法を探し求めるでしょう。彼らは善逝（仏）の法を聞いて、菩提心を得ることでしょう。[38]

その後、彼らは感官を制御した菩薩・大士となり、出家の禁戒を堅持しつつ、生類を利益するため活動するでしょう。[39]

その後、彼らは次第に菩提のための資糧を満たしながら、阿羅漢の位に達し、マーラ（魔）の群に勝利し、[40]　三種の菩提に達して、仏の住まいを得ることでしょう。煩悩が消え、浄らかな心となり、清浄な感官と身体を有するでしょう。[41]

そう私はここで考え、このように瞑想しながら、悟りに心を向けて、三宝への憶念を堅持しながら居ることを私は常に欲しているのです。[42]

この私の言葉を聞いて、朋友である君たちすべてが、幸福な美の輝きある善き徳性を、安らかな幸せを、与えたり獲得したりすることをもし欲するならば、[43]　それなら私の言葉を聞いて帰って、それぞれの住まいに居て、常に乞う者たちに布施を与え、心集中して行為しなさい。（布施波羅蜜）[44]

清浄なる戒律の行いをなし、悟りに心を定め、三宝への奉事をなして、高く鳴り響く誓戒を行いなさい。（戒波羅蜜）[45]

その後、忍辱の誓戒を堅持して、身内と他者と自分の益に努力し、悟りを成就する教えを堅持し、常に実践しなさい。（忍辱・精進波羅蜜）[46]

その後、煩悩を克服し、悪しきマーラの群にも勝ち、三昧に心を定め置き、禅定と禁戒を行いなさい。（禅定波羅蜜）[47]

その後、智慧（般若）の海を渡って、如意宝珠の如き最高の悟りの知に達して、仏の位をあなた方は得なさい。（智慧波羅蜜）[48]

このように衆生の益のため、仏の位を得ることをもし欲するなら、あなた方は皆がそれぞれの住まいに居て、菩提のための禁戒を行いなさい。[49]

私も世の生類に正法を明らかに説き示すため、悟りの知に達して、仏の位を得るでしょう。[50]

それ故今や私はガヤー・シールシャ（象頭山）という勝れた山に行き、甚だなしがたい苦行を行って、すべての苦行者を凌駕し、[51]　その後菩提樹のもとに行って、悪しきマーラの群に打ち勝ち、禅定をなして悟りに達し、仏の位を私は得ます。[52]

その後あらゆる生き物たちに正法を教示しながら、私は菩提への道に安立せしめ、生類に浄行を行わせます。[53]

このようにして諸世界の一切処において［生類を］法から成る者に変えて、仏のなすべき仕事を達成し、善き寂滅の至福（涅槃）を私は得るでしょう。[54]

そのために私は今ガヤー・シールシャ山へと行きたいのです。あなた方もそれぞれの住まいに戻り、菩提のための禁戒を行じて下さい。[55]

私が悟りを得たら、その時、正法を教示しながら、ここに戻って来て、あなた方に禁戒を教えましょう。[56]

あなた方は皆集まり来て、私の教えに依り、出家の禁戒を堅持しながら、生類の益のために行動してください。[57]

私と共に行動しながら、至る所で幸せをもたらし、正法を教えながら、生類に浄行を行わせてください。[58]

そうすれば、無垢の心をもち、清浄なる感官と身体をもつ阿羅漢として、あなた方は悟りに達し、仏の位を得るでしょう。[59]

そして法を明らかに示して、生類を法から成るものに変え、仏のなすべき仕事を完了して、あなた方は善き寂滅の至福を得ることでしょう。[60]

私によって説かれたこの真実を聞いて、あなた方は皆よく理解し、それぞれの住まいに居ながら、常に徳行をなさって下さい。」[61]

このように彼が語ったのを聞いて、プローヒタの息子たる婆羅門であるウダーインという名の者は、甚だ［決意が］堅固な彼を見つめながら、次のように語りました。[62]

「わが友よ、益することを私が言いますので、その親友の言葉を聞きなさい。私はあなたにとって最も親愛なる友人であり、親友、常に随行してきた友ですから。[63]

友たる者・親友が［あなたという］友を益するための言葉を言わないで、もし避けるべき行為をさせてしまうなら、その時その者はどうして親友・仲の良い友でありえましょうか。[64]

また親友・友が語る有益な言葉を聞かない者、聞いても尊重しない者であれば、その者もどうして親友・友でありえましょうか。[65]

そういうわけで、善慧者よ、私はあなたに有益な言葉を述べたいのです。もしあなたがわが親友・友であるなら、どうかそれをあなたはお聞きください。[66]

あらゆる王たちの王であるあなたの御父上は、年老いた時、所有財を捨てて、森のアーシュラマ（隠棲地）に身を落ち着けて、聖者の行をなさることでしょう。[67]

そしてあなたの御父上である国王にとっての唯一の実子・息子があなたですから、この場合、いかなる王・人民の守護者が臣民をずっと護ることができるでしょうか。[68]

［あなたは］息子が生まれるまでの間は、王位にある人生期に住しつつ、世俗法を受け容れて、自分の家の誓行を行いなさい。[69]

もしあなたに息子が生まれて、サンスカーラ（誕生の儀式など）によって清められ、あらゆる学問の徳性を知る者、よく訓育された者、副王となったなら、[70]　その時は、輝かしい徳性の蔵であるその者に作法通りに灌頂をなし、王座に立たせ、王・君主にしてやり、[71]　［その後］悟りの知を得るためにすべての所有財を捨てて、出家の禁戒を堅持し、生類を益するために行動しなさい。[72]

もしそのようにするなら、あなたには輝かしい真の悦楽を具えた幸があるでしょう。また勝利の輝かしい名声を伴った、家の法の持続もあります。[73]

そうすれば、あなたは世の生類に正法を説き明かして、生類を法から成るものに変えた後、善き寂滅の至福（涅槃）を得ることでしょう。[74]

［過去の］あらゆる菩薩・大士たる王たちも、自分の息子を自分の王座に立たせて、王国の王・君主にしてから、[75]　年老いて、王の地位にある人生期を捨てて、森のアーシュラマに住し、聖者の行の禁戒を堅持しながら、善き寂滅の至福に至ったのです。[76]

このように、過去や現在の仏たちすべても、聡明な息子を作り、王座に立たせ、あらゆる人々の世俗法の保持のためよく教導してから、[77]　年老いた時、家住の人生期を捨てて、森のアーシュラマに住し、出家の禁戒を堅持しつつ、生類の益のために行動しながら、[78]　［やがて］煩悩を滅し、心に汚れがなく、三輪清浄となり、悪しきマーラの群に打ち勝って、菩提を得て、牟尼の王になり、[79]　正法を教示して、生類を法から成るものに変えて、三昧に心を定め置き、彼らは寂滅の至福に至った、あるいは［今後］至ることでしょう。[80]

同様に、未来に仏となる者たちも皆、王権の保持のために息子をもうけて、灌頂し、王座に立たせて、教導し、[81]　年老いた時、王としての人生期を捨てて、森のアーシュラマに住し、出家の禁戒を堅持しながら、三昧に心を定め置き、[82]　悪しきマーラの群に勝利して、煩悩を滅し、無垢の感官を有し、悟りの知に達して、仏となることでしょう。[83]

彼らもあらゆる場所で生類の益のため正法を教示し、生類を法から成るものに変えて、善き寂滅の至福に至ることでしょう。[84]

王子よ、輪廻の法の成就をこのように認識なさって、息子が出来るまでは王としての人生期に住し、[85]　あらゆる人々を益する目的をもって、世俗法を行わしめ、お妃に息子を産ませて、大事にお守り下さい。[86]

その後、少年たるその息子を徐々に教導して、あらゆる学問を学んでから、世俗［法］において行動させ、[87]　その後、副王に灌頂して、王座に立たせ、あらゆる法の支配者にしてやり、民衆の益のために活動させ、[88]　その後、ご自身が老いられた時、王位を捨てて、輪廻を厭い、出家の善き誓戒を堅持して、生類の益のため行動なさって下さい。[89]

そうすれば、清らかな心をもつあなたはマーラの群にすら打ち勝ち、三種菩提を達成して、一切智・阿羅漢・ジナとなることでしょう。[90]

その後、あらゆる場所で人々に正法を教示して、生類を法から成るものに変えてから、善き寂滅の至福を得ることでしょう。[91]

このようにしてあなたには常に幸があり、また家系の継続があるでしょう。この世で法の名声と快楽があり、あの世で仏の住まいがあります。[92]

更にまた、あなたのこれらの愛すべき美しい妻たちは法を行っている者たちです。よき戒徳を装飾品として、善良で、教令や学問に通達しています。[93]

どうしてあなたは真正の法に随行する女たちを捨てようとするのですか。愛らしく、礼儀正しく、柔和な話し方をする、美しく若い女たちです。[94]

もしあなたに捨てられたなら、彼女らは自分を失って苦しみ、皆煩悩の火に焼かれて、愛の戯れを楽しむ女として振舞うことでしょう。[95]

或る女たちはあなたの名前の憶念を持したまま、ヤマ（死王）の住まいに赴くでしょう。また瞑想して、あなただけを観ながら、感官を不動にして過ごすことでしょう。[96]

或る女たちは狂乱者のように彷徨い歩き、情欲に分別を失うでしょう。或る女たちは毒などの不健康なものを食べて心を狂わせ、あなたを憶念しながら命を捨てて、地獄にも堕ちることでしょう。[97]

或る女は紐で首をくくって自殺し、あるいは深い水に、あるいは大きな燃え盛る火に落ち、[98]　または崖から身投げし、或る女は食物も水も摂らないで、あなたを憶念しながら自ら命を捨てるでしょう。[99]

その時、大士よ、出家して諸誓戒の成就によって悟りにすら達したとしても、あなたがいない所で［女たちの誰が］徳行をなすでしょうか。[100]

女たちを破滅させて、汚れた心をもつあなたはどうして悟りを得られるでしょうか。なぜなら仏・阿羅漢は清らかな心をもつ者、法王は汚れなき者ですから。[101]

またあなたの母であるガウタミーが捨てられる時、彼女はあなたへの愛情の苦しみの火に焼かれ、苦悩する心をおもちになることでしょう。[102]

幸福な美の輝きある善き徳性を具えたあなたの姿を思い出しながら、沈思し、［あなたの］名前を叫びながら、心堅固でない女として、命を捨てるかもしれません。[103]

あなたが去った時、覚知を得ていないあらゆる人々や生き物たちは、煩悩・驕り・我執に盲目になって、罪深い行為すら行うでしょう。[104]

その時、その罪悪の行いによって広範囲の闘争が起こるでしょう。その時あらゆる者たちが宥めがたい不満をもって十不善［業道］を行うことでしょう。[105]

堕落した心性をもち、悪しき振舞いをなし、悪を好む心をもつ者たちは、狂酔者のように制御不能となり、好き勝手に行動するでしょう。[106]

この王国が無王になったのを見て、あらゆる彼ら敵［王］たちが進撃して、民を殺し、好きなように略奪するでしょう。[107]

その時、いかなる王があなたの如く民衆を護れるでしょうか。闘争の拡がりという悪い出来事を伴った飢饉も拡がることでしょう。[108]

その後犯罪に苦しめられた心で、すべての人々が真正の法を捨離して、欲望に従って行動する者となるでしょう。[109]

そして彼ら悪行者たちは、残忍な犯罪すら愛好し、怖れをもたずに行動し、疑いなく地獄に堕ちるでしょう。[110]

その［地獄］で彼ら、業を味わう者たちは飢えと渇きの火に焼かれ、激しい苦痛に打ちのめされた心で、すべての地獄を徘徊することでしょう。[111]

自分の一族の子たちがそのように地獄に堕ちる時に、無慈悲な心をもつあなたはどうして他人だけを救済しながら、法を得ることが出来るでしょうか。[112]

悟りにすら達しようと、いかなる生類の益をなそうとも、正法の光輝と名声と安楽を得ても、［その時あなたは］清らかな者ではないのです。[113]

このように認識して、［王子］ご自身を依り処としている王の国民たちを、ご自身から生まれた子供たちの如く見なして、お護り下さい。[114]

どうか若い間は、国民たちのために王の位にある人生期に住し、乞い求める者たちに好きなだけ布施を行い、菩提行をしながら、お暮らしになって下さい。[115]

年を取ったら、離欲の心で、息子を王にして後、出家して禁戒を堅持し、正法をお教えになりながら、行をなさって下さい。[116]

このようにすれば、あなたには常にめでたい幸せがあり、息災であられるでしょう。出家して禁戒を堅持し、悟りをも得られるでしょう。[117]

その後、阿羅漢・三界の師として正法を教示しつつ、生類を幸から成るものに変え、善き寂滅の至福を得ることでしょう。」[118]

［以上の］この彼が語った言葉を聞いて、善慧者であるかの菩薩はよく理解して、［彼を］見つめながら、深思に集中したままでいました。[119]

その後、大慧者である菩薩は随行者であるウダーインを見つめて、こう言いました。[120]

「［わが］心は愛欲（カーマ）を、老いと病によって滅びる身体を、あなた方の言葉にある愚かな迷いを、好みません。私は都城に戻ることを欲します。」[121]

こう言って、かの大士は立ち上がり、それから歩いて、馬に乗ると、都城の路を見ながら進み行きました。[122]

其処でかのすべての随行者たちもその彼を見て、ただちに路上に集まり、追いながら、大きな歓びの興奮を伴って進みました。[123]

かの王子がやって来ると聞いて、見るために集まって来たすべての都民、男や女たちは、見ながら歓喜しました。[124]

彼を眺めて、一人の勝れた娘が、お辞儀し、合掌して次のように言いました。「あのような勝れた方を夫としてもつ女は、幸運に恵まれた「至福のひと」（nirvṛtā）です」[125]

「至福のひと」という言葉を聞いて、とても賢い彼は励ましを受け取り、寂滅（nirvṛti）の幸せに達することに思いを定めながら、宮殿へと行きました。[126]

其処で大臣たちと共にいるかの父王を見て、彼はその蓮の両足を拝みつつ、澄んだ歓びの心でそばに寄りました。[127]

すると王は、部下が報告したそのすべての出来事を聞いて、息子の心の状態を考えながら、見つめて次の様に言いました。[128]

「親しい、いとしい子よ、とても賢い、よく分別する者よ。お前の心が欲するものは何か。それを此処で私の前で語りなさい、欲するそれを私は与えよう。」[129]

このように父が説かれたのを聞いて、かの菩薩はその父を見つめて、合掌し、次の様に述べました。[130]

「あらゆる所で輪廻的生存の中をさまよう生き物たちの死を見つめ、かの出家の誓戒を受持し、寂滅の至福を得たいと私は願っています。[131]

その御許可を私にお与え下さり、［お父上は］法の輝きと善き名声を具えた者として、あらゆる人々に益をなしつつ、幸せを味わい、活動なさって下さい。[132]

［出家した］私によって達成された福徳の、その六分の一をあなたが得ることでしょう。その福徳の異熟によって、菩提心が得られます。[133]

そして菩薩・大通慧者として、めでたい輝きのある善き徳性の依処として、あらゆる有情に益を生じさせる、菩提行の誓戒を実践なさってください。[134]

その後次第に悟りの資糧を満たし、どうか十地の王、守護主、一切法王となられて下さい。[135]

その後どうかマーラの群に勝利して、三輪清浄の者として悟りに達し、阿羅漢・仏・善逝となられますように。[136]

そののち、一切処で人々に正法を説き示しながら、生類を幸せから成るものに変えた後、善き寂滅の至福を得られますように。[137]

このようにお考えになられて、閣下、あなたがもし正法を願うのであれば、信と饒益のお心により、私に［出家の］許可をお与え下さい。」[138]

このように息子が語ったのを聞いて、父であるかの王中の王はその息子を見つめ、合掌してこの様に言いました。[139]

（以下、ネパールに伝承されていた馬鳴の Buddhacarita 第5章テクストからの逐字的な借用が TJAM 第140〜148詩節にある。これらの馬鳴の詩節については既に諸学者による訳があるので、TJAM でごく僅かな表現の違いがあっても、それらの詩節の翻訳をここでは省きたい。）

Buddhacarita 5.30 からの借用詩節	[140]
Buddhacarita 5.31 からの借用詩節	[141]
Buddhacarita 5.32 からの借用詩節	[142]
Buddhacarita 5.33 からの借用詩節	[143]
Buddhacarita 5.34 からの借用詩節	[144]
Buddhacarita 5.35 からの借用詩節	[145]
Buddhacarita 5.36 からの借用詩節	[146]
Buddhacarita 5.37 からの借用詩節	[147]
Buddhacarita 5.38 からの借用詩節	[148]

‥‥ **以上の詩節の翻訳は省略** ‥‥

「このように輪廻的生存における死を見て、輪廻的生存における快楽の欲望も失せて、出家して悟りに達し、寂滅の至福を得たいと私は願っています。[149]

そこでどうか父上よ、私に憐れみをお持ちになり、悟りに達する私を随喜なさって、仁慈のお心で、そのこと（出家）への許可を私にお与え下さい。」[150]

このように息子が求めたのを聞いて、父であるかの王中の王は、愛情の苦しみの火に心が焼かれ、涙を滴らせた顔で答えました。[151]

「誰の輪廻的生存において死が存在しないのか。誰が病に苦しめられないだろうか。誰が老いないだろうか。誰の成功繁栄が永久に続くだろうか。[152]

輪廻的生存をさまよう、生存を有する者たちには必然的に様々な生存の状態がある。そのことに恐れをいだかぬ勇者は、法をなしながら、楽しげに振舞うだろう。どうしてそれとは異なる偉大な法を求め、輪廻を嫌悪するのか。[153]

出家すれば、悪い生き物たちが沢山いる、猟師や盗賊がうろつき、虻や蚋だらけの、人が近づき難い森の中で冷風と熱暑が身体を襲うが、お前は苦しむことを願うのか。[154]

また更に、お前に大きな苦しみがあり、恐怖があるだろうことも言うまでも無い。そのためにお前は王権を捨て、出家することを欲するのか。[155]

お前には一人も敵はいない。すべての王たちはお前の支配下にある。それ故、愛しい子よ、そのため王権を捨てることを願うほどの怖れをどうしてお前は持つのか。[156]

お前には七宝があり、美しい輝きの善き徳性もある。それ故どうして苦しみが生じるのか。一切王の王よ、言いなさい。」[157]

このように父が語ったのを聞いて、善慧者であるかの菩薩は父と大臣たちを見つめながら、次のように答えました。[158]

「父上よ、何のために私が怖れて、輪廻的生存を欲せず、感官の諸対象（快楽）と王権を捨てて、出家することを望んでいるのかをお聞き下さい。[159]

害をなす、強大な勇士たち（煩悩）が敵として私にもいるのです。彼らは輪廻的生存に住する神々やアスラを含む生類を苦しめています。[160]

それら三界の邪悪な者たちからの様々な怖れを見て、私は輪廻的生存という依処を捨てて、寂滅の至福を得たいと願っています。[161]

それらの邪悪な敵によって地獄にも投げ込まれた者として、かつて様々な苦を味わいながら［輪廻の中を］私は彷徨いました。[162]

それらのあらゆる苦しみを今絶えず思い出しながら、恐怖する私は、それから免れるために悟りに達しようと願うのです。[163]

種々の煩悩のためにあらゆる人々は心苦しめられ、輪廻的生存の中で彷徨いながら、苦を味わい、地獄にすら堕ちています。[164]

害をなす、悪しきこれらの大きな敵たち（煩悩）があらゆる生類を苛み、地獄へ堕としているのです。[165]

これらの悪しき生類の敵たちを、世界の守護神たちすべても、仙人たちでさえも、打ち負かすことが全く出来ません。[166]

ハリ（ヴィシュヌ）やインドラやブラフマーやルドラなどの者たち、すべての世界の守護神たちも、煩悩の支配下にあり、狂酔して、自分の欲するがままに振舞っています。[167]

あらゆる人々も煩悩の支配下にあり、狂酔して、己が願望に従い欲望を楽しみ、罪悪に住して行動しています。[168]

それら悪しき者たち（煩悩）は強大であり、生類を狂酔せしめる者であり、輪廻的生存を彷徨う者は誰も打ち勝つことができません。[169]

大通智者である仏たちのみが、輪廻的生存を彷徨うことから免れ出た者であり、それら悪しき者たちに打ち勝って最高の悟りを得た者です。[170]

［仏たちは］人々のためにも、悪しきそれらの生類の敵たちに打ち勝ち、正法を教示し、とても幸せな状態を作り出し、[171]　そして三界のあらゆる場所で生類を法から成るものに変え、仏としてのなすべき仕事を達成してから、善き寂滅の至福にいたる者です。[172]

この私も同様に、観察して生類を法から成るものに変え、出家の禁戒を堅持しつつ、三昧を得たいと願っています。[173]

それ故、努力してこれらの強大な敵を打ち負かして滅ぼすため、王の位にある人生期を捨てて、出家したいと願うのです。[174]

出家の禁戒を堅持しながら、これらの生類の敵に勝って、阿羅漢として悟りに達し、仏の位を得たいのです。[175]

そして人々のためにあらゆる場所でこれらの大きな敵たちを打ち負かし、正法を教示しながら、最も幸せな状態を私は作りたいのです。[176]

生類を法から成るものに変え、正法を教示しながら、如来のなすべき仕事を達成して、善き寂滅の至福を得たいのです。[177]

そのために、父よ、私は出家することを欲します。あなたはどうか信をもってその許可を私にお与え下さい。」[178]

このように息子が語ったのを聞いて、父たるかの王は、涙を滴らせた顔で見つめながら、息子に次の様に言いました。[179]

「もしそのようにお前が望んでいるとしても、それでも私の言葉を聞きなさい。若い間は人民を護りながら、家で法を行いなさい。[180]

息子をつくり、よく教育して、王座に立たせ、そして［お前が］年を取って老いに襲われた時、生類の益のために出家しなさい。[181]

もしそのようにするなら、お前はすばらしい光輝ある名声を伴った偉大な法に、安らぎに、悟りに達して、仏の位を得られるだろう。[182]

そのようにして、法を教示し、生類を法から成るものに変え、仏のなすべき仕事を達成してから、お前は善き寂滅の至福を得ることが出来よう。[183]

大智者よ、このように考えて、さしあたって王位にある人生期に住し、あらゆる生類に益を齎しつつ、楽しみながら浄行をなしなさい。[184]

もしお前が私への愛情を、王位を、家族・親縁の者たちを捨てて、自分の命すら顧みずに、生類の益のため出家するなら、[185]

その時、私はお前への愛情の苦しみの火に焼かれて、惑乱し、王位とともに肉体を捨てて、間違いなく死に至るだろう。[186]

またあの母たるガウタミーも、愛情の苦しみの火に焼かれて、心でお前だけを憶念しながら、間違いなくヤマの住まい（死の国）に赴くだろう。[187]

お前の妻であるヤショーダラーも、愛情の苦しみの火に焼かれて、お前の徳性を思い出しながら、肉体を捨てて、ヤマのもとへと赴くだろう。[188]

他の女たち、お前にとって愛しいかの女たちすべても、別れに苦悩し、煩悩の火に焼かれ、苦しみに悩まされて、［ついに］ヤマの住まいに赴くに違いない。[189]

乞い求める人々、また民衆の皆も絶望し、お前の徳性を思い出しながら、歓びの興奮を失って、彷徨うことだろう。[190]

次の生で味わわねばならない、これらの罪から生じるお前の苦は消滅することがない。どうして［自ら］消えるに至るだろうか。[191]

そのようであれば、出家しても、生類に益をなしても、悟りに達しても、何になるだろうか。ただ苦の成就のみがある。[192]

賢き者よ、このように認識して、今は出家することを願わず、年を取った時に去って出家の禁戒を行じ、[193]　煩悩という大敵たちを克服して、悟りに達し、生類の益のために正法を教示して、広く周く行わせるがよい。[194]

そのようにすれば、清浄な心をもつお前は、一切法王・ジナ（仏）として、生類を法から成るものに変え、善き寂滅の至福を得るであろう。[195]

そのようにすれば、われわれも皆、お前の妙法によって浄められ、悟りの知に達して、善き寂滅の至福を得ることだろう。[196]

大士よ、このように考えて、もしお前に私たちに対する憐れみがあるなら、今はとりあえず王の位にいる人生期に住し、菩提行の誓戒を行いなさい。」[197]

このように父が語ったのを聞いて、菩薩・大士は暫し沈思して、父を見つめ、この様に語りました。[198]

「父よ、まことに正しく私を益するためにこの様に御教示されました。しかし私にも有益な言葉と意見があり、それを語りますので、お聞きください。[199]

父よ、死は実に強力であり、誰をも支配下に置きます。信頼できず、生き物の世界で皆殺しにする、極めて無慈悲な者です。[200]

彼はあらゆる生き物にとって、あらゆる方角から近づいてくる者です。三界においても誰も打ち勝つことができません。[201]

不意にその大剛勇の者はやって来て、傍に寄ります。ヤマ（死王）の命に従い、あなたの目の前で、私を掴んで、連れてゆくことでしょう。[202]

その時、私はあなたのために何がなせるでしょう。あなたは私に対して何がなせるでしょうか。家族や親族、愛しい者も家来たちも、彼らは私のために何がなせるでしょうか。[203]

老人となり、感官が衰え、病気をもち、享楽への熱望も消えたその時、どうして私が生類を益するために行動することが出来るでしょうか。[204]

種々の災難は運命から生じるものであり、あらゆる者が味わわねばならないものですが、もし私に災いが生じたとしたら、その時私は何をなしうるでしょうか。[205]

もしいつか激怒した王たちが皆、私に敵対したとしたら、彼らは殺害をなし、王権と共にすべての富財を奪うでしょう。[206]

或いは、私を家族や友や血縁者と共に牢に拘束したり、あるいは永久追放して沙漠に送ったりすることでしょう。[207]

その時、服従させられ、衰弱した感官を有する私は何が出来るでしょう。心の堅固さを失った私は、自分自身をすら落ち着かせることが出来ないでしょう。[208]

［その時］どうして心を堅く保って、出家して、禁戒を行じながら、悪しきマーラの群に勝利して、悟りを得ることができるでしょう。[209]

悟りの知がなければ、誰が正法を教示できましょうか。正法の教示がなければ、どうして生類を益することができるでしょうか。[210]

このように考えて、大王よ、私は生類を益するために悟りを得ようとして、［王宮での］魔の所行を捨てて、出家することを望むのです。[211]

父上よ、もし正法を実践する私への愛情があなたにあるなら、このことの許可を私にお与え下さり、名声・栄光と法とを獲得なさって下さい。」[212]

このように息子が語るのを聞いて、かの父はよく理解したものの、顔に涙を滴らせ、［彼を］見つめながら愛情という毒に苦しめられた状態でいました。[213]

その後、かの菩薩サルヴァールタシッディは立ち上がり、立ち去って、自分の住まいに居て、瞑想に集中して過ごしました。[214]

かのシュッドーダナ王も大臣・家臣・部下たちを伴って立ち去り、自分の住まいに居て、その事を考えながら過ごしました。— [215]

以上、かの人の (*tasya) {**or:** 私の (mama)} 往古の活動を今私は語りました。大士よ、あなたもこれを聞いて信受して歓びなさい。[216]

この［話］を信心をもって聴聞して、『出家に進むことを請い求める』［という本話］を随喜する者は皆、美しい輝きがある徳性の拠り所たる者となることでしょう。[217]

—— 以上のように師が説かれたのを聞いて、気高い心をもつ彼は、「そのようにいたします」と随喜しながら、集会の出席者たちと共に喜んで信受しました。[218]

『出家に進み行くことを請い願い、理解せしめる』という第18章［終わる］。

４．Tathāgatajanmāvadānamālā 第19章の校訂研究

第19章を内容的に区分して、各部所のソースとオリジナル箇所をおおまかに示せば、次の通り：

（１）第4～第6詩節（ルンビニー園の精霊が王子の出離を王に予言する）の記述は Mahāvastu を利用。

（２）第6～第17詩節（王子の出離がないよう見張りの強化を王が命令する）の記述は Lalitavistara 第14章を利用。

（３）第18～第42詩節（宮廷の歓楽の強化が命令される）の記述は Buddhacarita 第4章を利用。

（４）第43～第55詩節（菩薩の性愛の行動、妻の懐妊）の記述は Mahajjātakamālā または Karuṇāpuṇḍarīka を利用。

（５）第56～第83詩節（妊娠した妻と菩薩との対話）の記述は TJAM オリジナル。

（６）第84～第125詩節（菩薩と義母プラジャーパティーとの対話）の記述は TJAM オリジナル。

（７）第126～第140詩節（菩薩の義母から連絡を受けた後宮の女たちと菩薩との対話）の記述は TJAM オリジナル。

（８）第141～170詩節（菩薩が夜中に父王のもとに訪れ、話し合う）は Lalitavistara 第15章を利用。

（９）第171～210詩節（菩薩と父王の対話の続き）の記述は TJAM オリジナル。

（10）第211～215詩節は（父王が菩薩の願いに同意する） Lalitavistara 第15章を利用。

4.1　TJAM 第19章『出離することの許可を請う』の梵文校訂テクスト

19 Niryāṇānujñāsaṃprārthānāparivarto nāmonaviṃśatitamo 'dhyāyaḥ

[123a3] ath**āśoko mahīpālaḥ** {**or:** athānando mahāsattvaḥ} punar upāśrito mudā /
sāñjalis taṃ yatiṃ natvā punar evam abhāṣata // 1
bhadanto 'sau mahābhijño bodhisattvaḥ kathaṃ purāt /
nirgatas tat samādiśya sarvān asmān prabodhaya // 2
iti saṃprārthitaṃ tena śrutvā so 'rhan mahāmatiḥ /
aśokaṃ {**or:** ānandaṃ} taṃ sabhāṃ sarvāṃ saṃpaśyann evam ādiśat // 3
tatrākāśe samāśritya lumbinīvanadevatā /

śuddhodanaṃ mahīndraṃ taṃ samāmantryaivam abravīt // 4 ≈ S ii,145.6-7; M ii,185.8-9
vijānātu narendro 'yaṃ bodhisattvas tavātmajaḥ /
viraktas tribhave nūnaṃ pravrajed bodhiprāptaye // 5 ≈ S ii,145.7-9; M ii,185.9-11
iti devatayākhyātaṃ śrutvā śuddhodano nṛpaḥ /
paśyantīṃ devatāṃ natvā sahasotthāya prācarat // 6
galadaśruviliptāsya udvignadīnamānasaḥ /
prāsādatalam āśritya tasthau paśyan samantataḥ // 7
tatra śuddhodano rājā mantriṇaḥ sasuhṛjjanān /
sarvān paśyan samāmantrya purata evam ādiśat // 8
bhavantaḥ kriyatāṃ yatno yathāsau nandanaḥ purāt /
na niryāyāt tathā sarvair yuṣmābhir api sarvathā // 9
iti rājñā samādiṣṭaṃ śrutvā te mantriṇo janāḥ /
tatheti prativijñapya sarve 'caraṃs tato drutam // 10
tatra te mantriṇo 'mātyāḥ purād bahiḥ samantataḥ /
parikhāḥ khānayitvāśu jalapūrṇā vyadhāpayat // 11 ≈ L 193.6; H i,684(vs.)16c
tataḥ prāccīraprākārān samantato vyamāpayan /
dvārakapāṭa*yantrāni sudṛḍhāny abhyakārayan // 12 ≈ L 193.6-7; H i,684(vs.)16cd
gopureṣv api sarveṣu yoddhṝn sainyādhipān api /
samabhisthāpayām āsuḥ saṃnaddhān astrasaṃyutān // 13 ≈ L 193.4; H i,684(vs.)16a
śṛṅgāṭakeṣu sarveṣu yoddhṝn sainyagaṇādhipān /
savāhanān balavyūhān sthāpayanti sma sarvataḥ // 14 ≈ L 193.5; H i,684(vs.)16b
evaṃ sarvatra mārgeṣu sarvagehāṅganāsv api /
rathyāsv āpaṇadeśeṣu pratiṣṭhāpyaivam ādiśan // 15
yuvarājo mahāsattvaḥ pravrajituṃ samicchati /
tad atra nṛpater vaṃśaḥ samucchinno bhaved api // 16
iti jāgaraṇaṃ dhṛtvā sarve yūyaṃ samāhitāḥ /
dīvāniśaṃ samālokya pratyabhiṣṭhātum arhatha // 17
sarvāṇy api ca vādyāni vādayanto divāniśam /
mahotsāham avicchinnaṃ cārayantu samantataḥ // 18
evaṃ sarvatra deśeṣu sarve tadrakṣiṇo janāḥ /
vādayanto mahotsāhaṃ saṃtasthire pramoditāḥ // 19
evaṃ vidhāya sarve te mantribhṛtya[123b]janās tataḥ /
gatvaivaṃ tasya rakṣārtham antaḥpure 'py upācaran // 20
tatra te samupāmantrya dṛṣṭvāntaḥpurikāñ janān /
yathādiṣṭaṃ narendreṇa tathā sarvān upādiśān // 21

yad ayaṃ nṛparājasya nandano bhavaniḥspṛhaḥ /
tad rājyāśramaṃ tyaktvā vanāśramaṃ samicchati // 22
tad yathāyaṃ mahāsattvo naiva yāyād vanāśramam /
tathāsya gamanotsāhaṃ vighātituṃ samarhatha // 23
iti mantrijanādiṣṭaṃ śrutvāntapurikā janāḥ /
sarve tatheti bhāṣitvā jagmur antaḥpure drutam // 24
tatra te samupāśritya sarvās tā ratisaṃnibhāḥ /
kalāguṇāśrayāḥ kāntāḥ samāmantryaivam abruvan // 25
bhoḥ sarvāḥ pramadāḥ kāntā sarvavidyāvicakṣaṇāḥ /
tac chrutvā nṛpater ājñāṃ pratikartuṃ tathārhatha // 26
yad ayam ātmajo rājño bodhisattvo viraktikaḥ /
rājyāśramaṃ parityajya pravrajituṃ samicchati // 27
tad bhavantyo yathā tasya manaḥ kāmaguṇāratam /
tathā ratimahotsāhe saṃrāgayantu sarvathā // 28
yathā rājyāśramaṃ tyaktvā naiṣa vrajed vanāśramam /
tathā yatnair vaśīkṛtya saṃsthāpyatāṃ nṛpāsane // 29
iti taiḥ samupādiṣṭaṃ śrutvā tāḥ pramadāḥ striyaḥ /
tatheti pratisaṃśrutya prābhyanandan pramoditāḥ // 30
tatas tāḥ śrīsamākārā ratirūpasamāśrayāḥ /
saṃgītinṛtyasaṃcārair mahotsāham acārayan // 31
kāścin murajavādyāni saṃpravādya mudāraman /
kāścit tad gītigāyantyaḥ samāraman pramoditāḥ // 32
kāścit tat tūryasaṃrāvaṃ cārayantyo mudāraman /
kāścin nṛtyavilāsāni prakurvantyo mudāraman // 33
kāścid veṇusunirghoṣaiḥ sugītiṃ samacārayan /
kāścid vīṇāṃ pravāditvā sagītiṃ prāraman mudā // 34
kāściḍ ḍhakkāṃ pravādantyaḥ sagitīṃ prāraman mudā /
kāścid bherīṃ parāhantyaḥ saṃharṣitā mudāraman // 35
kāścic ca ḍamarūm maṇḍu[124a]ḍiṇḍimajharjharān api /
mardalapraṇavādīni pravādantyo mudālasan // 36
tālānusāranṛtyantyaḥ śṛṅgārollāsadīpanaiḥ /
madhuraniḥsvanair gītaṃ gāyantyaḥ prollalāsire // 37
sarvās tāḥ pramadāḥ kāntāḥ suvastrālaṃkāramaṇḍitāḥ /
pañcasugandhiliptāṅgāḥ sugandhipuṣpabhūṣitāḥ // 38
yuvarājaṃ tam ālokya vihasantya upāśritāḥ /

samīkṣyaiv*āṅganāḥ kāścil lajjābhinamatānanāḥ // 39
kāścid vīkṣya kaṭākṣeṇa sthitāḥ kāścid natānanāḥ /
darśayantyaḥ sthitāḥ kāścic chṛṅgārarasavibhramam // 40
kāścil lajjāṃ parityajya vibhrāntā iva cerire /
kāścid uddīptakāmāś ca saṃkrīḍitum upāśrayan // 41
evaṃ nānāprakāraiś ca ratikrīḍābhidarśanaiḥ /
hāsyalāsyavilāsais tā yuvānaṃ taṃ vyanodayan // 42 ≈ **Bc 4.53**
tataḥ sa yuvarājo 'pi bodhisattvo jitendriyaḥ /
dṛṣṭvā tā ratisaṃraktā dhyātvaivaṃ samacintayat // 43
imā hi pramadāḥ kāntāḥ kāmakleśāhatāśayāḥ /
yatnenāpi vaśīkṛtya mohayeyur mano mama // 44
tadā vighnaṃ bhaven nūnaṃ mama saṃbodhisādhane /
itīmābhiḥ (!) sahārakto ramituṃ nārhāmi sāmprataṃ // 45
iti dhyātvā samādhāya bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
svayaṃ tataḥ samutthāya nijavāsālaye 'carat // 46
tatra śayyāsanāsīno jīrṇarogivyasūn smaran /
saṃsāraviratotsāhaḥ saṃbodhinihitāśayaḥ // 47
sarvasattvahitādhānabodhivratasamutsukaḥ /
sarvān buddhān anusmṛtvā tasthau dhyānasamāhitaḥ // 48
tatra sā mahiṣī gopā bhartṛdharmānucāriṇī /
patiṃ śayyāsanāsīnaṃ samīkṣya samupāśrayat // 49
tāṃ dṛṣṭvā samupāsīnāṃ saṃvṛtidharmakāminīm /
bodhisattvo 'nuraktātmā vihasan samapaśyata // 50
sāpi devī prasannāsyā ratidharmānurāgiṇī /
[124b] patiṃ ratirasāraktaṃ vihasantī samaikṣata // 51
evaṃ mitho 'bhipaśyantyor (!) bhāryāpatyos tayor api /
mahārāgāgnir uddīpto manodhṛtiṃ vyadāhayat // 52
tatas tau dampatī śliṣya mahārāgā*nurāgitau /
vihasantyau samālokya pramodantau praremātuḥ // 53
śrīcāritracaraṇasudarśanayūthikābhidhaḥ / ≈ Mahajjātakamālā 32.19;
śakras tadā divaś cyutvā martyaloke samāyayau // 54 Karuṇāpuṇḍarīka,ii,p.315
tatra sa samaye dṛṣṭvā bodhipraṇihitāśayaḥ /
gopāyā nirmale garbhamaṇḍalābje samāviśat // 55
tadā sā śrīsamā devī yaśodharābhinandinī /
saddharmasādhanotsāhā babhūva vimalāśayā // 56

tataḥ sā vigatakleśaśuddhāśayā yaśodharā /
bhartāraṃ taṃ mahāsattvaṃ saṃpaśyan hy evam abhāṣata // 57
svāminn adya manaḥ kleśavimuktaṃ dharmam icchati /
tad ahaṃ poṣadhaṃ nāma vrataṃ caritum utsahe // 58
yadi te vidyate bhartar dharmārthinyāṃ kṛpā mayi
tadanujñāṃ prasannātmā bhavān me dātum arhati // 59
iti bhāryoditaṃ śrutvā bhartā sa viduṣāṃ varaḥ /
dhyātvā kṣaṇaṃ samādhāya tannimittaṃ vyalokayat // 60
tannimittaṃ parijñāya bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
tāṃ gopāṃ supriyāṃ bhāryāṃ sampaśyann evam ādiśat // 61
bhoḥ priye tvaṃ subhāgyāsi yat te 'dya garbhamaṇḍale /
bodhisattvo divaś cyutvā saṃpraviṣṭaḥ prasīda tat // 62
tathā te supriye cittaṃ vrataṃ caritum icchati /
tat subhadre samādhāya saṃcarasva vratottamam // 63
bhūyo 'tra śṛṇu me vākyam abhiprāyaṃ yad ucyate /
tatanumodanāṃ kṛtvā tiṣṭha vratasamāhitā // 64
aham api priye gatvā gayāyāṃ bodhimaṇḍape /
bodhivṛkṣam upāśritya sambodhiṃ prāptum utsahe // 65
sarvān kutīrthikāñ jetuṃ kāśyāṃ bauddhāśramāśritaḥ /
saddharmaṃ samupādiśya kartum icche jagacchubham // 66
iti hetor ahaṃ bhadre pravrajituṃ samutsahe /
[125a] yāvan nāham ihāyātas tāvat tiṣṭha samāhitā // 67
iti bhartroditaṃ śrutvā yaśodharā pativratā /
svāminaṃ taṃ mahāsattvaṃ saṃpaśyanty evam abravīt // 68
aham api tvayā sārdhaṃ pravrajituṃ samutsahe /
vinā bhavantam atraivaṃ tiṣṭheyaṃ hi kathaṃ prabho // 69
iti bhāryoktam ākarṇya bodhisattvo mahāmatiḥ /
dṛṣṭvā tāṃ supatnīṃ sādhvīṃ punar evaṃ samādiśat // 70
śṛṇu priye mayākhyātaṃ hitārtham āvayor api /
yat te garbhe praviṣṭo 'tra mahāsattvaḥ śubhārthabhṛt // 71
yāvad eṣa maheśākhyaḥ saṃtiṣṭhate tavodare /
tāvat tvayā samārakṣya poṣaṇīyaḥ samādarāt // 72
yadāyaṃ paripuṣṭāṅgaḥ saṃjātaḥ śrīguṇāśrayaḥ /
tadāsya darśanaṃ kartuṃ prāgamiṣyāmy ahaṃ dhruvam // 73
iti satyaṃ mayā proktaṃ matvā dhairyasamāhitā /

sarvān buddhān anusmṛtvā saṃtiṣṭhasva pramoditā // 74
ity ādiśya sa sarvārthasiddhaḥ sa susiddhimān /
pratisarāmahāvidyāṃ gopāyai pradadau japan // 75
tatas tāṃ subhagāṃ bhāryāṃ bodhisattvaḥ samīkṣya ca /
tadvidyāyāḥ prabhāvāni samādiśyaivam abravīt // 76
iyaṃ bhadre mahāvidyā sarvopadravarakṣiṇī /
bhadraśrīsadguṇādhārā sarvabhayavināśinī // 77
tad enāṃ sarvadā dhṛtvā smṛtvā sarvabhayeṣv api /
dhyātvā pratisarāṃ devīṃ saṃpaṭhantī samācara // 78
etadvidyānubhāvena sarvālokādhipā api /
sagaṇā mātṛkāś cāpi sarve grahāḥ satārakāḥ // 79
ṛṣayaḥ siddhamantrāś ca yogino yatayo 'pi ca /
bodhisattvā mahāsattvāḥ sasaṃghāś ca munīśvarāḥ // 80
sarvadā tvāṃ samālokya sarvatrāpi kṛpādṛśā /
sarvaduṣṭabhayebhyo 'pi saṃrakṣeyuḥ prasāditāḥ // 81
iti matvā mahāvidyām enāṃ dhṛtvā sadādarāt /
svātmānaṃ dārakaṃ cāpi pālayantī samācara // 82
iti bhartrā samādiṣṭaṃ niśamya sā yaśodharā /
snehaduḥkhāgnisaṃtaptā tasthau *vi[125b]ṣaṇṇitāśayā // 83
tataḥ sarvārthasiddho 'sau mātaraṃ tāṃ prajāpatīm /
gautamīṃ samupāśritya natvaivam āha sāñjaliḥ // 84
mātar ahaṃ gayāśīrṣe caritvā vratam uttamam /
bodhimaṇḍe samāśritya saṃbodhiṃ prāptum utsahe // 85
tataḥ kāśīpure gatvā mṛgadāve jināśrame /
saddharmaṃ samupākhyāya kartum icche jagacchubham // 86
tato 'trāpi samāgatya yuṣmākam api darśanam /
kṛtvā saddharmam ākhyāya kariṣyāmi sadā śubham // 87
tataḥ sarvatra lokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
jagad dharmamayaṃ kṛtvā nirvṛtiṃ prāptum utsahe // 88
iti hetor ahaṃ mātaḥ pravrajituṃ samutsahe /
tadanujñāṃ pradattvā me dharmaśrīkīrtim āpnuhi // 89
iti putroditaṃ śrutvā gautamī sā pramohitā /
cirāc caitanyam āsādya niḥśvasanty evam abravīt // 90
hā daiva kiṃ mayā pāpaṃ prakṛtaṃ tan na manyate /
yad eka eva me putraḥ so 'pi māṃ hātum icchati // 91

tad atra kiṃ kariṣyāmi buddhir hi me viśīryate /
etacchokāgnisaṃdagdhāṃ ko 'tra māṃ pariśodhayet // 92
hā jīva vraja tāvan me yāvan na vrajate sutaḥ /
śokāgnidagdhite dehe sthitvā kiṃ guṇam āpsyasi // 93
avaśyaṃ niścares tyaktvā mamedaṃ sendriyaṃ vapuḥ /
tat tāvat sahasā gaccha yāvat sutaṃ na pasyase // 94
yadi na gacchate tāvan nūnaṃ duḥkhāni lapsyasi /
avaśyam eva gantavyam iti gaccha jinān smaran // 95
iti sā gautamī mātā vilapitvāvilānanā /
nandanaṃ taṃ mahāsattvaṃ sampaśyanty evam abravīt // 96
api deva tvam eko hi nandano me 'sti nāparaḥ /
tat kathaṃ māṃ sarājyāṅgaṃ tyatkvā gantuṃ kuhecchasi // 97
kiṃ te duḥkhāni jātāni bhayāny api kuto vada /
yaj janakaṃ sabandhuṃ māṃ sajñātīṃ tyaktum icchasi // 98
bhāryāś ca supriyāḥ kāntāḥ śrīrūpā ratisaṃnibhāḥ /
etāḥ sarvā api tyaktvā kiṃ su[126a]khaṃ prāptum icchasi // 99
tvayā yadā parityaktās tadā sarvā imāḥ striyaḥ /
tava viyogaśokāgnidagdhā yāyur yamālayam // 100
tadā kiṃ te sukhaṃ puṇyaṃ bhadraśrīkīrtisadguṇam /
bodhim api samāsādya kṛtvāpi ca jagaddhitam // 101
iti matvā mahāvijña tāvad rājyāśrame sthitaḥ /
dattvārthibhyo yathākāmaṃ dhṛtvā vrataṃ sukhaṃ cara // 102
yadātmajo 'bhijātas te tadā dharme vinīya tam /
rājyāśrame pratiṣṭhāpya kṛtvā nṛpaṃ tataś cara // 103
yadā cāpi jarākrāntadeho vṛddho jitendriyaḥ /
tadā bauddhaṃ vrataṃ dhṛtvā saṃcarasva jagaddhite // 104
yadi cāsti samīcchās ta ṛṣicaryāvrate vane /
viṣayābhiratiṃ tyaktvā vanāśrame tadā cara // 105
evaṃ cet te sadā bhadraṃ nirapāyaṃ bhaved api /
bodhim api samāsādya bodhicaryāṃ samācareḥ // 106
saddharmaṃ samupādiśya kṛtvā sarvatra maṅgalam /
jagad dharmamayaṃ kṛtvā sunirvṛtiṃ samāpnuyāḥ // 107
iti mātrā samādiṣṭaṃ bodhisattvo niśamya saḥ /
mātaraṃ tāṃ samālokya bhūyo 'py evam abhāṣata // 108
mātaḥ satyaṃ tvayākhyātaṃ tathāpi me vacaḥ śṛṇu /

yad ahaṃ saugatīṃ caryāṃ caritum utsahe 'dhunā // 109
yadā vṛddho jarākrāntadeho rogāhatendriyaḥ /
tadā kathaṃ praśaknūyāṃ carituṃ saugataṃ vratam // 110
akasmān mṛtyur āghrāya sarvān asmān grased api /
bhave kasya vaśe mṛtyus traidhātubhuvaneṣv api // 111
iti dṛṣṭvādhunā mātar bodhicaryāvrataṃ caran /
kleśān māragaṇāñ jitvā saṃbodhiṃ prāptum utsahe // 112
tato 'haṃ sarvalokeṣu saddharmaṃ saṃprakāśayan /
jagad dharmamayaṃ kṛtvā nirvṛtiṃ gantum utsahe // 113
iti mātra viṣīda tvaṃ mama saddharmacāriṇaḥ /
viyogaduḥkhaśaṅkāpi bhāvanīyā kadāpi mā // 114
yac ca me bījasaṃbhūto gopāyā garbhamaṇḍale /
bodhisattvo mahāsattvaḥ saṃsthito hi pravṛddhimān // 115
yadāyaṃ dārako jātas tadā [126b] tasyātmajasya me /
mukhasaṃdarśanaṃ kartuṃ prāgamiṣyāmy ahaṃ dhruvam // 116
atrāhaṃ sarvadāśritya vinīya dharmasādhane /
bodhimārge pratiṣṭhāpya cārayeyaṃ jagaddhite // 117
iti satyaṃ mayā proktaṃ śrutvā mātaḥ prabodhitā /
mā viṣīda prasīdātra mama saddharmasādhane // 118
tat snuṣāpannasattveyaṃ yaśodarā sadādarāt /
abhirakṣyābhisaṃpālyā mātas tvayātmajā yathā // 119
etāś ca pramadāḥ kāntāḥ sarvā api priyā mama /
tvayābhirakṣya saṃpālyā yāvan nāham ihāgataḥ // 120
dhruvam aham ihāgatya sarvā imāḥ prabodhayan /
bodhimārge samāyujya cārayeyaṃ sadā śubhe // 121
iti mātaḥ samādiśya bodhayitvā prayatnataḥ /
samāśvāsyābhirakṣantī saṃpālayitum arhati // 122
tvam api sugatān smṛtvā tāvat tiṣṭha samāhitā /
yāvan nāham ihāyātaḥ saddharmaṃ saṃprakāśitum // 123
nūnaṃ sambodhisaṃprāptaḥ prathamam iha prāgataḥ /
saddharmāmṛtavarṣeṇa tarpayiṣyāmi vo dhruvam // 124
iti satyaṃ parijñāya yāvan nātrāham āgataḥ /
tāvann etā vadhū rakṣya saṃtiṣṭhasva viṣīda mā // 125
iti putroditaṃ śrutvā gautamī sā prabodhitā /
snehaduḥkhāgnisaṃtaptā tasthau niḥśvāsatatparā // 126

tad dṛṣṭvā tāḥ striyaḥ sarvāḥ sahasā samupāgatāḥ /
mātaraṃ tāṃ samālokya parivṛtyopatasthire // 127
tā dṛṣṭvā samupāsīnā gautamī sāśrulocanā /
sarvāḥ saṃbodhanīkartuṃ samālokyaivam ādiśat // 128
ayaṃ bhartā mahāsattvo bodhim icchañ jagaddhite /
sarvān asmān parityajya pravrajituṃ samicchati // 129
tad yūyaṃ sakalāḥ kāntā dhairyam ālambya tiṣṭhata /
ayaṃ bodhiṃ samāsādya yāvan nātra samāgataḥ // 130
iti taduktam ākarṇya sarvās tāḥ pramadā api /
bhartāraṃ tam upāśrītya praṇatvaivaṃ babhāṣire // 131
vayam api tathā svāmin sarvā api tvayā saha /
vrataṃ [127a] caritum icchāmas tad bhavān naḥ prasīdatu // 132
bhavadājñāṃ śirodhṛtvā samādhāya caremahi /
tad bhavān naḥ prasannātmā samanvāhartum arhati // 133
iti taduktam ākarṇya bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
sarvās tāḥ pramadā rāmāḥ samālokyaivam ādiśat // 134
yūyaṃ hi pramadāḥ sarvā bodhicaryātiduṣkarī /
tat tāvac carituṃ naivaṃ yuṣmābhiḥ śakyate 'dhunā // 135
tad ahaṃ bodhim āsādya yāvan nātra samāgataḥ /
tāvad yūyaṃ samādhāya carantyas tiṣṭhata vratam // 136
ahaṃ sambodhim āsādya prathamam iha prāgataḥ /
saddharmāmṛtapānena tarpayiṣyāmi vo dhruvam // 137
iti satyaṃ parijñāya sarvā yūyaṃ samāhitāḥ /
jinān smṛtvā vrataṃ dhṛtvā dhairyam ālambya tiṣṭhata // 138
ity evaṃ samupādiśya bodhisattvaḥ sa utthitaḥ /
gatvā svālayam āśritya tasthau dhyānasamāhitaḥ // 139
sarvās tāḥ pramadāś cāpi nātvā svasvālayāśritāḥ /
bhartāraṃ tam anusmṛtvā tasthur dhyānasamāhitāḥ // 140
athāsau śayanāsīno bodhisattvaḥ samutthitaḥ /
pravrajyāsamayaṃ dṛṣṭvā dhyātvaivaṃ samacintayat // 141 ≈ L 198.1; H ii,40.3
yad anujñām anāsādya pitū rājño mahīpateḥ /
niḥkrameyam avijñātas tad ayuktaṃ na śobhate // 142 ≈ L 198.1-3; H ii,40.3-5
tat pituḥ darśanaṃ kṛtvā prāptānujño vinodayan /
niṣkrameyaṃ prasannātmā tathā saṃśobhate mama // 143
iti niścintya śuddhātmā bodhisattvaḥ sa utthitaḥ /

gatvā pitur narendrasya prāsādaṃ samupācarat // 144 ≈ L 198.3-4; H ii,40.5-6
tatrāṭṭatala āśritya bodhisattvaḥ sa ṛddhimān /
samādhinihitātmā sa saṃsthitaḥ saṃprabhāsayan // 145 ≈ L 198.4-5; H ii,40.7-8
tadābhā prasṛtā tatra prāsāde nṛpamandire /
avabhāsya tamo hatvā dinam ivābhyarocayat // 146
tadābhāṃ prasṛtāṃ dṛṣṭvā śuddhodanaḥ prabodhitaḥ /
kiṃ tāvad vartate prātaḥ sūryo 'pi ca samudgataḥ // 147 ≈ L 198.5-7; H ii,40.8-9
iti vadan samutthāya saṃnirīkṣya [127b] samantataḥ /
kāñcukīyaṃ samāmantrya papracchaivaṃ pravismitaḥ // 148
kiṃ tāvad vartate prātaḥ sūryo 'pi codito 'dhunā /
yad iyaṃ prasṛtābhātra prakāśayati mandiram // 149 ≈ L 198.7-8; H ii,40.9-10
iti pṛṣṭanarendrena kāñcukīyaḥ samutthitaḥ /
samālokya puro gatvā nṛpater evam abravīt // 150 ≈ L 198.8-9; H ii,40.10-11
tāvad deva tamī rātrir niśītho 'pi na vartate /
kathaṃ prātar bhavet tāvat kutaḥ samudito raviḥ // 151
ravāv abhyudite chāyāḥ pravarteyur mahītale /
uṣaś cet pakṣiṇaḥ sarve ruyuḥ śvāno 'pi cotthitāḥ // 152 ≈ L 198.10-13; H ii,40(vs.)1
iyaṃ tv ābhā manoramyā prāhlādanī sukhākarā /
sūryābhā hi tapet kāyaṃ gharmaṃ cāpi pracārayet // 153 ≈ L 198.14-15; H ii,40(vs.)2ab
nūnam atra mahābhijño bodhisattvaḥ samāgataḥ /
tasyeyaṃ suprabhā kāntiḥ prasāriteha mandire // 154 ≈ L 198.17; H ii,40(vs.)2d
iti tatkathitaṃ śrutvā śuddhodanaḥ pitā nṛpaḥ /
sa samutthāya niryātaḥ sarvatra samalokayat // 155 ≈ L 198.18; H ii,40(vs.)3a
tadābhāṃ prasṛtāṃ dṛṣṭvā sa rājā vismayānvitaḥ /
kasyeyaṃ suprabhāyātā dhyātveti ca vyalokayat // 156
tatra paśyan sa sarvatra bodhisattvaṃ tam ātmajam /
prāsādatalam āśrītya dhyātvā sthitam apaśyata // 157 ≈ L 198.19; H ii,40(vs.)3b
taṃ dṛṣṭvā sa pitā rājā sahasā samupācarat /
janakaṃ taṃ samāyātaṃ dṛṣṭvātmajaḥ sa utthitaḥ // 158
tatra sa janako rājā tam ātmajaṃ prabhāsvaram /
samīkṣya samupāsṛtya śuddhāsane samāśrayat // 159
tataḥ so 'pi mahāsattvo bodhisattvo 'vabhāsayan /
janakaṃ taṃ samālokya praṇatvā samupāśrayat // 160
tatra śrīmān mahāsattvo bodhisattvaḥ kṛtāñjaliḥ /
janakaṃ taṃ samālokya *saṃprārthayat prasannadhīḥ // 161 ≈ L 199.3; H ii,42(vs.)4a

yad ahaṃ tāta saddharmaṃ saṃcarituṃ samutsahe /
tadanujñāṃ pradattvā me dharmaśrīkīrtim āpnuhi // 162 ≈ L 199.5-6; H ii,42(vs.)4cd
ity ātmājasamākhyātaṃ śrutvā sa janako nṛpaḥ /
galadaśrumukhaḥ paśyaṃs taṃ putram evam ādiśat // 163 ≈ L 199.7; H ii,42(vs.)5a
hā putra katham asmāṃs tvaṃ tyaktvā [128a] vrajitum icchasi /
kiṃ te duḥkhaṃ bhayaṃ vāsti nivārayāṇi tad vada // 164 ≈ L 199.8; H ii,42(vs.)4b
yadi rājye samicchā te sarvaṃ dāsyāmi te dhruvam /
adyābhiṣiñcya rājye tvāṃ sthāpayāni prajāhite // 165 ≈ L 199.9-10; H ii,42(vs.)4cd
ahaṃ vṛddho vrataṃ kartuṃ gamiṣyāmi vanāśrame /
tat tvaṃ rājyāśrame sthitvā prajāhitavrataṃ cara // 166
yady evam āvayoḥ syād dhi dharmaśrīmaṅgalaṃ sadā /
iti me vacanaṃ śrutvā tāvat kaulavrataṃ cara // 167
tvam api hi bhaver vṛddhas tadā gaccha yadīcchasi /
ātmājo 'pi na te tāvad rajyaṃ tyaktvā kathaṃ vrajeḥ // 168
yadātmajo 'bhijātas te nītidharmaṃ vinīya tam /
abhiṣiñcya nṛpaṃ kṛtvā tadā bauddhavrataṃ cara // 169
iti pitroditaṃ śrutvā bodhisattvaḥ sa sanmatiḥ /
janakaṃ taṃ mahīpālaṃ sampaśyann evam abravīt // 170 ≈ L 199.11; H ii,42(vs.)6a
śṛṇu tāta mahīpāla yadarthe gantum utsahe /
tad ahaṃ te pravakṣyāmi mā viṣīda prasīda me // 171
bhave 'tra tāta duḥkhāni vividhāni bhayāni hi /
tāni nirīkṣya me cittaṃ sambodhivratam icchati // 172
ādau bhave mahadduḥkhaṃ mātur garbhe praveśite /
sadāmedhyābhiliptāṅgas tiṣṭhed dhi nārake yathā // 173
janmakāle tathā mātur garbhān malābhimiśritaḥ /
cirād duḥkhair viniḥkramya niṣīded abhimohitaḥ // 174
tato bālye vimūḍhātmā paśuvad avikalpikaḥ /
kṣuttṛṣṇāgnyabhitaptāṅgas tiṣṭhed rodanatatparaḥ // 175
kaumārye 'pi mahāduḥkhaṃ krīḍārāgābhikheditam /
agamye 'pi rasāraktasaṃkliṣṭakalahākulam // 176
yauvane 'pi mahāduḥkhaṃ kāmakleśāgnidāhitam /
arjanāyāsasaṃkliṣṭamānasam anavasthitam // 177
saṃpattiśrīkṣaṇaṃ cāpi ghanopamam aniṣṭhitam /
suhṛdo 'pi kṣaṇād duṣṭā bhaveyur apakāriṇaḥ // 178
vārddhake 'pi jarākrāntaśarīre jīrṇitendriye /

bhogye 'pi viratotsāhaṃ kiṃ punar dharmasādhanam // 179
rogāś ca vividhāḥ santi balavīryavighātinaḥ /
dharmaśrīsādhanotsāhanihantāro [128b] mahārayaḥ // 180
mṛtyuś cāpi jagaddhantā pracaṇḍo nirghṛṇāśayaḥ /
aviśvāsyo hy anirvāryaḥ sarvakāryāntakṛd balī // 181
etair duḥkhair bhayaiḥ sarve saṃsāre vikalīkṛtāḥ /
kāmabhogyātisaṃraktāḥ pracaranti yathāsukham // 182
tatas te vikalātmānaḥ kleśamadābhimānitāḥ /
ghore 'pi pātake raktāḥ pracaranti pramoditāḥ // 183
tatas te 'timahāduṣṭā durbhagāḥ duḥkha*bhoginaḥ /
asahyavedanākrāntā mṛtā yānti yamālayam // 184
tān āyātān samālokya samavartī sa dharmarāṭ /
teṣāṃ samīkṣya karmāṇi prerayet phalabhuktaye // 185
pāpino narake nītvā kṣipeyuḥ kiṃkarā drutam /
dharmiṇas te samālokya prerayeyuḥ surālaye // 186
tatra sukṛtinaḥ sarvadivyasaṃpatsukhānvitāḥ /
madābhimānino raktāḥ pracareyur yathāsukham // 187
tataḥ saṃkliṣṭacittās te pramattāḥ paribhāṣiṇaḥ /
daivānuyogataś cyutvā pateyur narakeṣv api // 188
tatra te pāpinaḥ sarve sarveṣu narakeṣv api /
svakarmaphalabhuñjānā bhrameyur duḥkhabhoginaḥ // 189
tatas te tīvraduḥkhārtāḥ paścāttāpāhatāśayāḥ /
hā duḥkham iti proktvaiva tiṣṭheyuḥ parikheditāḥ // 190
yadi te sugatān smṛtvā nameyuḥ śaraṇāśayāḥ /
tadā tān sugatā dṛṣṭvā saṃprasārya śubhāṃ prabhām // 191
nirmāya saugatīṃ mūrtiṃ preṣayeyus tadantike /
tān dṛṣṭvā saugatīṃ mūrtiṃ sarve te tatprabhānvitāḥ // 192
saukhyavismayasaṃpannās tān samīkṣya pramoditāḥ /
purataḥ samupāsṛtya vandeyur abhinanditāḥ // 193
tadā te vimalātmānaḥ pariśuddhendriyāśrayāḥ /
samudgamya tato yāyuḥ sukhāvatyāṃ jināalaye // 194
evaṃ sarvatra lokānāṃ buddhā eva hitaṃkarāḥ /
tad eṣāṃ śaraṇaṃ gatvā pracarantu sadā vratam // 195
ye buddhaśaraṇaṃ kṛtvā saṃcarante sadā vratam /
durgatiṃ te na gacchanti saṃprayānti jināalayam // 196

iti vijñāya tātāhaṃ saṃbu[129a]ddhaśaraṇāśritaḥ /
bodhicaryāvrataṃ dhṛtvā sambodhiṃ prāptum utsahe // 197
bhūyo 'py etāni saṃsāre duḥkhāni vividhāny api /
bhayāny api nirīkṣyāhaṃ pravrajituṃ samutsahe // 198
iti satyaṃ parijñāya saddharmaṃ yadi vāñchasi /
tadanujñāṃ pradattvā me saṃcarasva sadā śubhe // 199
iti putroditaṃ śrutvā śuddhodano nṛpaḥ pitā /
snehaduḥkhāgnitaptātmā tasthau kṣaṇaṃ vimohitaḥ // 200
cirāc caitanyam āsādya nṛpatiḥ so 'bhibodhitaḥ /
bhūyas tam ātmajaṃ paśyann āhaivaṃ galitāśrudṛk // 201
kasya nāsti bhave duḥkhaṃ bhayaṃ ca tribhaveṣv api /
bhāvibhāvā bhavanty eva sarveṣām api sarvataḥ // 202
ko nātra jarasāghrāto rogeṇa mṛtyunāpi hi /
kṣaṇasampadvipattiś ca sarve 'py ete svadaivataḥ // 203
ity atra yauvanaṃ yāvat tāvad rājyavrataṃ cara /
yadā vṛddho vrataṃ bauddhaṃ dhṛtvā cara samāhitaḥ // 204
iti pitroditaṃ śrutvā bodhisattvo mahāmatiḥ /
janakaṃ taṃ samālokya punar evam abhāṣata // 205
vṛddho hi durbalo jīrṇo bhogye 'pi viratotsavaḥ /
kathaṃ bodhiṃ samāsādya bodhicaryāvrataṃ caret // 206
rogo 'pi hi vipattiś ca mṛtyur bhave svadaivataḥ /
iti matvātra rājye 'haṃ ramituṃ naivam utsahe // 207
dharma eva jagattrātā sarvatrāpi sadānugaḥ /
tat saddharmaṃ samālabdhuṃ pravrajituṃ samutsahe // 208
yadi te 'sti mayi snehas tadanujñāṃ pradehi me /
etaddharmānubhāvais tvam api saddharmam āpnuyāḥ // 209
trijagaddhitakārye me mā vighnaṃ kartum arhati /
dattvānujñāṃ prasannātmā saṃcārayasva māṃ śubhe // 210
iti putrasamākhyātaṃ niśamya sa pitā nṛpaḥ /
galadaśruviliptāsyaś cirād evam upādiśat // 211
hā putra kiṃ vadeyātra yat tvaṃ saddharmalālasaḥ /
tathā siddhyatu te sarvam abhiprāyaṃ yathā dhruvam // 212 ≈ L 200.10-11; H ii,44(vs.)10cd
iti pitrāsamādiṣṭaṃ bodhisattvaḥ sa ātmajaḥ /
[129b] pituḥ pādāmbuje natvā svālayaṃ samupāśrayat // 213
tatra śayyāsanāsīno dhyātvā sarvāñ jinān smaran /

nirvāṇasamayaṃ paśyaṃs tasthau saṃbodhimānasaḥ // 214

pitā śuddhodanaś cāpi rudan gatvā nijālaye /

ātmajo 'yaṃ vrajen nūnam iti dhyātvā nyaṣīdata // 215

iti me pūrvasaṃkalpam atra mayā tathocyate /

tvam api ca mahāsattva śrutvedam anumodatu // 216

śrutvedaṃ ye 'numodanti niryāṇaprārthanābhidham /

subhāṣitaṃ prasannās te bhaveyuḥ sugatātmajāḥ // 217

iti śāstrā samādiṣṭaṃ śrutv**āśoko mahīpatiḥ** {**or:** ānando mahāmatiḥ} /

tathety abhyanumoditvā sasabhyaḥ prābhyanandata // 218

// iti niryāṇānujñāsaṃprārthānāparivarto nāmonaviṃśatitamo 'dhyāyaḥ //

Apparatus criticus of the chapter 19

1a °āśoko mahīpālaḥ] A(ante corr.) B: °ānando mahāsattvaḥ A(post corr. marg.).

1b punar upāśrito mudā] A(post corr. marg.) B: om. A(ante corr).

3c a[śok]aṃ] A(ante corr.): a(!)nandaṃ A(post corr.): ānaṃdaṃ B.

4 note] The verses 4, 5, 6 and 7 are written in the margin of A (propria manu!)

11a 'mātyāḥ] corr.: 'mātyā A B.

12c kapāṭa*yantrāni] ex coni: kapāṭayatrāni A B.

12 note] After the verse 12, by the hand of a person other than the original scribe of A, the following verse is added in margin of A: ekaikaṃ ca kapāṭaṃ yat pañcapuruṣatair janaiḥ / udghāṭayanty apaghātayanti tacchabdam ardhayojane //. B has the same verse in body text.

19b janāḥ] A(post corr.): janān A(ante corr.) B.

19c mahotsāhaṃ] sic A B. Read *mahotsāhe?

21a samupāmantrya] A(post corr. marg.) B: samupāntrya A(ante corr.).

26a bhoḥ] corr.: bho AB.

27b viraktikaḥ] A(post corr.): viraktakaḥ A(ante corr.) B.

33c kāścin] A: kāścin na B.

35a ḍhakkāṃ] A(post corr. marg.): kāṃ A(ante corr.): ḍakkāṃ B.

39c samīkṣyaiv*āṅganāḥ] ex coni: samīkṣyaiva ganāḥ A: samīkṣyaiva gaṇāḥ B.

39d lajjābhinamatā°] A(post corr. marg.) B: lajjābhinatā° A(ante corr.).

41cd uddīptakāmāś ca saṃ°] A(post corr. marg.) B: uddīptakāmāḥ saṃ° A(ante corr.).

43a tataḥ] corr.: tatas A B.

43b bodhisattvo] corr.: bodhisatvā A B.

45c itīmābhiḥ] sic A B.

49b bhartur dharmā°] A(post corr. marg.): bhartṛdharmā° A(ante corr.) B.

49d samupāśrayat A(post corr. marg.) B: sapāśrayat A(ante corr.).

52a °paśyantyor] sic A B.

53b °*nurāgitau] ex coni: °nurāgite A B.

53d pramodantau] corr.: pramodantyau A B.

54b °darśanayūthi°] A(post corr. marg.) B: °darśayūthi° A(ante corr.).

57d hy evam] corr.: hyaivam A.: tyaivam B.

62a bhoḥ] corr.: bho A B.

68d saṃpaśyanty evam] corr.: sampaśyantyaivam AB

75b °siddhaḥ sa susiddha°] A(post corr. marg.) B: °siddhaḥ susiddha° A(ante corr.).

80b yatayo 'pi ca] A(post corr. marg.): yatayāḥ A(ante corr.): yatayāpi ca B.

81c 'pi] B: piḥ A.

83d *viṣaṇṇitāśayā] ex coni.: viṣaṇḍitāśayā A: viṣaṇḍitāśayāḥ B.

90d niḥśvasanty evam] corr.: niḥśvasantyaivam A: niśvamantyaivam B.

94d yāvat sutaṃ na pasyase] A(post corr. marg.): yāvac chrutaḥ na pasyase A(ante corr.): yāvac chruta vapasyase B.

95c avaśyam] A: avasyam B.

105b ta] corr.: te AB.

106d samācareḥ] A(post corr.): samācaret A(ante corr.): samācarat B.

107c dharmamayaṃ] A(post corr. marg.) B: dharma A(ante corr.).

110c praśaknūyāṃ] A (m.c.!): praśaknuyāṃ B.

111b sarvān asmān grased] A(post corr. marg.) A: sarvān a[..]grased A(ante corr.).

115d saṃsthito hi pravṛddhimān] A: saṃsthitābhiprevṛddhimān B.

124c °varṣeṇa] B: °vaṣeṇa A.

143a darśanaṃ] A(post corr.): saṃdarśanaṃ (ante corr.) B.

144d °ācarat] corr.: °ācaran A B.

151c tāvat] corr.: tāvan A B.

158c taṃ samāyātaṃ] A(post corr. marg.) B: tam āyātaṃ A(ante corr.).

161d *saṃprārthyaivaṃ] ex coni: saṃprārthaivaṃ A : saṃprārthevaṃ B.

179b °śarīre] A(post corr. int. lin.) B: °śalīre A(ante corr.).

184b duḥkha*bhoginaḥ] ex coni (cf. 189c): duḥkhabhāginaḥ A B.

192a saugatīṃ] A: saurgatiṃ B.

198a etāni saṃsāre A(post corr. marg.): etā saṃsāre A(ante corr.) B.

200b pitā] corr.: pitāḥ A B.

210c dattvānujñāṃ] D: dattvānujñā A B.

216 note] In A, letters of me pūrvasaṃkalpam seem to be newly overwritten letters by the hand of a person other than the original scribe of A (= Jayamuni).

218b °āśoko] A(post corr. marg.): °ānando A(ante corr.) B D ‖ mahīpatiḥ] A(post corr.): mahāmatiḥ A(ante corr.) B D.

Colophon: iti niryā°] A(ante corr.): iti śrīlalitavistare niryā°A(post corr. marg.) B D.

4.2　TJAM 第19章の和訳（全訳）

『出離することの許可を請う』という第19章

大地の守護者アショーカ (aśoko mahīpālaḥ) {**or:** 大士アーナンダ (ānando mahāsattvaḥ)} は歓然として再び近づいて、合掌してかの出家修行者を拝すると、次のように語りました。— [1]

かの尊師、大通慧者である菩薩はどのようにして都城から出離されたのか、それをどうかお教えくださり、我らすべてによく理解させて下さい。[2]

このように彼が乞うのを聞いて、かの阿羅漢・大慧者は、かのアショーカ {**or:** アーナンダ} とすべての聴衆を見つめて、次の様に教示しました。— [3]

その場にルンビニー園の精霊（デーヴァター）が虚空におり、かの大地の王シュッドーダナに話しかけて、語りました。[4]

「王様はどうかお知りください。あなたの息子である菩薩は三界において欲望をもたず、悟りを得るためにきっと出家されるでしょう。」[5]

このように精霊が語ったのを聞いて、シュッドーダナ王は精霊を見つめ、お辞儀し、ただちに立ち上がって、歩いてゆきました。[6]

彼は顔を流れる涙で汚し、不安に心乱れ、落ち込んだ心で、宮殿の屋上にいて、周囲を眺めながらずっと過ごしました。[7]

其処でシュッドーダナ王は大臣たちや友人たちの皆を見つめながら呼びかけて、その前で次のように命じました。[8]

「あなたたちはあの息子が都城から出離することがないよう、あなたたちの全員をもって、あらゆる点で努めなさい。」[9]

この王の命令を聞いて、かの大臣たちや家来たちは「かしこまりました」と答え、皆がその場から急いで歩み行きました。[10]

その地でかの大臣たちや家臣たちは速やかに王城の外側の周囲に壕を掘らせ、水を満たさせました。[11]

そして牆壁や城壁を周囲に建立させました。戸・門扉・閂をひどく堅固にさせました。[12]

また都城のあらゆる門には、鎧をつけ帯刀した兵士たちと軍の指揮官たちを配置させました。[13]

すべての十字路には兵士たちと将軍たちを置き、また乗物（馬など）を持つ軍の隊列を至る所に配置しました。[14]

このように道やあらゆる家の中庭にも車道や店の並ぶ地区にも、至る所に［兵を］配置して、次の様に命じました。[15]

「副王である大士が出家せんと願っている。それ故、ここで王家の系譜が途切れてしまうかもしれない。[16]

そこであなたたちはこうして夜の見張りを維持し、全員が集中して、夜も昼もよく眺めて、駐在しなさい。[17]

またあらゆる楽器を夜も昼も演奏し、至る所で途切れることがないよう、大きな歓楽を活発にしなさい。」[18]

このようにあらゆる場所には彼の守護をする人々がおり、大歓楽を演奏しつつ、喜悦して過ごしました。[19]

このように［王に］命じられた後、かの大臣や家来たちすべてはその通りに其処から去り、かの［王子］を守護するため、後宮の中にもやって来ました。[20]

其処で彼らは後宮の係官たちに呼びかけ、見つめながら、王からの命令をその通りに教えました。[21]

「かの王子は輪廻的生存を望まず、王位にいる人生期を捨てて、森のアーシュラマ（隠棲地）を欲しています。[22]

そこで、あの大士が森のアーシュラマに行くことがないよう、あなたたちは彼の［森に］去りたいという意欲を阻止していただきたい。」[23]

このように大臣などの人々が命じたのを聞いて、後宮の係官たちは皆「わかりました」と答え、急いで後宮の中に去りました。[24]

彼らは其処（後宮）に戻ると、かのラティ（女神の名）に似たすべての美しい、技芸という徳性の器である女たちに呼びかけて、次の様に話しました。[25]

「おおあなたたち、あらゆる［領域の］学をよく知る、美しい女たちは皆これを聞いて、王の命令をその通りに実行して下さい。[26]

あの王子・菩薩は欲望を疎ましく思い、王位にいる人生期を捨てて、出家することを望んでいます。[27]

そこであなた方は、彼の心が五感官の享楽（五欲楽）を楽しむよう、性愛の大きな歓びにおいて十分に欲望を起こさせなさい。[28]

王位にいる人生期を捨てて森のアーシュラマに彼が行ってしまわないよう、努力して支配して、王座にしっかり立たせなさい。」[29]

このように彼らが教示したのを聞いて、かれら若い女たちは、「かしこまりました」と返事をし、歓んで承諾しました。[30]

その後、シュリー（或る女神の名）に等しい姿かたち、またラティの姿に等しい身体をもつ彼女たちは歌や舞を演じることによって、大きな歓楽を活発化させました。[31]

或る女たちは欣然とムラジャ（太鼓の一種）の楽器を演奏して楽しみ、或る女たちはその時歌を歌いながら喜悦し、楽しみました。[32]

或る女たちはその時歓んでトゥーリヤ（打楽器の一種）の音色を鳴らしながら楽しみ、或る女たちは嬉しげに踊りの艶やかな美を演じながら楽しみました。[33]

或る女たちは笛の美しい音色を伴って歌唱を演じました。或る女たちは欣然とヴィーナー（琵琶）を歌を伴って演奏しながら楽しみました。[34]

或る女たちは歓んで歌を伴ってダッカー（大きな太鼓）を打ち鳴らして楽しみました。或る女たちは嬉しげにベーリー（半月型の太鼓）を叩きながら歓喜し、楽しみました。[35]

或る女たちは欣然とダマルやマンドゥ、ディンディマやジャルジャラ、マルダラやプラナヴァ（いずれも太鼓の一種）を演奏して戯れました。[36]

手拍子に従って踊る女たちは、舞踏で興奮せしめる甘い声で歌を歌いながら、装飾品（装身具）の光輝の照耀をともない、踊り戯れました。[37]

彼ら若い女たちは皆美しく、華麗な服と装身具で装飾され、五種の勝れた塗香を体につけて、よい香りの花々で身を飾っていました。[38]

かの副王（菩薩）を見て笑いながら近づいた或る女たちは、見られると、羞恥によって顔をうつむけました。[39]

或る女たちは流し目で見つめながら立ち、或る女たちは顔をうつむけ、また或る女たちは恋情を起こさせる艶めかしい嬌態を示しながら立っていました。[40]

或る女たちは羞恥心を捨てて［わざと］心を乱した女のように振舞いました。或る女たちは欲情を燃え立たせ、愛戯しようと身を寄せてきました。[41]

このように様々な方法、愛の遊戯の提示、微笑・踊り・嬌態をもって、彼女たちはかの若者を楽しませました。[42]

するとかの副王、感官を制御した者である菩薩は、性愛に愛著している彼女たちを見て、次のように考えました。[43]

「これらの美しい女たちは心が欲望・煩悩に掴まれているのだ。苦労してでも、なんとか私の心を支配し、迷わせようとしている。[44]

その場合、私の悟りの達成のための障害にきっとなることだろう。だから私は今、これらの者たちと一緒に欲望する者として、楽しむべきではない。」[45]

このように思案し、決意して、善慧者たるかの菩薩はそこから自ら立ち上がって、自分の住まいに歩いて行きました。[46]

其処でベッドの上に坐って、老人や病人や死者たちを思い出しながら、輪廻をやめた者（解脱者）を意欲して、悟りへと心を定めました。[47]

あらゆる有情に益をもたらすという、悟りの誓戒への意欲をもち、あらゆる仏たちを憶念しながら、瞑想に集中して住しました。[48]

其処で夫の法に敬い従う、かの妃ゴーパーは、夫がベッドに坐っているのを見て、近づいてきました。[49]

世俗の法を欲している彼女が傍に坐ったのを見て、菩薩は愛欲の心をもち、笑い、見つめました。[50]

かの妃も性愛の法を欲し、表情を明るくして、性愛の欲情に染まった夫に笑いかけ、見つめました。[51]

このように互いに見つめ合ったその夫婦の間に大きな愛欲の火が燃え上がり、心の堅持を焼き滅ぼしました。[52]

そしてその夫婦は抱き合い、大きな欲愛に染まり、笑いながら見つめ合い、歓喜しながら楽しみました。[53]

その時、栄光あるチャーリトラ・チャラナ・スダルシャナ・ユーティカという名のシャクラ（インドラ神）が天界から死没して、人間界にやって来ました。[54][18]

悟りに発願した心をもつ彼は、其処で［それを］見ると、ゴーパーの清らかな子宮の水に入り込みました。[55]

その時女神シュリーに等しいかの妃ヤショーダラー（＝ゴーパー）は歓喜し、正法の達成を強く意欲する、無垢の心をもつ女になりました。[56]

その後、煩悩が無い清浄な心をもつ女、ヤショーダラーは、夫であるかの大士を見つめながら、このように言いました。[57]

「わが君、私は今、心が煩悩を離れ、法を欲しています。それ故、私は布薩（ポーシャダ）という誓戒を行じたいと希望します。[58]

わが夫よ、もしあなたに法を願求する私に対して憐れみがありましたら、どうかあなたは仁慈のお心で、そのことの御許可を私に下さい。」[59]

このように妻が語るのを聞いて、智者たちの最高者であるその夫は深思し、瞬時に思考をまとめて、彼女の相好をよく観察しました。[60]

彼女の相を完全に認識すると、かの善慧者たる菩薩は、その愛しい妻であるゴーパーを見つめて、次のように教示しました。[61]

---

18. 釈尊の息子ラーフラとして生まれることになるこの神については既に第16章第116偈でも言及された。

「ああ、愛しい妻よ、あなたは幸せな女です。なぜならあなたの子宮に今日、一人の菩薩が天界から死没して、入ったからです。そのことを歓びなさい。[62]

そのために、愛しい妻よ、あなたの心は誓戒を行いたいと欲するのです。それ故、幸に恵まれた人よ、心を定めて、最高の誓戒を行いなさい。[63]

更にまた、ここで私の言葉をお聞きなさい。［私の］所願を語りますので、そのことに随喜をなして、誓願に集中して過ごしなさい。[64]

愛しい妻よ、私はガヤーの菩提道場に行き、菩提樹のもとに坐して、悟りを得たいと願っています。[65]

あらゆる悪しき外道師たちに勝利するため、仏のアーシュラマに住し、正法を教示して、生類の幸福を作りたいのです。[66]

その理由から、愛しい妻よ、私は出家することを願っています。私が此処に戻ってくるまでの間、あなたは心集中して過ごして下さい。」[67]

このように夫が語ったのを聞いて、貞節な妻であるヤショーダラーは、夫であるその大士を見つめながら、こう答えました。[68]

「私もあなたと一緒に出家したいのです。わが夫よ、あなた無しで、どうして此処でこの様に私は居られるでしょう。」[69]

このように妻が言ったのを聞いて、大慧者たる菩薩は、そのよき妻・有徳の女を見つめて、再び次の様に教示しました。[70]

「愛しい妻よ、私たち二人の益のためにも、私が語ることを聞きなさい。あなたの子宮に浄行の目的を有する大士が入ったのです。[71]

この勝れた人があなたのお腹にいる間、あなたは護るべきであり、大きな敬意をもって養うべきです。[72]

輝かしい徳性の依処であるこの人が、十分に体が育って誕生した時、彼と会うために私はきっと戻ってきます。[73]

あなたは私が語ったことを真実であると考え、堅固に心集中し、一切の仏たちを憶念しながら、歓んで過ごしなさい。」[74]

かのサルヴァールタシッダ —— 善き成就を［一切に］有する者たる彼は、このように教示して、プラティサラー（随求菩薩）の偉大な明呪を、誦しながらゴーパーに与えました。[75]

そしてその最愛の妻を菩薩は見つめ、その明呪（随求陀羅尼）の効能を教えて、次の様に言いました。[76]

「愛しい妻よ、この偉大な明呪はあらゆる災禍を防ぐものです。めでたい輝きがある善き徳性を保つものであり、あらゆる危難を消滅させるものです。[77]

それ故、どんな危難の時においてもこれを常に堅持し、思い出して、女神プラティサラーを瞑想しつつ誦して、行をなしなさい。[78]

この明呪の威神力により、すべての世界の守護神たちも、眷属を伴うマートリカー（母神）たちも、星々を伴う遊星たちも、[79]　また仙人たち、超自然力ある真言者たち、ヨーギン、出家者たちも、また菩薩・大士たちも、また僧団を伴った仏たちも、[80]　浄心をもつ彼らはどんな時でも常に憐れみの眼であなたを見守りながら、あらゆる悪しき危難から護ってくれるでしょう。[81]

このように考えて、この偉大な明呪を常に敬意をもって保持し、自分自身と子供とを護りながら行じなさい。」[82]

このように夫が語ったのを聞いて、かのヤショーダラーは愛の苦しみの焔に焼かれ、悲悩した心で過ごしました。[83]

その後、かのサルヴァールタシッダは母であるかのプラジャーパティー・ガウタミーのもとに行くと、お辞儀し合掌して、次のように言いました。[84]

「母よ、私はガヤーシールシャ（象頭山）で最高の誓行を行ってから、菩提道場に赴き、悟りを得たいと願っています。[85]

その後、カーシーの都に行って、ムリガダーヴァ（鹿の苑）における仏のアーシュラマで正法を説いて、生類を幸せにしたいのです。[86]

その後この地にも戻って来て、あなたにも会い、正法を説いて、常に幸せにしたいのです。[87]

その後、あらゆる場所で人々に正法を教示しながら、生類を法から成るもの変えて後、寂滅の至福に入ることを望んでいます。[88]

母よ、以上の理由により、私は出家することを願っております。その許可を私にお与えになり、法の輝かしい名声を得て下さい。」[89]

このように息子が語ったのを聞くと、かのガウタミーは混迷した意識の状態に陥りましたが、久しい後に意識を取り戻すと、溜息をつきながら次の様に言いました。[90]

「ああ運命よ、私がどんな悪いことをしたというのでしょう。私の唯一の息子であるその彼が私を捨てようと欲するとは、考えられないことです。[91]

それについて、ここで私に何が出来るでしょう。私の理性は引き裂かれています。この悲しみの火に焼かれている私をここで、誰が清らかにしてくれるでしょう。[92]

ああ、わが命よ、息子が行ってしまう前に、消え去ってしまいなさい。肉体が悲しみの火に焼かれている時に、［この体に］留まっても、お前にいかなる良いことが得られるだろう。[93]

お前（この命）は疑いなく、私のこの感官を伴う肉体を捨て去って、立ち去ってゆく。それゆえ、お前が息子を守れなくなる前に、すぐさま出て行くがよい。[94]

もし去らないのなら、その間お前はきっと苦しみを得るだろう。必ず去らねばならない。仏たちを憶念しながら去りなさい。」[95]

そう、母たるかのガウタミーは顔を涙で濡らし、嘆くと、その息子・大士を見つめて次の様に言いました。[96]

「王子よ、あなたは私にとって唯一無二の息子ではありませんか。どうして私と王国を構成する人々とを棄て、そして何処に行こうと望むのですか。[97]

一体あなたには苦悩が、また何かの恐怖が生じないのですか。言いなさい。父や親族たち、私や親縁の者たちを、あなたは棄てようと欲するのですから。[98]

また妻たち、愛しい美しい女たち、シュリーの如き容姿の者たち、ラティそっくりの者たち、これらすべての女も棄てて、どうして幸せを得ようと欲するのですか。[99]

もしこれらの女たちがあなたに棄てられたなら、あなたとの別離の悲しみの火に焼かれて、ヤマの住まい（死の国）に至ることでしょう。[100]

その時、あなたがもつ幸せ、福徳、すばらしい光輝ある名声と善き徳性とは一体何ですか。もし悟りにも達し、生類に益をなしたとしても。[101]

このように考えて、偉大な智者よ、今は王位にいる人生期に留まり、乞う者たちに好きなだけ布施をして、誓戒を堅持しつつ、楽しく暮らしなさい。[102]

あなたに息子が生まれたなら、法のもとで彼を育て、王位にいる人生期の中に安立させ、国王にして、それから去り行きなさい。[103]

体が老いに襲われ、感官が打ち負かされ、老衰した時、仏教の誓戒を堅持して、生類を益する行をなしなさい。[104]

もしあなたに森での仙人の行と誓戒への希望があるなら、その時に感官の対象の快楽を捨てて、森のアーシュラマに行きなさい。[105]

もしこのようにすれば、あなたには常に災のない幸せがあるでしょう。悟りにも達して、菩提行を行いなさい。[106]

正法を教示して、あらゆる場所で幸せな状態を作り、生類を法から成るものに変えて、善き寂滅の至福を得なさい。」[107]

このように母が諭したのをかの菩薩は聞いて、その母を見つめ、再び次の様に語りました。[108]

「母上、あなたが語られたことはもっともです。しかし私の言葉を聞いて下さい。なぜなら諸仏の行を行いたいと今、私は望んでいるのです。[109]

年老いて、体が老いに襲われ、病に感官が害されたなら、その時どうやって諸仏の誓行を行うことが出来るでしょうか。[110]

不意に死が突然、キス（鼻で嗅ぐようにするキス）をし、われわれすべてを呑み込むでしょう。輪廻的生存においては、三界［すべて］においても、誰もが死の支配下にあります。[111]

母上、このように見て、私は今、菩提行の誓戒を行いつつ煩悩・魔の諸群を克服し、悟りを得たいと望んでいるのです。[112]

その後私はあらゆる人々に正法を説き明かしながら、生類を法から成るものに変えた後、寂滅の至福に至りたいのです。[113]

ですからあなたは此処でどうか悲嘆をなされないで下さい。正法を行ずる私との別離の苦しみと危惧も、決してお考えになってはなりません。[114]

なぜなら、私の種として、ゴーパーの子宮の中に一人の菩薩・大士がおり、成長しつつあります。[115]

この者が男の子として生まれた時、私のその息子の顔を見て会うために、きっと私は戻ってきます。[116]

此処に私は常に住して、［彼を］訓育し、正法の成就がある菩提道に安立せしめ、生類の益のために行為せしめます。[117]

以上、私が語ったことは本当であり、母上よ、聞いて理解をなされ、悲嘆されないで下さい。此処で私の正法の成就をお喜びになってください。[118]

母上、妊娠した息子の嫁、ヤショーダラーを、あなたは常に篤い配慮をもって守護されて、自分の娘の如くお守りになって下さい。[119]

また私の愛しいこれらの美しい女たちすべてをも、私が此処に戻ってくるまで、あなたは守護し、お守りになって下さい。[120]

きっと私は此処に戻って来て、これらのすべての女たちによく理解を得させ、菩提道へと繋ぎ入れて、常に浄行を行わせましょう。[121]

母上、このように御教示になり、努力して理解を得させ、励ましながら、守護し、お守りになって下さい。[122]

私が正法を説き明かすために此処に戻ってくるまでは、あなたも善逝たちを憶念しながら、心集中してお過ごし下さい。[123]

悟りを得た私は、きっと最初にここに戻って来ます。正法という不死の甘露の雨をもってあなたたちを必ず歓ばせます。[124]

以上のことを正しく認識されて、私が此処に戻ってくるまでは、これらの女たちをお守りながら、お過ごしください。悲嘆されてはいけません。」[125]

このように息子が語ったのを聞き、かのガウタミーはよく理解を得たものの、愛情の苦しみの火に焼かれながら、溜息ばかりつきながら過ごしていました。[126]

それを見て、かの女たちすべてがただちに集まって来ました。その母を見つめながら取り巻いて、かしずきました。[127]

かしずくそれらの女たちを見て、眼に涙を浮かべたガウタミーは、すべての女たちに理解を得させるために、見つめながら次の様に語りました。[128]

「［皆さんの］かの夫たる大士は生類の益のため悟りを欲し、私たちすべてを棄てて、出家しようと願っています。[129]

それ故、あの人が悟りに達してから此処に戻ってくるまでの間、美しいあなた方は皆、心をしっかり保って過ごして下さい。」[130]

このように彼女が語ったのを聞いて、すべてのその美しい女たちはかの夫のもとに赴き、深く頭を下げて、次のように語りました。[131]

「わが君、私たち全員もあなたと同様に一緒に誓戒を行うことを欲します。それ故、あなたは私たちに［そのご許可の］恩情をおかけ下さいますように。[132]

あなたのご命令を頭に戴いて、心を定めて、私たちは行動いたします。それ故、あなたは優しい心で私たちをお導き下さい。」[133]

このように彼女らが語ったのを聞いて、かの善慧者たる菩薩は、かれら美しい女たちすべてをみつめながら、次の様に教示しました。[134]

「あなたたちは皆若い女であり、菩提行をなすのは甚だ困難です。それ故、さしあたって今は、あなたたちはそのように行動することは出来ません。[135]

そこで、私が悟りに達して此処に戻ってくるまでの間、あなたたちは心を定めて、誓戒を行じながら過ごして下さい。[136]

私は悟りに達してから最初に此処に戻って来ます。正法という不死の甘露の飲物によって私は必ずあなた方を満足させます。[137]

以上のことを正しく認識して、あなたたちは皆、心集中して、仏たちを憶念しながら誓戒を堅持し、心をしっかり保って過ごして下さい。」[138]

このように教示すると、かの菩薩は立ち上がり、去って自分の住まいに戻り、瞑想に集中して過ごしました。[139]

それらの若い女たちも皆、お辞儀して自分の住まいに戻り、夫たるかの人を憶念しながら、瞑想に集中して過ごしました。[140]

さてある時、寝台に横たわっていたかの菩薩は起き上がり、出家の時［の到来］を見て、静思して、次の様に考えました。[141]

「父である王・大地の守護者の許可を得ないで、私が気づかれずに［ここを］出離することは適切でなく、最もよいことではない。[142]
それ故、父と会って、慰めながら許可を得、明るく澄んだ気持ちで出離しよう。そうするのが私にとって最もよい。」[143]

そのように決意して、清浄な心をもつ菩薩は立ち上がり、父たる王の宮殿に進み、近づきました。[144]

威神力をもつかの菩薩はその宮殿の屋上にいて、三昧に心を集中し、光明を発しながら留まっていました。[145]

その光明はその宮殿の王の住まいに拡がり、輝かせながら黒闇を打ち破り、昼間のように明るくしました。[146]

シュッドーダナ王はその拡がった光明を見て、気づいて、「一体、今や早朝になって、太陽が昇ったのだろうか」と、[147]　そう呟きながら、起き上がり、周囲を見渡しながら驚嘆し、侍従を呼んで、次の様に尋ねました。[148]

「一体、今やもう早朝になって、今太陽も昇ったのだろうか。なぜなら、此処でこの拡がった光明が宮殿を輝かせている。」[149]

このように尋ねられた侍従は、立ち上がり、よく観察してから、王の前に行き、次の様に言いました。[150]

「閣下、今は夜であり、真夜中を過ぎておりません。どうして今、夜明けとなるでしょうか。どうして太陽が昇るでしょうか。[151]

太陽が昇ったなら、地面に影が生じるはずです。もし暁なら、あらゆる鳥たちが啼き、犬たちも起きて吠えるはずです。[152]

この光明は心に快く、清涼であり、安楽を生じさせるものですが、太陽光は体を熱して、暑い熱を拡げるはずです。[153]

きっと此処に大通力をもつ菩薩が来られたのです。彼がもつ美しい輝きがこの住まいに放たれたのです。」[154]

このように彼が語ったのを聞いて、［菩薩の］父たるかのシュッドーダナ王は立ち上がって、外に出て、あらゆる所を観察しました。[155]

その時、発せられている光明を見て、かの王は驚愕を得て、これは何者の光明が来たのだろうと熟慮しながら、観察しました。[156]

其処でかれはあらゆる所を観察すると、かの息子である菩薩が宮殿の屋上に居て、瞑想しながら留まっているのを見つけました。[157]

彼を見ると、かの父王はすぐ近づきました。やって来たかの父を見て、息子である彼は立ち上がりました。[158]

其処で、父たるかの王はその光り輝いている息子を見つめながら近づくと、清浄な座に坐りました。[159]

すると光り輝きながら、かの菩薩・大士もその父親を見つめて、深くお辞儀をすると、近づいて坐りました。[160]

其処で、光輝ある菩薩・大士は合掌しながら、明るく澄んだ思いで、かの父に請い願いました。[161]

「父上、私は正法を行じたいと願っております。どうかそのことの許可をお与えくださって、私に法の輝きと名誉を得させて下さい。」[162]

このように息子が語ったのを聞いて、父であるかの王は滴る涙で顔を濡らし、その息子を見つめながら、次の様に教示しました。[163]

「ああ、息子よ、どうしてお前は私たちを棄てて、出家したいと願うのか。一体、どんな苦しみや怖れがお前にあるのか。私はそれを取り除こう。言いなさい。[164]

もしお前が王権を欲するなら、お前に必ず一切を譲ろう。今日、灌頂を行い、人民の益のために私はお前を王位に立たせよう。[165]

年老いた私は誓戒を行うため、森のアーシュラマに行くことにしよう。それ故、お前は王位にいる人生期を過ごして、人民の益になる誓行を行いなさい。[166]

もしわれわれ二人がこのようであるならば、法の輝きのめでたい幸が常にあるであろう。この私の言葉を聞いて、今は家の［存続のための］誓行を行いなさい。[167]

お前も年を取った時に、望むなら［森に］去りなさい。今お前に息子がいないのに、どうして王権を棄てて出離しようとするのか。[168]

もしお前に息子が生まれれば、彼に統治の法を教育してやり、灌頂して国王にしてから、その時に諸仏の誓戒をお前は行いなさい。」[169]

このように父が語ったのを聞いて、善慧者たるかの菩薩は、その父である王を見つめながら次の様に言いました。[170]

「わが父、王よ。何のために私が出家せんと望むのか、どうかお聞き下さい。それを私はあなたにお話しします。決して悲嘆せず、［御許可の］恩情を私におかけ下さい。[171]

父よ、この輪廻的生存においては、様々な苦しみと怖れがあります。それらを観察して、私の心は悟りのための誓行を願うのです。[172]

輪廻的生存においては、最初に、母の胎に入った時に大きな苦があります。まるで地獄のように［胎児の］体はずっと不浄の中に浸されたままでいます。[173]

そのように不浄と混じり合っていた［胎児］は、誕生の時にようやく母の胎から苦しみを伴って外に出て、ひどく惑乱した意識の状態で横たわります。[174]

その後幼年期に、愚かな心をもつ者として、動物のように分別なく、全身が飢えや渇きの火に焼かれ、ひたすら泣くばかりで過ごします。[175]

少年期には、遊びたいという欲望に悩まされ、入手できないのに美味に愛著して苦悩し、闘諍に絶えず悩んで、大きな苦があります。[176]

青年期には、愛欲・煩悩の火に焼かれて大きな苦があり、儲けることの苦労に悩む心はいつも落ちつきません。[177]

成功や栄光の瞬間も、雲のように無常です。親しい友達もたちまち悪人になって、害を与えるでしょう。[178]

年を取ったなら、老いに体は襲われ、感官は老衰し、享楽においても意欲が失せます。まして法を成就することがありえるでしょうか。[179]

様々な病気は体力と勇健さを害して、法の光輝を達成する意欲を破壊してしまう大きな敵です。[180]

また死は生類の殺戮者であり、暴悪で、冷酷な心をもち、安心できず、防御不可能で、あらゆる任務に終わりをもたらす、力ある者です。[181]

輪廻においてこれらの苦しみと怖れによって悩害されたあらゆる者は、欲望の享受の対象に甚だ愛著し、好きなように行為します。[182]

そして彼らは欠損した心をもち、煩悩と慢心・驕慢を有し、恐ろしい犯罪にすら愛著し、楽しんで行為します。[183]

そして彼らは極悪人として悪しき運命をもち、苦を味わい、堪えられない苦受に襲われて死んで、ヤマ（死王）の住まいに赴きます。[184]

やって来た彼らを見て、公平に裁くかの法王（ヤマ）は、彼らの業を調べて、業果を味わうように行き先を命じるでしょう。[185]

［法王の］部下たちはただちに悪人たちを導いて、地獄に投げ入れます。彼らは遵法者たちをよく見て、神々の住まいに行かせます。[186]

其処（天界）で善行者たちはあらゆる天の至福・快楽をそなえ、慢心・驕慢をもち、愛楽して、好きなように行為します。[187]

その後、心が煩悩に汚され、放逸となって悪罵をなす彼ら（神々）は、運命に従って死没して、地獄にすら堕ちるでしょう。[188]

其処（地獄）で彼らすべての悪人たちは自分の業を享受しながら、苦を味わい、あらゆる［種類の］地獄を彷徨うでしょう。[189]

その後、彼らは激しい苦痛に苦しめられ、心は後悔に打たれて、「ああ苦しい」と言いながら悲悩して過ごすでしょう。[190]

しかしもし彼らが善逝（仏）を思い出して、帰依の心で礼拝するなら、その時善逝たちは彼らを見て、白浄の光明を届かせ、[191]　仏の示現の姿を化作して、彼らのもとに送ります。それらの仏の姿を見て、彼らすべてはその光明に包まれます。[192]

安楽であることの驚きに満たされて、それらを見て歓喜し、その前に近づき、歓んで礼拝するでしょう。[193]

その時、浄らかな心で、清浄な感官・身体をもった彼らはその後、上に昇って、仏の住まいであるスカーヴァティー（極楽）に至るでしょう。[194]

このように諸仏こそは、あらゆる所で生類に利益を施す者です。それ故、彼らに帰依をなして、常に誓戒を行うべきなのです。[195]

仏たちに帰依し、常に誓戒を行う者たちは、悪い世界（悪趣）には行きません。仏の住まいに赴きます。[196]

父上よ、このように私は認識して、仏たちに帰依し、菩提行の誓戒を堅持しつつ、悟りを得たいと願っています。[197]

更にまた、輪廻におけるこれらの様々な苦しみをも怖れをも観察して、私は出家したいと願うのです。[198]

以上のことを正確に認識され、もしあなたが正法を希求するのでしたら、その［出家行］への許可を私にお与えになって、絶えず浄行をなさって下さい。」[199]

このように息子が語ったのを聞いて、父である王は愛情の苦しみの火に心が焼かれ、しばし混迷した意識の状態に陥っていました。[200]

久しい後にかの王は意識を取り戻し、目覚めると、眼から涙を流し、再びかの息子を見つめて、次の様に語りました。[201]

「三界において、一体誰の輪廻的生存において、苦しみと怖れが存在しないだろうか。どんな者にも至る所で、不可避なる諸状況があるのだ。[202]

この世界で誰が老い・病・死によって接吻をされないだろうか。これらの者たちは皆、自分の運命に従って刹那の成功と不運の時をもっている。[203]

だから若い間は、ここで王たることの誓行を実行しなさい。年を取ったら仏教の誓戒を堅持し、専念して行じなさい。」[204]

このように父が語ったのを聞いて、大慧者たる菩薩は、その父を見つめて、再び次の様に言いました。[205]

「老い、非力となり、老衰して、享楽においても歓喜心が失せた者が、どうして悟りに達して、菩提行の誓戒を行じることができるでしょうか。[206]

輪廻的生存においては自分の運命により病も災難も死もあると、そう思いながら、私はここでそのように王位を楽しむことはできません。[207]

法こそが生類の救護者であり、どんなところでも常に付き添って［守って］くれる者です。それ故、正法を得るために、私は出家したいのです。[208]

もしあなたに私への愛情があるのでしたら、このことの御許可を私に下さい。この法の力によって、あなたも正法を得ることでしょう。[209]

私の三界の生類を益する仕事に対して、妨げをなされてはいけません。仁慈のお心で許可をお与え下さり、私に浄行を行わせて下さい。」[210]

このように息子が語ったのを聞いて、かの父である王は、こぼす涙に顔を濡らし、長く経ってから、次のように言葉を与えました。[211]

「ああ、息子よ、ここで私は何を言えるだろうか、お前は正法を熱望しているのだから。お前のすべての目標がその通りにきっと成就されるように祈る。」[212]

このように父が教示されたのを［聞いて］、息子であるかの菩薩は父の蓮華の両足を拝むと、自分の住まいに赴きました。[213]

其処でベッドに坐って瞑想し、あらゆる仏たちを憶念しながら、涅槃のための時を見ながら、悟りに心を向けて、過ごしました。[214]

一方、父たるシュッドーダナ王は泣きながら自分の住まいに行き、「きっとあの子は出離するだろう」と思い耽りながら坐っていました。[215]

── 以上、私の昔の決意を、ここで私はその通りに語りました。大士よ、あなたもこれを聞いて、随喜されますように。[216][19]

『出離［の許可］を請う』という名のこの善説を聞いて随喜する者であれば、その悦ぶ者たちは、仏の子となることでしょう。── [217]

以上のように師が教示されたのを聞いて、大地の王アショーカ (āśoko mahīpatiḥ) {**or:** 大慧者アーナンダ (ānando mahāmatiḥ)} は「わかりました」と随喜して、集会の出席者たちと共に喜んで信受しました。[218]

『出離することの許可を請う』という品、第19章［おわる］。

※本研究は JSPS 科研費（21H00470）の助成を受けたものである。

＜キーワード＞　ネパール仏教、仏教説話文学、仏伝、Tathāgatajanmāvadānamālā, Mahāvastu, Lalitavistara, Buddhacarita, Karuṇāpuṇḍarīkasūtra

（九州大学大学院教授, Ph.D.）

19. この 216 偈で「以上、**私の**昔の決意を」（iti me pūrvasaṃkalpam）という表現があり、この表現に従えば、この説法はウパグプタではなく「私」すなわち釈尊によってなされたことになる。ただしこの me pūrvasaṃkalpam の箇所は、字が筆写人 X (= Jayamuni) の通常の筆跡と違っているため、この箇所だけ後から字が上書きされて修正された可能がある。

南アジア古典学　第 17 号
2022 年 7 月 30 日発行
編集委員会：岡野潔，片岡啓
発行者：九州大学文学部インド哲学史研究室
〒 819-0395　福岡県福岡市西区元岡 744
イーストゾーン　九州大学文学部
Tel & Fax 092-802-5087
https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~indology/
印刷所：福岡市博多区博多駅前 1 丁目 23 番 28 号
（株）ヨシミ工産
Tel 092-481-9559
www.e-yoshimi.jp/company.html

South Asian Classical Studies　17
July 30, 2022
Edited and published by
Department of Indology
Kyushu University
Motooka Nishi-ku Fukuoka-city
Fukuoka 819-0395　JAPAN
Editorial Board: Okano Kiyoshi, Kataoka Kei
Printed by Yoshimi

ISSN 1881-2074

南アジア古典学

2022 第17号

目　次

Kalpalatā と Avadānamālā の研究（11）
—TJAM 第 16 章〜第 19 章— ..... 岡野　潔　1

梵文『法華経』における動詞 *ās* の活用について
..... 笠松　直　125

ジュニャーナシュリーミトラ著『ヨーガ行者の確定』和訳研究（中）
..... 護山 真也　137

ガワンタシ著『縁起大論』研究：「業の解説」訳註
..... 矢ノ下 智也　161

ネパールの演劇写本
ジャガトプラカーシャ・マッラ王のネワール語歌集（5）
ルクミニー誘拐 ..... 北田　信　179

『バーヴァナーの分析』における sāmānādhikaraṇya 議論：
クマーリラからマンダナへのバーヴァナー理論の進展について
..... 斉藤　茜　189

Śāntarakṣita's Answer to Kumārila's Critique of the
Buddha's Speakerhood ..... Kei Kataoka　241

九州大学大学院人文科学府・文学部
インド哲学史研究室

SOUTH ASIAN CLASSICAL STUDIES

No. 17 2022

CONTENTS

A Study of the *Avadānakalpalatā* and the *Avadānamālā*s (11)
— TJAM Chapters 16–19 — ..... Okano Kiyoshi 1

The Present Forms of *ās* in the *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*
..... Kasamatsu Sunao 125

An Annotated Japanese Translation of Jñānaśrīmitra's *Yoginirṇaya* (II)
..... Moriyama Shinya 137

A Study of *rTen 'brel chen mo* by Ngag dbang bkra shis:
An Annotated Translation of the Section Entitled "Explanation of Karma"
..... Yanoshita Tomoya 161

Dramatic Manuscripts from Nepal:
Jagatprakāśa Malla's Newari songs (5)
Rukmiṇīharaṇa ..... Kitada Makoto 179

Discussion on *Sāmānādhikaraṇya* in Maṇḍana Miśra's *Bhāvanāviveka*
..... Saito Akane 189

Śāntarakṣita's Answer to Kumārila's Critique of the
Buddha's Speakerhood ..... Kataoka Kei 241

KYUSHU UNIVERSITY
DEPARTMENT OF INDOLOGY